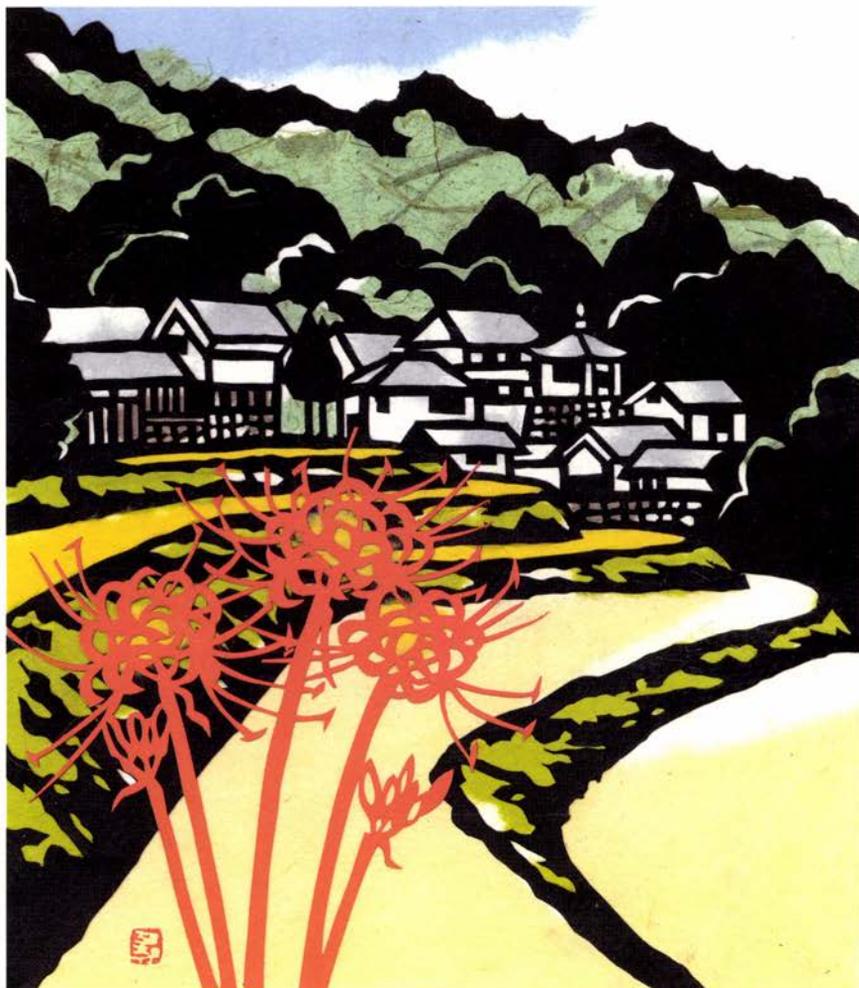


川柳塔

昭和四十一年一月九日発行 第三種郵便物認可
平成十七年九月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷九四〇号

日川協加盟



No. 940

九月号

第11回 川柳塔まつり

《同人総会》

と き 10月10日(月・祝日) 午前10時～11時半
ところ ホテル・アウリーナ大阪 3F 生駒
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441)
議 事 平成16年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成17年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と き 同日 午前11時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウリーナ大阪 4F 金剛中・西
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし 「世界遺産・紀伊山地の霊場と参詣道について」 三宅保州
兼題 「若い」 (奈良) 大内朝子 選
「栄える」 (大阪) 前たもつ 選
「のぞみ」 (東京) 播本充子 選
「例えば」 (鳥取) 新家完司 選
「つくる」 (岡山) 濱野奇童 選
「つばさ」(事前投句・8月31日締切) 河内天笑 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午・午後4時半終了予定

会 費 2,000円(記念品呈)・当日いただきます。

《懇親宴》

と き 同日 午後5時～7時半
ところ ホテル・アウリーナ大阪 3F 葛城
会 費 7,000円
宿 泊 ホテル・アウリーナ大阪 8,000円(朝食付)

- ◇事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌同封のハガキに明記の上、8月31日(水)までに本社事務所宛お願いします。
- ◇懇親宴・宿泊のご送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙でお願い致します。
- ◇記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

主催 川柳塔社

川柳の群像

大八文庫による川柳展

河内 天 笑

昭和五十七年九月号より、平成十三年八月号まで本誌に「川柳の群像」として、物故者の人物像を執筆下さった東野大八先生は、平成十三年七月十八日八十七歳の生涯を閉じられた。

先生の長女である古藤邦夫・愛子ご夫妻により、六月二十五日から七月三十一日まで、岐阜県立博物館マイ・ミュージアム・ギャラリーで先生の集められた川柳資料（本、手紙、写真、色紙など）の展示が行われた。

四回目のご命日にあたる七月十八日、同所のハイビジョンホールで、黒野こうき氏による講演会「川柳と東野大八」が開催されるにあたり、川柳塔から十名で出席した。会場は交通の便の悪いところであったが、古藤夫妻のご厚意により車で送迎して

いただき、講演にさきだち展示物の案内など大歓迎をして下さった。緑に囲まれた博物館は近代的な建物で、心まで癒されるたずまいであった。

先生の川柳資料のコレクションは、二十年前の水害で五分の四が失われたという。泥に汚れた資料は丁寧に拭き取り、乾かし大切に保管されている。それらのどれもが貴重なもので、先生の川柳に対する愛着を物語っていた。

近頃、古い著名な川柳家が亡くなるたび、貴重な資料が捨てられたり、散逸するのが惜しまれているが、こうしてご遺族の手によって引継がれ、公開されてゆくことは有り難くて、胸が熱くなる思いであった。

講師、黒野こうき氏は昭和二十七年生まれ。岐阜県加茂郡在住の画家、詩人で詩誌『さきりん』を主宰しておられ、先生の晩年のよき理解者であった。お二人の交流のエピソードを数々語られ、改めて先生の存在を身近に感じたことであった。

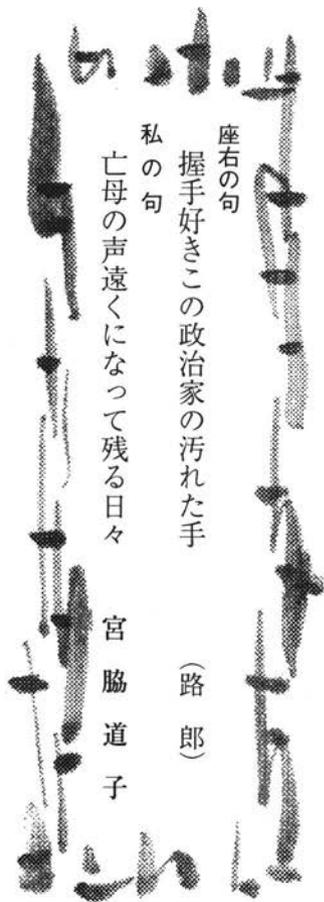
ジャーナリストとして、川柳の社会的地位向上のために、柳社を問わず論評を書き続けられた大八先生であったが、句碑や句集を出すのを頑なに断ってこられた。しか

し、中国大陸時代の柳人仲間「琥珀の会」の共同句碑が、昭和五十九年四月に山梨県甲府市に除幕され、

友ありき風林火山の旗のもと 大八
が仲間入りしている。

著書については、「風流人間横丁」、「没法子北京」、「人間彩影記」など数多くあるが、句集は前記の古藤夫妻によりつって今回 はじめて「ああしんど」が発刊され、講演会当日夜にシテイホテル美濃加茂で出版記念会が行われた。句集の題の由来は、三人の娘さん達に自分の生涯を書き遺された折、一気呵成に書き上げられたらしく、最後に「ああしんど」としたためであった。一泊して出版記念会に出席した田中正坊夫妻を残し、我々は「ああしんど」をお土産に頂戴し、帰路についた。

むらさきの山少年は古い易し 大八
新鮮な玉子がふくみ笑いする
菜の花のあたたかさにはかなわない
一滴の水がひろがり詩と出合う
民話あり熊の甚平と笹の花
死にかけた話他人は笑うなり
一本の腕へ或日は力こぶ



座右の句

握手好きこの政治家の汚れた手

(路郎)

私の句

亡母の声遠くになって残る日々

宮脇道子

川柳塔 九月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「明日香の秋」

■巻頭言 川柳の群像 大八文庫による川柳展……………	河内 天笑 ……	(1)
選をする、ということ……………	新家 完司 ……	(2)
川柳塔(同人吟)……………	河内天笑選 ……	(4)
川柳塔の川柳讃歌(7)……………	木津川 計 ……	(53)
自選集……………	……………	(54)
水煙抄……………	板尾岳人選 ……	(58)
愛染帖……………	新家完司選 ……	(79)
大八文庫による川柳展講演会に参加して……………	……………	(82)
俳風柳多留二四篇研究 82……………	……………	(84)
檸檬抄「賑やか」……………	仁部 四郎・藤田泰子共選 ……	(86)
「汗」……………	……………	(88)
「涼」……………	矢倉五月選 ……	(88)
「アウトドア」……………	多々納テル子選 ……	(88)
……………	久保田千代選 ……	(89)

選をする、ということ

新家 完司

出席者が少数の月例会であれ、百名以上の川柳大会であれ、選をさせて頂いた時、いつも忸怩たる思いが残り、「いい選ができた」と満足したことは一度もない。

いい句が良くない句か、入選か没か、の判断は、自分なりの川柳観で捌けば良いので、さほど難しい作業ではない。また、その結果に対しては少々の自信もある。問題はその後順位付けである。

そもそも、作者の思いがこもった優れた作品は、それぞれが、他者の作品とのかかわりを嫌う屹立した一句であり、優劣を付けること自体が無理な話。大袈裟に言えば理不尽なことである。しかし、入選か没かの選汰だけではなく、順位付けまでが選者の勤めであれば、無理を承知で取り組まざるを得ない。かくして、いつも、気持の整理がつかないまま、釈然とせぬまま、選を終えることになる。

だが、その「忸怩たる思い」、「釈然としない感覚」こそ大切なのではないか。そのような思いが、より一層「良い選をしなれば」という自省に繋がり、向上心の源になるのではないか。「私の選は日本一」。反省することなど何もない

初歩教室「台風」……………三宅保州…(90)

秀句鑑賞「同人吟」……………早川盛夫…(92)

「水煙抄」……………寺川弘一…(94)

「ああしんど」……………田中正坊…(83)

■句集紹介「軌跡」……………木本朱夏…(95)

「老春譜」……………長浜美籠…(96)

■エッセー「小判の値打ち」……………穴吹尚士…(97)

蛙さんありがとう……………谷口義…(98)

八月本社句会……………各地柳壇(佳句地十選/小泉ひさ乃)…(100)

各地柳壇……………柳界展望……………(104)

九月各地句会案内……………(120)

■編集後記……………楓楽・希久子…(122)

座右の句

愛情の絆七くせみんな好き

(由多香)

私の句

大空を見あげて狭い心掃く

福島庸二

と思う選者がいたとしたら、それこそ「傲慢」というものではないか。等と、気弱になりがち

な自分を慰めている。

さて、今年の九月発表分から、「愛染帖」の選を仰せつかった。そして、今、机の上に選を終えたばかりの「愛染帖」の応募用紙が、入選と没の束に分けて積んである。二百四十二名の方々の七百二十六句を、充分に時間をかけて、慎重に選ばせて頂いた。結果、百十一名の百二十五句が入選となった。十二名の方が二句入選。九十九名の方が一句入選。なんと、半数以上の方々が全没となり、句数による入選率では17%であった。

この「愛染帖」の応募用紙には、作者名が明記されている。その作者名が選考作業に少々邪魔にはなったが、勿論、選で最も重要なことは「公平無私」。作者が誰であろうと、選の基準にブレが生じてはならない。そのように心がけ、そのように選をしたつもりである。没の束を見れば、親しい方々がたくさんおられる。しかし、いつの場合でも「公平無私」を信条としている小生を見て下さっているはず。没で残念、と思われる気持と同時に、右の入選率ではやむを得ないと納得して頂けるであろう。

選をする、ということは、素晴らしい句に出会える楽しみと引き換えに、このように、何かと気苦勞の多いことである。



河内天笑選

奈良県 渡辺 富子

温暖化迎え撃てるかクールビズ

徴はえた男をずらり土用干し

針千本飲んで男はしらを切る

しゃあしゃあと鼻もちならぬ結果論

まずいもの食べれば下がる血糖値

母逝つて殊更燃える彼岸花

米子市 澤田 千春

銀木犀の香りの中で母と会う

似た人と呼ばば冷たく振り返える

人も木も個性ゆたかに生きている

下り坂 仏に声をかけられる

メールから届くかすかな森の息

歳重ねつる草の気をもraitたい

吹田市 太田 昭

キャンバスにゴッホの黄色盛り上げる

底辺に生きて片意地張り通す

白寿の母今朝も二歳の子で甘え

海ゆかば石原裕次郎に逢う

小笠原流の義母が帰つてごろ寝する

普通車に乗ってグリーン車から降りる

西宮市 西口 いわゑ

七月の風 泣き虫を抱きしめる

白馬の王子 天へ天へと風にのり

今を生き自分の位置をたしかめる

万華鏡におとぎの国へいざなわれ

恋いくつ歴史の中に折りたたむ

耳をすまして遠い太鼓を聞いている

富田林市 藤田 泰子

もう萩が咲いてる風の通り道

エステ整形私に縁のない会話

セブテンパーソングを鳴らし秋を売る

シャワーよりお風呂にしよう夏涼し

さびしさを残して消えた大火花

お医者さまご無沙汰ばかりしています

藤井寺市 楠 昭子

振り向けばプラスマイナスゼロで良し
人生は笑いと涙の振り子だな

この出会い未来を拓くカギだった

私の都合は聞かぬうちの猫

スパイスをあれこれ買って夏に乗る

恋すると心が弾みみな許す

京都市 高 島 啓 子

人間が減ればカラスも減るだろう

ブラウスの肩はみ出している鎖骨

銀行のくれた種子だが芽が出ない

サキソフーン吹く人のあり橋の下

地下鉄に広告のある質屋さん

ハンサムな人改札で見失う

弘前市 高 瀬 霜 石

賽銭に合ったちいさな願い事

父帰るすこし汚れている背広

食べたいと痩せたい同居して困る

お互いに切りそびれてる長電話

七輪で焼いたサンマはよく喋る

婦唱夫随まずはハンゲル語を習う

藤井寺市 太 田 扶美代

コーヒフROOT別れの刻を遅らせる

要領の悪い分だけよく歩く

枯れた花土に還してやる情け

ずるい人時々死んだふりをする

セールスが残してくれた美辞麗句

茫々と窓いっぱい哀しみや

大阪市 古今堂 蕉 子

若作りしてドッコイシヨ言うてはる

信号も渋滞もなし夏の恋

過剰包装そんな男はいりません

ヘルシーメニュー昔精進料理とや

マジシャンの逆の手じつと見ています

四つの耳で聞いた祝辞を忘れるな

吹田市 須 磨 活 恵

介護料 有無を言わさず引いてある

残高へ命の計算してしまふ

まあいつか財産もなく借りもなく

一言のアドリブ息の音が止まる

悔いのないように聞こえる蝉しぐれ

ひと夏の挽歌奏でる遠花火

尼崎市 田 辺 鹿 太

ありのまま泣いて笑って家族です

陽が昇る毎朝違う顔をして

汗くさいシャツに若さがまだ残る

長雨が止み入念に歯を磨く

幸せな時は言葉に張りがある

寝るとすぐ軒気楽な人と住む

松山市 古手川 光

向日葵が水が欲しいとお辞儀する
転がされ国籍変つて行くアサリ
証拠隠滅した犯人はシュレッダー
ロボットの進化へヒトは退化する
人人人 皆せかせかと皆無口
哲学の道で読むのはマンガ本

米子市 林 瑞 枝

太陽を溶かして海は愛無限
精いっぱい今を生き抜く針の耳
川の水澄むまで明日を考える
背筋から消えないちちの足の跡
輪のなかの自由愉しく輪に融ける
回想の胸で蚕が糸を吐く

堺市 石 堂 潤 子

相談をしていて自我を押し通し
まだ七十もう七十と言う勝手
晩学のキャンパスゆつくりと埋める
外人もハハハと日本語で笑う
ドクターの許可一合が有り難し
美しい嘘で一体どんな色

鳥取市 近 藤 佳 子

変り身の早い女が勝ち抜ける
もろもろを笑いとばせる歳となり
トンネルを抜けたら別な欲が湧き

踏み入れば元気をくれる森の精
浮雲にカラフルな夢のせて追う
行間でまた逢いたいと言っている

河内長野市 村上直樹

コスモスのその色々にある余薫
老母の愚痴聞く妻の愚痴聞いてやり
お似合いといわれ喧嘩もままならず
胸一杯吸った空気の美味い朝

二万歩がノルマイのちの汗をかく
ざんぶりこ溢れるお湯をひとり占め

鳥取市 倉 益 一 瑤

夕焼けがきれい溺れてみるもいい
見せたい女 見たい男にある水着
溺れそうになると念仏唱えだす
点線をたどれば弥陀のてのひらよ
悪ぶっているが少年いい奴さ
涙するたびしたたかになつてゆく

寝屋川市 森 茜

シースルーエレベーターの中も雨期
お香典包んだ袱紗しめつぽい
安売日ためらいもなく水を買う
まっ白はマジック好きな色になる
あこがれが強くて勇み足になる
労ると母に弱気の虫でそう

交野市 田岡九好

下校バトはくは黄色のおじいさん
拉致されたように蛍がいなくなり

ブランドを脱げば無印並の人

カツカレー食べる間の別れかな

一日があつと言う間の風呂の音

ネガティブな言葉はよそう五月晴れ

出雲市 佐藤治代

雨の日の机はんやり腰かける

何となく吐いた言葉が跳ね返る

おだやかな夫婦の夢が破れそう

悔いる事多くなり そうめん流し

納豆が嫌いな人と向かい合う

無表情の姉をさすつてやる見舞い

海南市 堂上泰女

短命の蟬に触発され起きる

低金利にも税金は容赦なし

暑いから燃えていますの百日紅

石南花に慰められる縦走路

明暗を分ける女神へ手を合わす

ギブアンドテイクで長い夫婦道

熊本市 永田俊子

健康過信 神の警鐘ピーポー鳴らす

粥する佻しい命への未練

点滴の縛を解かれて神に逢う

夕空に心遊べば鳥渡る

追いかけたが逃げ水だった夢ひとつ

アカンベエしてる私の逃げた夢

高知市 小川てるみ

蛇口よりもつたいないが漏れている

我ながらなんと貧しい日本語

唐辛子意地を張ってる訳でない

苦労した壁の高さは秘めておく

人生に何度かあったロスタイム

ときめきを無くして老いが忍び寄る

富田林市 片岡智恵子

毒舌の深さわかった一周忌

裏切りは赦さぬ円陣を組もう

弾まない毬の言い訳聞いてやる

底辺でつないだ手と手忘れない

栄養より味覚求めた夕の膳

薬とくすり揉めはしないか薬漬け

大阪府 米澤俣子

あじさいの吐息流してくれた雨

女だけ長生きしてもつまらない

一割負担老いは気楽に薬好き

久しぶり赤ちゃん抱けて元氣出た

八百屋にも果物屋にもある西瓜

汚染した沼耐え切れず泡を吹く

奈良市 天正千梢

底辺の目線で新聞読んでいる
風呂敷の紋 晴ればれと荷を運ぶ
山里を越え来てうまし草の餅
握力をためず雑巾しぼってる
つまりいた小石が答出してくれ

奈良市 米田恭昌

温かい風醸し出す人間味
ラッキー7に備え風船満を持す
数珠持てば皆が善男善女たり
単身赴任きつといい事何かある
韓流に溺れ抗日運動に出合い

生駒市 飛永ふりこ

ぬるま湯に浸るわたしに入れる喝
体力が戻り組板弾んでる
チヨーカーの赤がわたしを蝶にする
カリカリのにんにくファイト貰ってる
女の業白く溶かしたデスマスク

香芝市 大内朝子

六十年戦後の波を生きのびる
ともだちのいる幸せが続いてる
どきどきとおおきほどの恋をする
お疲れさま人間模様 終電車
老いてゆくさま丁寧に見る鏡

檀原市 居谷真理子

おばちゃんの家おいでと人形買う
輝いた顔を夫に見られてた
義理堅い人ばかり行く投票所
全員がメールしている昼下がり
ゆきずりの店のうどんが旨かった

檀原市 安土理恵

カラスの子自分の鍵で巢に帰る
半額でラッキー雨止んでラッキー
咎めないで下さいみんな過ぎたこと
やり直してできない過去がいとおしい
矢印を自分で書いたことがない

大和郡山市 坊農柳弘

初盆に師の戻りたる舟を漕ぐ
あさはかな心を笑う蟬しぐれ
握る手の温もり恩師の夢の跡
飾らない言葉で真心をもらう
ここで会うここで別れる盆の月

和歌山市 福本英子

愚痴こぼす相手無い日のお仏壇
信頼の医師逃げ道を開けてくれ
鈍痛が背骨を音も無く走る
郵政の行方気になるテレビ漬け
縦線の入ったハガキ買ってくる

和歌山市 牛尾 緑良

叛くかも知れぬ決意と朝を出る

線香花火 昨日が音もなく落ちる

通り雨ほどの小さな恋心

記念日がたくさん書いてある曆

入院の血を吸いにくるヤボな蚊よ

和歌山市 桜井 千秀

ページの隅に心残りが詰めてある

透明な手紙届いて惚け進む

降り出してまだ駆け足が出る自信

絶望と疑い溜めて熱帯夜

伝えたい歴史を愚痴で葬られ

和歌山市 木本 朱夏

蛩待つあいだに過去を巻き戻す

笹ゆりの触れなば落ちんひとに似て

飯の世の泣くも笑うも傘の中

人待てば雨の匂いのする茶房

譲れない線を守って夕焼ける

和歌山市 松原 寿子

袋小路ぬけ出てやつとポストまで

諦め切れぬ思慕ひきずつて女坂

胸に秘すドラマの中に君が棲む

運つかみそこねて樹海ぬけ出せぬ

雑音へ耳半分に蓋をする

和歌山市 武本 碧

ボンと傘ひらいてからは華になる

身の内の蛍一匹飼ひ慣らす

ケイタイの撒くウイルスが犯す罪

コンビニがオアシスとなる都市砂漠

白線の内側へ置く処世術

和歌山市 喜田 准一

ひと呼吸置こう浮き足立つて

ふる里の夏はステテコ扇風機

存在感なくてリストラまぬがれる

あいまいな結論積んだ貨車が着く

旗色を鮮明にしてからのうつ

和歌山市 榎原 公子

梅雨晴間夏本番を囃し立て

お仏花もてんこ盛りして清々し

桃ブドウ西瓜しあわせ丸鬻り

原点は八月にある平和論

ヒロシマに祈る八月の懺悔

和歌山市 堀畑 靖子

不良債権そんな扱い受けました

ホタル狩り穴場守っている仲間

感情線ただいま怒りモードです

せりミツバ自生の森にカンパイだ

騙す時コンと可愛く泣いてみる

和歌山市 古久保 和子

朝まだきハッチョウトンボのルビー色(古座川 3句)
休耕田守る人あり未草

ササユリも里人もみな優しくて

ソーメンと書く涼しげなおしな書き

ビールという極楽の水ありがたし

和歌山市 田中 みね

物事には総て順序があるように

化けて出る素質を抱いて巳年です

夏バテで脳みそまでが破壊され

目には目を時と場合で許されよ

何十年ぶり蛍の舞に酔う夕べ

和歌山市 上地 登美代

赤チンでは癒えぬ心に傷を負う

犬のようにひとり傷口舐めている

溜め息は命を削る鉋かも

方円に生きようきつと楽になる

生かさされて年金という助け船

和歌山市 山口 三千子

無理をせぬようにと医師に釘さされ

未完の絵抱いて月日の経つ早さ

子は二人育てて孫は只ひとり

人間のようなベットののお葬式

愛犬の永代供養してもらおう

和歌山市 松尾 和香

島一つ惚ぶ恩師の温い声

里帰りいつでも島は温い風

母に似るまあるい鼻の丸い背

似たような苦勞話をきかされる

旅好きな私を誘う田舎路

和歌山市 宮本 三喜夫

いがみあいみつともないよ民族が

戦災で着るもの無くす避難民

災害で着の身着のまま避難する

金目当てで荒んでいます人心が

酒気帯びて議員ちらほら罷り出る

海南市 三宅 保州

長崎はやはりグラバー邸に行く(長崎ぶらり旅など)

長崎にとつても似合う異人さん

見上ぐればこよなく晴れた天主堂

オランダ坂からゆきさんに出逢いそう

頼もうと声を掛けたい武家屋敷

海南市 谷口 義男

言い分があつても口を閉じておく

息子から扶養家族にしてくれぬ

ジャンボくじ買って貧から抜ける夢

物事に抜け目無い人御用心

泣き笑い重ねて今の僕の顔

和歌山県 中後清史

さわやかな緑の風へいい目覚め
膨らんだ風が古道を吹きぬける
聞き上手閉じた扉を開けさせる
大ジョッキ一杯分のかくし芸
ボスだけが喋り懇談会終る

鳥取市 土橋 はるお

緑陰でしばらく息を整える
爺ちゃんは村いちばんの生き字引き
典型的か日本は少子高齢化
父さんの隙を突こうと胡麻を播る
炎天下 男ぎらぎら焼いている

鳥取市 土橋 睦子

財よりも人脈の縁大事にしよ
日本海の蟹も月見て脱皮する
夕焼けの話が好きな秋の空
靈魂が迷っています経あげる
広辞苑 両手で掲げるお婆さん

鳥取市 武田 帆雀

計画を早めに立てて早く寝る
神棚へ元氣印の花を立て
スマートな字でさらさらとサインする
歯車に酒を注ぐと歌が鳴る
息止めて三つに分ける菊の枝

鳥取市 西村 黙光

死線越え辿り着いたよ傘寿坂
日に三度 千日灸の世話になり
傘寿とや食糧難を思い出す
運命か傘寿の森へ来た重み
傘寿とや元氣な級友の訃報聞く

鳥取市 植田 一京

疑問符が点点 夜を眠らせぬ
生きるため蚊も一心に人を刺す
初恋の淡き思い出かき水
ちぐはぐなままで今日まで来たふたり
流れ星 願いは何時も届かない

鳥取市 春木 圭一郎

幸せは本音を言える友がいる
柔軟に相手の気持ち考える
苦手とはつかず離れずお付き合
遣わずにすむ気遣いは止めにする
初対面 相手のルール尊重す

鳥取市 美田 旋風

トンネルを抜けても介護まだ続く
朝の庭見回り花へ声かける
やがて盆段取り分かる子と決める
少しだけストレス脳を弾ませる
真っ直ぐな道をじくざくして進む

鳥取市 杉本孝男

勝つまでは いもがゆすすり耐えて来た

ぼとりぼとり本音が蛇口から洩れる

放し飼いの卵はこくのある旨味

根気よく推敲すると味が出る

規格品では満足しない技の道

鳥取市 有沢せつ子

必要とされてほしい頑張れる

使い切り待てぬ四色ボールペン

バーゲンにバーゲン品は着て行かず

鏡には難しい顔見せられぬ

年金の旅は休憩多くとり

鳥取市 録沢風花

十字架を背負って走り出す電車

トンネルの出口が見えてほっとする

野の花のようにプライド持つて咲く

残されて屋根傾かぬよう守る

子つばめも旅立ちの日のリハーサル

鳥取市 岸本宏章

深呼吸 肺の奥まで掃除する

聴診器 使える医者に診てもらおう

銀行に貧しい家計覗かれる

合併をしても赤字はなくならぬ

悔しさを束ねて起爆剤にする

鳥取市 岸本孝子

旅先の絵葉書もらい旅気分

気休めにビタミン剤を飲んでいる

いきいきと賞味期限のない夫婦

難しいことのひとつにダイエツト

満月が蛍のデート邪魔をする

鳥取市 田村邦昭

思い込む誤字を辞典に叱られる

期待した封書はなんと請求書

さからえずやがてひとりになる夫婦

君だけの香りをいつも離すまい

遅咲きがあればよあれよと大輪に

鳥取市 中村金祥

寝過ぎた駅で自分を振り返る

ちつばけな孫が大きな愛くれる

ミクロンの隙に命を湛えてる

韓流へ魂までも持ち去られ

さざ波の人生願う天の川

鳥取市 富山檳榔樹

ささやかな善が後押す車椅子

呆けた振りそれもささやか和を保つ

この頃は愚痴と小言の老い女房

風呂上がり妻の浴衣に涼を呼ぶ

蛍飛ぶ灯りを求め風が追う

鳥取市 山本 益子

苛立ちの心静めて仲直り
神様は透かすメガネが好きらしい
人間は些細なことに心病む
甘い手口の振込め詐欺をまくし勝つ
へそくりの助け舟来る乗り越える

鳥取市 田中 懂子

ストローを抜けるとシャボン玉になる
ブランドのタオルもいつか雑巾に
迫力に欠ける二度目のコマージュアル
マネキンの体形見ずに試着室
目覚めたら主婦の戦が始動する

鳥取市 上田 俊路

新聞をたたんで紙の裏も読む
後始末どうしてくれる紙吹雪
記念樹はもう孫たちが出来たかな
敬老日 筋書きどおり老いすすむ
父の日を一日過ぎて着く祝い

鳥取市 塚 寛子

やって来た八十路はなんと上り坂
今夕日呑んで日本海眠る
排他的そんな言葉に荒れる海
ハンゲルのボトル海辺でもの申す
言うことを聞かぬケータイ持っている

鳥取市 西川 和子

梅雨前線濁いた緑蘇る
老人の姿そのまま見る水面
思うこといっぱい画布に乗せきれぬ
競争はしない自分のまま泳ぐ
石頭 年が経つほど堅くなる

鳥取市 福西 茶子

輪郭に添って絵筆を濃く淡く
昨日とは違う貌してトマト熟れ
煩惱を晒し白装束の旅
星明かりほどの幸せかみしめる
娘は他家へ息子は嫁に差上げる

鳥取市 奥谷 彩子

絵手紙に恋ほんわかと乗せてくる
人生に陰陽の句読点打つ
最初はグー駆け引きちよつと考える
自己主張過ぎて人の輪はみ出てる
もぐら叩きテロあちこちで頭出す

鳥取市 永原 昌鼓

職人の誇り駄作は世に出さず
脇役の誇り忘れぬカスミ草
爺さんは昔の誇り捨てきれず
多数派に靡かぬ誇り持っている
人間の誇り忘れた殺し合い

鳥取市 下田 茂登子

どの嘘が本当なのか見えて来ぬ
大声を出して哀しさ消して行く
ちっぽけな知識を広げ品下げる
合併に新町名がすぐ言えぬ
喋り過ぎエラーばかりで疎まれる

鳥取市 鈴木 一弘

頂上の見えぬ登山を繰り返す
さようなら焼けほつくいに水を掛け
夕焼けを背に浴び上る喜寿の坂
逮捕でも一身上の都合とし
貧乏神住めば都の袋小路

鳥取市 福田 登美

明日のため今日をしつかり生きていく
幸せな日は親切をしたくなる
心の傷小さく畳み見栄を張る
老いながら楚楚と生きたい身嗜み
しがらみを暫く忘れ遠火花

鳥取市 山宮 愛恵

あの彼がいい爺ちゃんになつて
いい予感 廊下みがい香を焚く
子や孫に乾杯されて目が濡れる
仏さまへ感謝の二文字捧げよう
してあげる事があるから張りがある

倉吉市 山中 康子

好きな酒半分減るさびしいな
はっとしてほっとしている娘の電話
高ぶりもあんじょう楽になる午睡
兄弟も結婚したら他人めく
心血を注ぎ見返りあてにせぬ

倉吉市 野口 節子

頬染める喜寿に女がまだ残り
仲間から老人ホーム誘われる
けんかにはならぬ相手が大きすぎ
一線を退けば柔らかな顔になる
四季咲きのバラに心が解かされる

倉吉市 米田 幸子

向かい風に負けてなるかと老いの意地
お為ごかしにうっかり乗ったおじいちゃん
叫んでも声が届かぬ向こう岸
文芸の小路に華を咲かせよう
イエローカード貰つてからの立ちくらみ

倉吉市 牧野 芳光

潮干狩 韓国産も撒いてある
血糖値上げのお菓子を捨て切れず
五円でも快音たてるお賽銭
隅っこの声は本音を言っている
坂の上から挨拶が降ってくる

倉吉市 最上和枝

傷口に触れないように口挿む
陰と陽背中合わせの運試し
大皿に少し潰れた苺の朱
走る日の夢は捨てないかたつむり
手帳から洩れそうになる予定表

倉吉市 松本よしえ

ダム底の役場ニヨッキリ大日照り
渇水のあと土砂降りの山くずれ
携帯を差し上げますに引っかかる
アルバムにテレホンカード貼っておく
戦争に翻弄されたためおと箸

倉吉市 山本玲子

片手間のメニューが旨い冷や奴
医者知らず自慢のひとつ誇張する
玄関の鉢がお世辞を聞いている
泣き虫の後姿に覇気がない
誰も来ぬ風はときどき窓叩く

倉吉市 猪川由美子

地にしゃがみ地球の呻き聞いてやる
クールビズ大平総理偲ばれる
殺人はゲーム感覚の子が増え
親死んでイモづる式に恥部が出る
難題は食べて寝てから熟慮する

米子市 青戸田鶴

夏椿一日だけの香を残し
順風満帆先の事には気付かない
影つれてきたのか話まともらぬ
利尻 札文 花に誘われ旅人に
サロベツの野はカンゾウの黄にゆれる

米子市 野坂なみ

参観日どの似顔絵にも丸がある
我慢つづける地球へみんな目覚めよう
迷路にも出口どこかにきつとある
弱虫の群れの中さえボスがいる
慕う人螢火つけて逢いにゆく(亡天祥月命日)

米子市 木村春枝

夫婦して築いた家に蟻も住み
夫婦して我慢の舟を漕ぎ合つて
二か月を空を仰いで待つた雨
降り過ぎた雨に勝手な愚痴ならべ
先生の死をしみじみと雨の午後

米子市 中井ゆき

ねむられぬ訳もないのにねむられぬ
雨待つて声を枯らした雨蛙
降りすぎるあめにデデ虫隠れ里
仏待ち秋風待つてまだ生きる
クローラー替え三年生きてもとを取る

米子市 門脇晶子

指先のシグナル朝の魚市場

核を押す指が地球をかえてゆく

藁葺きの家に団体つめかける

二世帯の家が必ずもめ始め

栓抜けば我慢の泡が吹きあがる

米子市 光井玲子

まっすぐに歩いた道だ悔いはない

孫たちのゆく道までは口出せぬ

だんだんに亡母に似てきてやせほそる

私のメガネが狂い詐欺にあう

信頼が出来る器が大きいな

鳥取県 新家完司

新鮮な水を抱えた春の山

本能の命ずるままに結ばれた

どこまでが領土しつかりして欲しい

仏壇のいちばん奥はベニヤ板

空は真っ青 我が水晶体に異常なし

鳥取県 石谷美恵子

ふところに面倒手には酒を提げ

プライドが邪魔して知恵が借りられぬ

貧富相寄り同じ匂いの漁師町

知恵走り小細工ばかり長けている

いくたびかエラーで揺れた夫婦ごま

鳥取県 竹信照彦

六月に泳ぐキウイは切れという

空梅雨に続きがあつて大豪雨

水無しの田んぼが今や溢れだし

芋の苗植えて大雨これでよし

釣れるぞと聞くと起き出す午前四時

鳥取県 谷口次男

筆まめがうっかり蛇足書くハガキ

シナリオの狂いに総理吼え立てる

大海をスローライフで犬かきだ

オーナーは何故か大きな机据え

ひっそりと静かな葬儀漫才師

鳥取県 鳥羽直市

事故という悪魔が今日も苦しめる

豊かさに慣れわがままな愚痴が出る

健康の欲しさに散歩続けている

頼る杖あるから余生楽しめる

五七五いつもここに住んでいる

鳥取県 鳥羽玲子

新しい町へ長生きしたくなり

剪定の庭ほのほのと明かりさす

仮縫いの服ワクワクと試着する

病床へ夕焼け雲の見舞客

同じ趣味求め触れ合いながら生き

鳥取県 澤 裕子

プライドも自我も芽生える三歳児
百歳の祖母に一目置いている
躓いた小石とつさに蹴り返す
逆風も覚悟信じる道を行く
お互いに笑い合ってる物忘れ

鳥取県 蔵 本悦子

虐待は聖母マリアも許すまい
気の弱い男だそばに酒を置く
夫に飽き三メートルの距離を置く
ミンミンと蝉も民営賛成だ
魂をひっくり返し日干しする

鳥取県 山 本正光

だいせんを借景ひろい花回廊
親友の通夜で遺族へ声も出ず
八十路坂戦中戦後死語とせず
ジャイアンツ勝つと晩酌うまくない
毎日が大事と朝は水を飲む

鳥取県 山 下節子

表には出さぬプライド父の背な
プライドが邪魔して人の和がくずれ
ちっぱけなホク口私の守り神
遺伝子のエラーかとんび鷹になる
マンネリがまねいたエラー大惨事

鳥取県 深 田 俱 久

グランドゴルフ恵みの雨がブレーキに
記憶する日に七 七を書き加え
参院でノックダウンか郵政法
クールビズ ネクタイ売り場閑古鳥
家よりも身体のリフォーム急がなきゃ

鳥取県 盛 田 夢 路

ありがとう今朝も目覚めて足が立つ
焦るなよ睨閉じれば虹も見え
乗り越えた苦に新しい苦が生まれ
勿体ないと母の口癖孫に死語
プライドの鼻っ柱をへし折った

鳥取県 森 川 あらた

美人ではないが意外と人気者
人魚になれるような気がする青い海
人形は一点だけを見つめてる
消しゴムは使いきらずに捨てられる
病院の近くに家を借りている

松江市 三 島 裕 丘

裸の児抱いて至福の湯に浸る
ほどほどの距離で引き合う筋い舟
青春へテープゆっくり巻き戻す
アドバイス闇に光と受け止める
生真面目な人の手土産しゃちこ張る

松江市 川 本 畔

宙ぶらりん味はシチューかグラタンか

よく喋る女に七味唐がらし

風の音まともなことか耳澄ます

神経を逆なでされて笑い出す

バス停のベンチ人目にさらされる

松江市 小 川 注 湖

お茶どころお菓子も自慢野点席

その汗はきつと喜び生むだろう

総会の隅飲み込んでいる不満

露天風呂水着着用書いてある

砂掬う涙と汗の甲子園

松江市 津 川 紫 晃

退院へけじめ斬髪久しぶり

全快へ春の音符となるいのち

千の罪千の情けを畳む傘

傘立てて昨日の悔いが雫する

蹴躓くとドンマイという影法師

松江市 松 本 知 恵 子

雨乞いが効いて農夫の笑い顔

眉うまく引けていい日の始まりに

ヒロシマ忌 吉永小百合語り継ぐ

母なれば一歩も退かぬ顔になる

里神楽 笛の名手が盛りたてる

出雲市 園 山 多 賀 子

シユレツダー私の過去を刻まれる

慎ましく生きて専ら甘え癖

見栄を張る義理に個性が痩せていく

紫陽花のおどろに咲いて梅雨の薨

饒舌は憚りましょう酔芙蓉

出雲市 城 多 喜

全身で受けてあげたい子の悩み

お陽様に恋をしたのかプチトマト

空耳かときどき君の声を聞く

どの色を足しても出ない涙色

綿ほこり丸め説教聞いている

出雲市 小 玉 満 江

変化球打てぬ私は風を待つ

私にも言い分がありねじれ花

老いが古い背負って集う寿老会

永らえて楽しい芸も二つ三つ

カラオケで軍歌を唄い亡夫偲ぶ

出雲市 吉 岡 き み え

銀行に行くとき少しおしゃれする

ひまわりと笑顔を交わすひるさがり

ご近所の犬にも愛想いうておく

今年またたつたひとりの誕生日

盗み酒音せぬように元に置く

出雲市 岸 桂子

プラス思考でうまく苛めに耐えている

首輪はずして自由になっていて孤独

この世の事はこの世で終る唐辛子

嘘一つ帽子かぶったままで言う

傷ついた流木がある浜の朝

出雲市 多々納 テル子

寂しくて何度もポストのぞいてる

カレンダーめくると予定飛んでくる

幸せな家族自転車大中小

ラジオ切るふっと孤独になる深夜

宵の口いつもきまって眠くなる

出雲市 久 谷 まこと

グーチョコキと相手の顔を見つめてる

言い訳のしどころもどろがご愛嬌

久し振り話もはずむ出雲弁

片仮名語辞典見ながら記事を読む

口が過ぎ避けようもない風当り

出雲市 森 茂 美

紫陽花の色も変って今日は夏至

蟻の列見張りの蟻も居るらしい

海開き少女も恋を知り初めて

合併劇振り分け荷物おろす人

爆音が民家揺るがす基地の鳥

出雲市 持田 多輝子

つじつまを合わす歯車きしみ出す

偽善者の顔でプライド保ってる

人生の余白まだまだ趣味楽し

ゆくゆくは何時か別れる影という

日に三省 余生に汚点などはなし

出雲市 小白金 房子

民芸品 温みを包む渋い紙

命日へばた餅丸く灯に上げる

最高の形見を吊し陽を貰う

帶少し緩めて秋の風いれる

湯割り水割り男気儘な味を呑む

出雲市 小豆澤 歌子

紫陽花の笑顔うれしい雨の音

水平線些細なことを皆許す

時どきは都会の風に逢うカラス

理不尽に晴天続き雨続く

梅雨晴間窓を開いて心干す

出雲市 多久和 敬子

肩の荷を下ろして孫と遊ぶ日々

おだやかな会話が似合う嫁姑

新じゃがのコロッケ孫に誉められる

平凡で良いと言いつつ幸求め

旅みやげ洗濯ものに名菓添え

雲南市 毛利 幸

倉敷市 井上 富子

しがらみがくねくね絡み解けない
亡父の背は余り高くて登れない
信用し登った梯子外される

家々の庭は歴史を映す顔

雨止んで足が自然と外に向く

島根県 伊藤 寿美

真庭市 福嶋 智恵子

無人駅母が待つてるかもしれぬ
夕闇に咲いた此の世の娑羅の花
駱駝の瘤と長い話をする夕陽

向日葵の海にゴッホのEメール
いい鬼になろうと角を削ってる

倉敷市 撰 喜子

美作市 小林 妻子

絹を裂く音より妻の金切り声
戻りたくない日もあったブーメラン

走り書きなれてる妻の旅行好き

バーゲンでお里が知れる人もいる

さあやるぞ草と格闘汗流す

倉敷市 小野 克枝

美作市 大石 あすなろ

筋書きに無い風と逢う花の乱
握手して次のいくさを考える

深爪の痛み女のまわり道

生きるため跨ぎ続ける水溜り

少しずつ濡れて寄り添う夫婦傘

温かいペンに希望の灯を貰う
新しい水着で悩殺する肢体
背もたれに命預けている昼寝
困るたび膨らんでくる知恵袋
マウス片手にホームページを散歩する

友情の絆で暮らす過疎の母
回り道して刎頸の友が出来
不肖の子父の偉業に泥を塗り
心技体欠けた横綱蹴躑く
マスコミに乗せられ踊る運命かも

飽食のねぐらで失せたものがある
文月の涼風友に送いたし
老いた鳩ばかり平和を語っても
見渡せば昔仲間が居ない坂
予定表に吊るされている僕のいのち

雨三日バイオリズムが狂いだす
口は達者で腕はすっかり衰えた
不美人に育ったキユウリ買うて来る
二世紀を跨ぐ昭和も遠くなる
プロポーズ無色の胸をときめかす

岡山県 福原悦子

竹原市 石原淑子

吸う乳房誰にもやらすふたつある

小利口な理屈をこねて困らせる

ひとつ屋根快活な嫁で温かい

我が道だ曲らず一線ただ歩く

過去語るかたちとなった古時計

竹原市 森井菁居

死してどうなる知っているのは仏のみ

先人に負けずに僕も生きんかな

童謡が聞こえて来ます磯伝い

どうせ閑だからおしゃべりして帰る

冷や飯を食べた昔を懐しむ

竹原市 時広一路

今の僕ニートに似てるかも知れぬ

新緑の元気が欲しい深呼吸

国道という騒音の製造所

まだ叶わないから夢として持てる

歯が一本 僕に謀反をして困る

竹原市 正畑半覚

登り甲斐あった大きな山だった

修羅となり仏となって嶺に立つ

思い出は前夜祭でのフラダンス

みんなして光り大会無事終わる

かぐや姫笑顔並べてお見送り

思いやり真ん中に据え生きてゆく

老醜をピンクの小物でほかしましょ

かぎりある命を友と重ね合う

お守りをどっさり買つて願うこと

夏祭り肩上げ急かす孫の声

竹原市 岩本笑子

雪ならば雪 雨ならば雨 靴をはく

弁当の手順へ電話邪魔をする

トンビにもなれず一日ただ歩く

猫が呼んでる玄關開けてやり

只今へ猫三つ指をついて待ち

宇都市 平田実男

夏の浜恋の欠片が落ちている

聴診器より正確な酒の味

来客で今日の喧嘩はノーゲーム

ブレーキを踏まぬ若さが羨まし

遺影にはちよつと言えない人に逢い

美祢市 安平次弘道

狂わされていたのは二兎を追つてから

致死量を知っているから塗りつぶし

北指しているが磁石と限らない

結び目がゆるみ寝返りなど打てぬ

賽振ってみたが結論には触れず

唐津市 久保正剣

熊本県 高野宵草

般若湯過ぎて陽気な通夜となる

わが家にも社長と同じ椅子を買う

飲み干したボトルと語る夢の数

ケイタイのメールで遊ぶ電話料

一大事ナースシューズが走る音

空梅雨でダムの母校に会いにゆく

口八丁 嘘八百の二枚舌

友情を保ちたいから車間距離

俯向いて淋しがりやが輪に溶けぬ

若い日を語る少うしホラ混ぜて

唐津市 宗水笑

熊本県 岩切康子

錠剤を零すでのひら拾う指

乾き畑 成り物と共に雨を乞う

投げ抜いた顔に勝ち負け超えた汗

そのプラン乱さぬように助け借る

余生とは哀しい響き夕茜

お土産を戴き先の様子など

ドリントクが勝負を避ける岩清水

単身で温泉行きもいいものよ

女運 二勝五敗で今の妻

懐かしい友の誘いに雨抜けて

唐津市 樋口輝夫

東かがわ市 池内かおり

洗濯の好きな女房に脱がされる

食べ尽し喋べり尽した妻と客

溺れない深さでボクは泳ぎます

金婚の皺をのばした北の旅

超不況まわりに掴む藁も無い

芸の無い男が酒を修業中

古時計ときどき死んだふりをする

腹芸もいらぬ夫婦で仲が良い

老いらくに豊かな胸が眩し過ぎ

賑やかな人真ん中に座らせる

唐津市 市丸晴翠

東かがわ市 川崎ひかり

損得は言わないポランティアの汗

躓いて転んで自分取り戻す

人類はいくさ好きさと牛の群れ

のど仏針千本の傷のあと

寝たきりの母の介護は無言劇

半額になるまでじつと我慢の子

ただいまと腹へつたとが雪崩れ込む

淋しさの隙間を埋めるシヨッピン

物干場弟のシャツ威張ってる

アンテナもところどころが錆びてきた

東かがわ市 成重 放任

松山市 丹下 美津子

事件事故今日も誰かが頭下げ
炎天下紫陽花の花褪せて終え

長話今さら名前聞かれない

この暑さ夏を上手に遊ぼうか
杯を断る種にドクターストップ

東かがわ市 清川 玲子

島買うて避暑にお出でか薫風師

降りしきる雨にあじさいだけは冴え

古都の路地 下駄の音にも艶がある

厚意から進めた話徒になる

進軍のラッパ吹くのはいつも妻

東かがわ市 原 賢

争えぬ癖まで似てる血の流れ

汗だくになって人間取り戻す

迷惑をかけてたまるか老いの意地

気がつけば妻に合わせていた父権

年金のハガキは受給減る知らせ

東かがわ市 伊勢 八重子

部屋一つカサブランカの風に酔う

蓮の花ボンと開いて夏を告げ

筆不精暑中見舞もEメール

下り坂遊び上手な風になる

風鈴の音色五感に沁み透る

長生きをしすぎた傘寿とは淋し
恵みの雨あとは悪魔に変わる雨

倉のお宝サイン一つにつく高値

差し掛けた母が濡れてる俄か雨

開発で野生のうめき攻めて来る

松山市 宮尾 みのり

水槽のメダカ安心して増える

まかされて力不足を思い知り

さっぱりで恋の機微には遠くいる

お人好しというポジジョンで生き延びる

その時のもしもは神の手にゆだね

大洲市 中居 善信

鯛が鳴いて新盆二つある

土に生き土を握って終わりたし

稲の花百姓だけが知る命

在任特例 変な制度があるもんだ

目の前の団子に意志を試される

西予市 黒田 茂代

曙の空に童話のような雲

いい笑顔みんな味方にしてしまふ

暮らしとは別の漁り火美しい

待ちぼうけ待った時間が惜しくなる

もっと元気出せとささやく影法師

高知県 赤川菊野

八・一五玉音今も生きている
思い出をたどればそこは壕の中
独り者ひとりで乾杯バースデー
逝く時は菊の季節と決めている
精いっぱい生きてなんにも残らない

弘前市 福士慕情

椿散るその一瞬を見てしまう
茶柱に逢うこともないティーバッグ
送る人送られる人汽車が出る
老いて死すレールに乗ってはいいるのだが
合掌の指から零れ落ちる 哀

弘前市 宮崎ヒサ子

夏はまだ今暫くの花菖蒲
梅雨晴れの気分で赤い薔薇を買う
前見えるビニール傘を愛用す
朝市へ野菜も花も待っている
目の一部です天眼鏡を持ち歩く

弘前市 相馬銀波

足踏みが五日も続く梅雨末期
うちそとの整理は今も妻の腕
計画も元氣しだいのヤセ蛙
経験の差を見せつけるラブゲーム
赤い糸切れて四十路の寒い咳

弘前市 須郷井蛙

十枚の免許を持って職がなし
治山治水 緑の森へ手をつなぎ
二百海里海にも鉦が打ってある
合鍵は犬に預けて共稼ぎ
柔らかな食べもの子の歯弱くなり

弘前市 岡本花匠

融雪工事 贅に溺れる家の貌
釣天狗みみず養い満を持す
赤とんぼ山のはなしで寄って来る
どの子にも言い分があるアカンペー
昭和史のふるつわものの寂と侘び

弘前市 高橋岳水

茶柱に押されて早い朝を出る
納豆の糸で絆を太く編む
年輪に詰め込む等身大のメモ
先頭に立つと伸び出す鼻の先
手さぐりで生きた証の作句帖

弘前市 今愁女

こじつけは暑氣払いとや梅雨の宴
バイキング腹も身の内ほどほどに
紫陽花が好きでたまらぬ蝸牛
透明な殻を残して蟬生まれ
宵宮の花火聞こえる草むしり

黒石市 相馬 一花

日高市 根岸 方子

よれよれの服で外車を乗り回す
いじわるな男につける薬買う
泥酔の夫が帰る着払い

文句言う人をなだめる京都弁
鳥肌が立つ究極の津軽三味

十和田市 阿部 進

古希の日々ぜいたく言わず生きてます

浅漬の色あざやかにキユウリ漬け

旅先で人の情けにふれる幸

一票差明日から唯の人となる

全世界を日本料理がかけめぐる

青森県 小寺 花峯

心配の種が転がる今日も生き

日の出に起きて日の入りを待つオチョコ

親指の先に止まった運不運

薬袋に明日の命を振り分ける

仏壇へ座ると亡母の声に遇う

砂川市 大橋 政良

千羽鶴帰って来ないのが一羽

剥ぐたびに暦と僕は瘦せてゆく

爛をした分だけ酒が薄くなる

毒舌の手玉に取られ憤死する

水涸れて素足で川の背を歩く

躓いたあの日眩しい夏の午後

ちびた靴体の歪み垣間見る

ここだけの話が好きなティータイム

民宿の蚊帳で聞いている風の唄

子離れが下手でメールが欠かせない

さいたま市 星野 育子

茹で卵つると剥けていい予感

初物を食べて長生きする気です

白い脚踊るタンゴに軽い罪

夏草が伸び放題で風の私語

過労死は無いかと蟻の列に問う

佐倉市 岡井 やすお

国連にせつせと支援蚊帳の外

ニコニコと摩り寄る国にご用心

年寄りが矢鱈目につく九月かな

老人もうかうか出来ずターゲット

新主将ジャンケン強い者に決め

東京都 岸野 あやめ

昨日した喧嘩忘れる露天風呂

内臓に病気は無いがお歳なみ

通夜更けてぶっつきり合う愚痴とエゴ

遺言書封じて寿命延びたよう

芝居見て泣いてる罪のない女

東京都 小川 賀世子

また一人芝居してます探し物
うっかりでせっかちドアに指挟み
クールビズ男のセンス試される
胸の谷間もお臍にも慣れて夏
緑陰の気功身体を風抜ける

東京都 清原 悦子

迷い道抜け出す鍵を母が持ち
土や陽の匂い元気にしてくれる
我慢した分だけ笑顔素晴らしい
優しさに触れて小さな芽が伸びる
輪の中で支えられたり支えたり

武蔵野市 亀井 円女

天晴れ阪神二位に落ちたら許しまへん
八十五歳夢を見てます翔んでます
ロックやジャズで心ごま化す今日の鬱
あの頃は恋に恋して有頂天
言葉より熱い握手はグツと来る

八王子市 播本 充子

水茄子が届き一気に夏になる
ムームーとアロハで風になる二人
似たような所でつまずいて親子
バスを待つ間も本を読んでいる
ポーナスもないが買いたい物も無い

横浜市 小野 句多留

湿原に梅雨の晴間を盗む足(駒止湿原にて)
愛知博想定外の好奇心
歯の所望ステッキよりもハンバーグ
朦朧に二時間ドラマ耐えられぬ
玉の肌覗くエッチなお月さん

横浜市 菊地 政勝

長生きはいやだと言って介護され
お隣もそのお隣も要介護
少子化に重い荷背負う長寿国
一貫性欠いて日和見主義となる
鉛筆を削り野心をふくらます

富山市 島 ひかる

黒百合が今年も思い出すあなた
白山に眠る兄貴に逢いに行く
計画の苦勞を誰も見てくれぬ
山海の珍味に勝る妻の味
どう見ても破れジーンズ良く見えぬ

静岡県 藪田 猿杏

住む人をついぞ見掛けぬ過疎の村
初孫をベットのようにつれ歩く
神童と言われ育ってフリーター
鎮火した後には大型消防車
仲人が拳式を急ぐ裏事情

愛知県 早川盛夫

長岡京市 山田葉子

妻の意地 夫の意地がシヨートする
爪青く染めて男に興味なし

ジーパンのやさしいパパになる時間
身に合った暮しサンマの骨を抜く
気が付いた時には山を歩いてた

可児市 板山まみ子

目覚めから予定ギッシリ夏至近し
暑いけどやらねばならぬ庭仕事
筋書きになかった道を歩き出し
白球を追う顔ゆがむ夏予選
夏の旅チラシに溢れ迷いだす

京都市 都倉求芽

写経より九条を書く敗戦忌
ミンエーカ ミンエーカ新種の蟬が喧しい
勾配を得てから水は意志を持つ
一途さもないが辟易させる蟻
頑張りへ済まぬがブアツとアリコロリ

亀岡市 井上森生

残酷なテロをも包む神が要る
ネット上にテロの全く無い楽園
平和への悲願遠のくまたも夏
大画面テレビが人を救えるか
温もりを教えてくれた師は他界

絶妙のバランス仁王たじろがず
バランスを崩したままで走り切る
カタカナが時代先取り駆け抜ける
初恋のひとが子連れで会釈する
記憶の糸辿れば母の海がある

八幡市 結城君子

薫る風残して師の影は消えた
一段落つけば待つてる医者通い
蟬時雨 桃の甘みはもう一歩
今日は吉日ひ孫自力で立ったとき
今日は仏滅ひいばあさんがこけたとき

大阪市 西出楓楽

割礼式の少年凜々しトプカピ宮(トルコ紀行)
トロイの栄華語り継ぐのは風ばかり
エフェソスの遺跡売春宿もあり
オリーブの木陰で日が眠りたし
カッパドキア此処はほんとに地球なの

大阪市 川原章久

人物を呑んで津波は後静か
懐かしいラムネの音が祭りの夜
少年の心の奥に鬼が住む
あれほどの夫婦むざむざなぜ離婚
つんつんとあっち向いてる妻の乱

大阪市 前 たもつ

もう先生とお会いできない自選集
ろくすっぽ敬語つかえず日本人

付け忘れた昨日の日記埋められず
合コンへ破れジーパンはいて行く

夢に見るわがふる里に蛍とぶ
大阪市 川端 一步

師の初盆句文集集緋いて

夏は月そんな風雅もどこへやら
厚遇も談合もない土と鉄

いぶし銀なろうでなれるものでない
バンザイは佳きことだけにしたいもの

大阪市 鶴田 遠野

倦怠期 愛の遮断機下りたまま

なみだ眼を隠す男のサングラス
グチばやきオフレコだよと父娘酒

亡母の味ベースにしている僕の舌
行間は読まぬ男のマイウエイ

大阪市 渡部 さと美

秋くればなすも頑固な種子をもつ
第三のビールで安く夏を越そ

引きこもり がんばり過ぎた羨らしい
久びさの故郷に立つ黒を着て

父逝って大きく見える男の子

大阪市 玉置 英子

八十年死にたいほどの辛さなく
うれしいネタまにお腹が空いてくる

梅雨だから雨降る普通これがいい
世界語になった談合つづく国

日本もテロは狙っているのかも
大阪市 近藤 正

白壁に黒い雨跡原爆忌

小泉が靖国詣でけつまずき
一夏の流行病かクールビズ

戦争やテロを悲しむテムズ川
談合を仕切る勤めの天下り

大阪市 小谷 集一

ありがとう もう友達になつて

健康法頑張りすぎて出た疲れ
口裏を合わせ共犯者にされる

適当に散らかつていて住みやすい
空白が目立つ肩書きない名刺

大阪市 岩崎 公誠

牛乳で育ちましたとゴリラの子
雨やんで百円傘は捨てられる

ツインベッド別々の夢見て寝てる
年金デー老いふたりには祭りの日

無色より保護色選び生き延びる

大阪市 津 守 柳 伸

大阪市 津 村 志華子

骨せせり下手で希代の魚好き

でしゃばりをじっとさせない鮎の骨

菖蒲園和服の亡母に逢えそうな

婦人科へカッブルで行くルンルン

ワン切りが怖い携帯持ちながら

大阪市 津 守 なぎさ

雑草の緑新鮮雨上がり

傷心をいやす鈍行ひとり旅

ダイエツト心がけても出るお腹

落ちつかぬ腰だ祭りの笛太鼓

ピーポーが来て野次馬の群れの中

大阪市 清 水 絹 子

天神祭りこれぞ浪速の心意気

齒科眼科いつしか老いの仲間入り

へそくりを貯めたあの頃華だった

ヨイドン振り向く孫の思い遣り

丸い地球に今日もどこかで唾み合い

大阪市 奥 村 五 月

跨げてた溝さえ跳べず回り道

七人がなんや俺には強い妻

祝い事鯛は厄日と嘆いてる

満足な介護をしたと野辺送り

肩書きが消えて妻にもなめられる

デバ地下の試食上手に買わされる

み仏に母を重ねる花の寺

千枚田守る案山子が凜と立つ

熟女らが寄ると空気もおびえ出す

こだわりを捨てると心軽くなる

大阪市 神夏磯 典 子

ひまわりすくすく元氣と夢もらう

寶石に勝る健康の有難さ

玉碎の鳥が待ってた菊の香よ

子が喧嘩するほど宝遺さない

七転び八起きへ貯めるエネルギー

大阪市 小 糸 昭 子

つなぐ糸解けないように固結び

肉よりも花買う事が多くなり

臍出しルック雷様もよけている

何時の間に健康器具が服かけに

焼夷弾父母も私も若かった

大阪市 川久保 睦 子

ほめられて受話器におじぎしてしまふ

味方には優しい顔を見せる鬼

しゃべりすぎピエロ不眠の夜がつづく

いい湯だな鬼も湯舟で歌いだす

病院でなぜか元氣な返事する

大阪市 井丸昌紀

役所にも言いたい事があるはずや
芯のないリングは食べた事がない
公園へ子供を連れて行きましよう
女難の相 一度言われてみたいもの
色男 金と力については

大阪市 大川桃花

漁港まで行って干物を買っただけ
ミニスカート眩しすぎます白い足
叩いても回らぬ脳は暑氣中り
携帯で相談してるシヨッピンケ
乗換えて少し雰囲気がう顔

大阪市 小泉ひさ乃

人が好き裏切られてもまた信じ
明日の夢見て薄化粧する蕾
言い分は柔軟剤に浸けてから
手抜きせぬ老母はせつせとこまねずみ
祭から金魚家族の仲間入り

大阪市 板東倫子

終止符は老々介護の行きづまり
この年齢でうれしはずかし誕生日
婦警さんに叱られている社長さん
熟女です生れは大正デモクラシー
法律の裏技知ってる悪代官

大阪市 伊藤博仁

母の乳分けあつた友雲になる
強がりもそろそろ年貢の収め時
あじさいに水 今日も蝸牛は来てくれず
筋肉が落ちた半身見せとない
鉢のしそ食べてる虫を踏みつける

大阪市 熊代菜月

還暦をこえた娘の頼もしさ
子と孫と曾孫も揃う敬老日
振り返る思い出日々に色あせる
腹割って喋って敵をつくらない
ライバルは私の中の甘えぐせ

大阪市 榎本舞夢

帰り際メモの代りの箸袋
あれもしようこれかもしれないと何もせず
誘われて出かける元氣溜めてある
顔上げて背筋のばして歩いてる
歳のせい手を合やすこと多くなる

大阪市 榎本日の出

赤ちゃんも主役の顔で泣いて呼ぶ
声美人だと思わせている電話
整理して昔を徐々に消して行く
親しさが裏のうらまで見せ合った
一行の日記でしめてホツとする

大阪市 西川 更紗

池田市 栗田 久子

泣き事に貧乏神が寄つて来る

飛べぬほど血を吸い羽をとぎした蚊

感情線抑えてヨハンシュトラウス

夏送る名残りの花火消えて闇

晴れ女行くとこ雲が土下座する

頬染めて静かに落ちた酔芙蓉

荷かざりに幸せ薫るいい日和

かんできで季節先取りした秋刀魚

快方に向かいし友に風そよく

秋風に聴く耳ばかりさとくなる

大阪市 星野 さらり

和泉市 中川 楓

点滴は五臓六腑を呼び覚まし

夏草を引いて己を鎮めてる

回復へ友の情けが身に染みる

苦勞した人の笑顔を信じよう

独り者隠したはずの場所忘れ

平凡な夫に戻る妻の酌

遠慮して一人小さく無料パス

シニア割引証明出せによるこんで

正直に来んでもよろしバースデイ

パセリより羽化の夏蝶みどりの目

大阪市 安達 はじめ

和泉市 横山 捷也

懲りもせず火中の栗をまた拾う

ライバルに先を越された披露宴

甘すぎた自己採点にけつまずく

一病を持った同士の老いの旅

老いの策右へならえの列にいる

一人居に椅子は二つのダイニング

人は人自分を知れと天の声

娘が築くバリア会話に入れない

さりげなく妻は急所に釘をさす

ぬかづけに亡母のコツが生きている

大阪市 岡本 久峰

茨木市 藤井 正雄

死後はどうあれ懸命に生きる

寝袋で一番取りに行くマニア

つくづく昔は物を知らなすぎ

這ってでも行くと嬉しい返事くれ

だましの手口自覚するより外にない

待たしたねちよっとだけよと腕を組む

教育の根っこが腐る恐ろしさ

親子して六甲おろし風呂場から

自然破壊あげくの果ての水不足

負け惜しみ想定内と自己弁護

大阪狭山市 矢野 梓

浜風を読んだ逆転ホームラン
ハプニングの話がみやげ友の旅
くるくると日傘まわして逢いに行く
いい事もなく誕生日無事に過ぎ
生きて行くその日その日の絵を描いて

柏原市 永浜 加津子

捨てられる野菜の悲鳴聞こえます
争いは嫌い戦争なお嫌い
紛れなく影は正直素を見せる
夏休み孫に備えて気力いる
歯医者さん化粧落した顔で会い

交野市 森本 弘風

傘だけで一人旅してターミナル
今日もまたカタログだけの空の旅
目が覚めた深夜に妻がいる安堵
オイと呼ぶ私の名前オイでない
お招きに着て行く服がないと妻

交野市 山川 日出子

元気もんばかり集まる喜寿の会
歌姫の十七回忌ひばりさん
落語家の座布団の上笑宇宙
三歳児本気でカッパさがす川
元横綱イメージダウン若と貴

河内長野市 坂上 淳司

エビローグ妻からの自立がテーマ
量めない熱い想いが二つ三つ
貝面子遊び惚けた路地の奥
お袋がそつと贈ってくれた風
一閃に花火師一生を賭ける

河内長野市 水谷 正子

追悼の句会の薔薇は赤い毬
今頃は柄杓の星にお泊りか
お互いの子を賞め続く立話
断ればきついお言葉リフォーム屋
探してる物書いたメモ見つからぬ

河内長野市 山岡 富美子

約束があつてふくらむ紙風船
平和への約束があるきのこ雲
約束にがんじがらめになる小指
ひた走るノルマがあつた華のとき
屋上でガス抜きしてる大ジョッキ

岸和田市 亀井 皎月

善玉が負けて体調崩れだす
この歳でこの程度ならとは主治医
今日元氣しかし明日は分からない
大人しい人から順に病んでいる
無理すれば明日は嫌な答出る

岸和田市 土橋 房枝

精進が報われ緩む顔の皺

名刺代りメール交替する私

レントゲン私のハート丸はだか

身の丈も学歴も越え子は巢立つ

ライバルの爽やか笑顔攻めてくる

岸和田市 原 さよ子

迷惑の顔で聞いている長祝辞

頼られることも励みで梅ラッキョ

梅ラッキョ若しやの時の非常食

心配が無駄で終ったうまいお茶

胡瓜茄子 苗を分け合い教え合う

岸和田市 岩 佐 ダン吉

核ゼロへ道はるかでも休まない

九条があれば儲からないと言う

燃えるものまだありスニーカーの紐

掃り道ひとり啖阿を切ってみる

若さ引けば何が残ると言うだろう

岸和田市 井 伊 東 吉

梅雨空を払ってくれるアガパンサス

散歩せず体調狂う雨続き

建売りの棟上げ雨を厭わない

師と同じ麻雀好きを回顧する

六ヶ国協議に日本疎まれる

岸和田市 雪 本 珠子

働ける事の幸せ日日感謝

電子辞書今では僕の右腕に

紹介の名刺それほど物言わず

一歩引く気持があれば腹立たぬ

わたくしの膝でよければ空いています

堺市 村上 玄也

結論が出ない善人だけの席

不信感拭えぬままに聞く助言

気に召さぬ妻は時々岩戸入り

背中にも目玉持つてるらしい姑

中締めを待てずにそっと抜ける下戸

堺市 加 島 由 一

鳥が見え船員髪を気にしだし

窓際に社長一目置いている

痛い目に遭うと泣き込む母の膝

母おればと思う家族のすれ違い

靴下を買うにも妻の顔を見る

堺市 柿 花 和 夫

薫陶を受けた恩師に雨宿り

大阪の隅に人情めく話

技ありの豆腐に酒が語り掛け

割勘にも慣れた停年三年目

ウォームピズに備えてカイロ買っておく

堺市志田千代

ミニトマト号令かけてみたくなる
いちじくを早起き鳥にさしあげる
三日月だチャンバラ映画みたくなる
旅便り優越感が匂つてる
ポツクリ寺少し派手目に装つて

堺市源田八千代

官と業持ちちつ持たれつ天下り
ええ雨も三日続けばうんざりよ
夢うつつ下手な詩吟を唸ります
故郷の家そのままの七回忌
中吊りの家族葬ふと目に留まる

堺市和田つづや

許されよ愛するゆえのオフサイド
愛し方知らないからかよく憎む
子に乳房含ませ強い母になり
ありがたく昨日とおなじ今日がくる
鬼面持つ処世多かれ少なかれ

堺市神原文

モガだった母の血を引く遊び好き
疲れ取るダーツと遊ぶ小半日
遠い日の母が生きてる針と糸
勝ち負けは気にはしないと見栄を張り
荒れた世に愛が欲しくて花植える

堺市國見蘭香

ザザッと雨トマトも茄子も笑うてる
欠けたコップパズルのように接いでみる
犬褒めて隣がいつそう近うなる
神様の手加減欲しい雨の量
何となく毒が溜まった七十路

堺市近藤豊子

すきとおる傘へぼつりと降りはじめ
びしょびしょにぬれて唄えばジーン・ケリー
夕立ちにあとずさりして電車まつ
きたきたきた路面電車の厚化粧
いまはむかし車窓からみた焼野原

堺市矢倉五月

ぜいたくな時間を使う庭仕事
ひと言を貰い迷路の出口見え
責任は一緒に取ると背をたたく
相槌が優しく何も彼も話す
ノーという思い豊んで席を立つ

堺市山本半銭

褒められた一句を抱いて師を恋うる
夏木立もうお浄土へ着かれたか
亡父の手が肩を抱くよに香流れ
店屋物に一手間かける母だった
六人の兄弟八十過ぎて皆達者

堺市宮本かりん

平穩な明日をめざしている歩み
ひと言の重さハートに染みてくる
門柱にしがみついている空蟬よ
ふわふわと煽て上手にのせられて
やさしさの根源母の笑顔だな

堺市齋藤 さくら

開け放ち団扇で心地よい昼寝
似たような帽子かぶって散歩道
弁当の中で梅干し威張ってる
言いわけはしないと心決めている
見るからに優しい人に道尋ね

堺市西村 りつえ

朝一番漢方薬で出る元氣
憎かった脂肪もそがれSサイズ
種なし葡萄国の未来に憂う房
長嶋の笑顔嬉しい同世代
建て替えた寺生臭く遠くなり

四條畷市 吉岡 修

萌えたつた緑がファイトファイト言う
ハートにも一色足して会いに行く
相槌を打ったら会費取りに来た
人間がやがて地球を食べつくす
その昔役にたつた社歌社訓

吹田市 山本 希久子

介護する方がいびきを先にかく
ありがとう ごめんね何といひ響き
夕刊をたたんで今日を締めくくる
浜風を味方に伸びてゆく打球
八月の海命とは平和とは

吹田市 穴 吹 尚 士

どか弁にたつぷり母が詰めてある
行くところもないのに妻は化粧する
ダイエツトすると氣力が萎えてくる
損得を見極めてから口開く
借りてから葉書一枚よこさない

吹田市 瀬 戸 まさよ

平凡な人生劇場やがて幕
テレビよりラジオの味のいいふとん
目の手術見えすぎるのも良し悪し
母からの伝授冬瓜ずいきあり
名門のホテルコーヒーだけにする

吹田市 大谷 篤子

おしみなく育てる事に精を出し
青年の手の柔らかさ温かさ
万華鏡大人の今も夢さそう
買い溜めて結局無駄にしてしまう
優しさに本音ポロリとこぼれ落ち

吹田市 野下之男

世界一何でも欲しい星条旗
爆弾が知らぬ顔してパスの客
僕ちゃんが俺に変われば持て余し
番号で人生変える揭示板
栄転を添えて教え子夏便り

吹田市 早川棲世

平均余命俺も一〇〇〇号まで行けそう(誌号九四〇号)
俺の昔は戦時下 君にはバブル期か
小泉の是非声高に町議選
首相ノーネクタイ芸能人正装
入社時は難関退社時は斜陽

吹田市 岩屋美明

すれ違う若さが匂うキャミソール
相部屋でのろけられてるアホらしさ
ロスタイムそれもまたよしループタイ
悩みごとあっても飯はよく食べる
折角の人生そろり参ろうか

吹田市 木下敏子

うす化粧嬉しい事が待っている
たまに会うひとにいい事だけを言い
ダイエットしたつもりです太鼓腹
早起きの徳を積んでる足の裏
菜園のトマトのいのち貰う朝

大東市 倣児玉蛙

眼鏡替え欲がだんだん深くなり
次の世もきつと夫の妻になる
まだ女ですよと古稀の紅をひき
校門を出るとおやつが気になる子
息抜きに庭へ出て見るバラの花

高槻市 傍島克治

こんなこと常識やでとバカにされ
嫁に行く娘と同じ名の嫁が来る
孫の顔見たくて渡米元氣です
退院で禁酒ブレイキ緩みだす
検便八年異状見つまり癌告知

高槻市 乙倉武史

無差別テロやがて天誅下るだろ
初蟬が吉日選ぶ土の中
偉い人も人間表裏はある
量よりも質に傾く歳のせい
故障多発点検補充老いの身は

高槻市 江原秀夫

人生のおまけ楽しむ夫婦旅
百歳へチャレンジ初夏の風にのる
差し掛けた傘に背中がもえてくる
虚と実の胸つき合わせ今日も暮れ
慎重に過ぎてチャンスは手から洩れ

高槻市 富田美義

豊中市 山門タミ

バイキング欲と一緒に恥も盛り
諸々の被害がかすむ電車事故
健康で長生きするが許されよ
ご馳走は無いが田舎に匂の味
鍵穴を共有してゐる白い傘

高槻市 生田義一

豊中市 吉田あずき

孫二歳ジジお守りでくったくた
交流戦人気下落に歯止めかけ
このままで突っ走ろうよタイガース
本願寺鳩が輪になり会議中
七転び八起きで添い遂げ五十年

豊中市 安藤寿美子

クールビズ会社が潰れたんやらか
気の毒に孫は私に似たような
降って来た そっちはどうと長電話
怖い人 理路整然とおこらはる
傘開くのがめんどろで濡れて行く

豊中市 江見見清

愛想が良くて言い値でしか買えず
敬老の日とジジババはひと括り
楽しみなことはきれいな字の手帳
時どきはこれは旨いと言っておく
若いねともう言われない歳になる

パソコンもメールも出来ず馬が合
お偉いさんニュースのたびに頭下げ
わが終焉ポックリ寺に詣ったが
懐古録音昔知る友はずみ合う
今盛り亡夫と最後の菖蒲園

生きる権利地球のどこに住もうとも

青かった地球血の色滲みてる

いたわりの一言にある親和力

炎天へ挑む気で着る派手なシャツ

俄雨口実にして呑み直す

豊中市 樫谷郁子

街道を行く興味津津司馬史観

骨董品興味ある者座り込む

待つ事を上手な犬は目をつぶる

待つて待たせて人の世渡る機微を知る

尼崎またも名を呼ぶ石綿禍

豊中市 藤井則彦

ビル風にいけずをされた美容院
暗証の番号なのに忘れてる

右腕に時計をはめて若返る

イタリアで一息つけたカッパ麵

オルガンの音と響き合うフレスコ画

豊中市 水野黒兎

銀行の跡に百円シヨップでき

寝ころんでテロ見る電気紙芝居

それぞれの塔を直指して子は飛翔

原点をたどれば水の湧く故郷

妻の愚痴四季折々の変化見せ

富田林市 大橋鐘造

物差しを沢山持った母の愛

錯覚の風に誘われ舞い上がる

シナリオにない人生の浮き沈み

目の鱗落ちて心の窓開く

甘言で腹の底まで覗かれる

富田林市 中井アキ

短夜を蛍と熱くなってゆく

忙しい人とひとときモカコーヒ

惜春よ赤いポストに辿りつく

路面バス アリバイひとつ乗せている

突然のひとこと嵐連れてくる

富田林市 稲川恵勇

鯛のアラ年杵のバースデイ

身の内の鬼が性善説嗤う

要領の悪さ真面目で庇ってる

好きなこととしてはりますと放つとかれ

てっぺんもどん底も見てやっど古希

富田林市 中崎深雪

皴白髪増えた道筋あなどるな

言っておかねば親が廢るといふものよ

まっ裸の本音と本音シヨートする

激昂をおさめんと子犬抱きしめる

詫びているつもりかお皿洗う息子

富田林市 池森子

峠には峠としての風当り

父よりも母が啖呵を切るとっさ

さらさらとわたしを抉る風の舌

お喋りが過ぎた辺りに乱気流

それから逢いたくなくなった丸木橋

寝屋川市 籠島恵子

ご利益がありそうな腹式呼吸

さんま半分きちんと皿に盛りつける

独り身もいいな今さらとも思ふ

何ごともあつてはならぬ水の音

ブーマラン帰らなくてもいいからぬ

寝屋川市 富山ルイ子

仲の良い夫婦見ていてほっとする

銀婚式赤い糸もうほどけない

世界中に不気味な影が見えかくれ

申年の梅をもらつておすそわけ

お節介すぎてとうとうきらわれる

寝屋川市 太田とし子

島に来て島の感じがない稲田

息つめてポリウム上げた盗み聞き

橋の名を残して大阪水の町

ステップを忘れた心錆びている

火と燃える体温がある脈がある

寝屋川市 坂上高栄

夾竹桃赤が目に浸む忌が巡る

アスベスト進歩の裏の人柱

湯水等ともつたいないよ水の恩

行政も追い付けません悪の知恵

点滴にやつと笑顔のICU

羽曳野市 吉川寿美

自分史の処々にある伏せ字

石一つ投げて波紋の中にいる

格好良く生きてゆきたしその日まで

母は迷子になってませんか仏さま

風とかたい約束してる花めしべ

羽曳野市 徳山みつこ

段々とスローテンポが好きになる

大鉢にそうめん青ジソと泳ぎ

うまいという声に狙ほくそえむ

難問もゴミも漂う日本海

もう秋だ秋だとコスモスが揺れる

羽曳野市 三好專平

軍隊も民営化するつもりです

バーコード貼ったお棺に入れられる

ぶっちゃけた話の好きな浪速っ子

プライドを捨てても酒にしがみつки

バンザイクリフを黒潮洗う沖縄忌

羽曳野市 酒井一壺

鈍行の切符で生きるマイペース

クールビズより省エネでよく分かり

魚屋の蠅が家までついて来る

あなた黄がびったりですと試着室

早よ行かな退院すると行く見舞

羽曳野市 安芸田泰子

軽い嘘急場をしのぐ出来心

落日へ明日ある事を疑わず

我儘が通り孤独が深くなる

失敗が続いてからの引き込み

コンビニで弁当一つ買う孤独

藤井寺市 高田美代子

もう嫌だなんて真夏のお引越

私のやる気もゴミ箱に捨てる

落ち着けば古い茶器など出してみよ

手放して喜ぶものは何もなし

モンゴル勢の多い土俵で名古屋場所

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

胸張って歩く靴音調子よい

気がついていない振りする難かしさ

正直に言えば火の粉が飛んでくる

寄りそって扇子の風をあげるひと

嬉しさを隠し切れない弾みよう

藤井寺市 中島 志洋

体力の衰え口でカバーする

金で済む相手と酒で済む相手

働かず年金届く有り難さ

ベランダへ妻を呼びだす丸い月

二人きり他人行儀がじれったい

藤井寺市 若松 雅枝

生きている証か汗が背を伝う

後輩に譲ってボクの席がない

とばかり怖くてみんな知らぬ振り

一杯のビールを分けて丁度良い

誰だっけ兎も角握手しておこう

藤井寺市 鈴木 いさお

さあ行くぞ唇かんで眉上げて

子の世話にならぬつもりの方歩計

歳とって段々亡父に似る不思議

ひと言が足りぬ夫と多い妻

よその子の出世めでたし羨まし

阪南市 森村 美花

植生の宿清らに歌う反戦歌

梅雨晴れに生まれた命誇る蟬

この夏も元気がほしいゴージャ切る

嫌み言う狭い心を映す顔

こだわりの持たない友だ澄んだ目だ

東大阪市 谷口 義

モーニング四角い男出来上り

牛乳はパツクになってまづくなり

真心を込めてお箸を洗ってる

おばあさんはなかなかのサムライである

雨の日は雨と散歩をしています

東大阪市 西村 哲夫

車椅子押せばみんなが誉めてくる

木ぎれだが川に流せぬ恩がある

苦悩の限界本読むことにする

占いに凝れば数子に泣かされる

総理殿あなたの国じゃありません

東大阪市 笠井 欣子

人生の鬼ごっこにも疲れ気味

夫婦でも他人でいたい時もある

ベランダの葱重宝なカップ麺

幸せに酔った心にすきま風

こんな事してたらあかん捻子を巻く

東大阪市 北村 賢子

生きるのがだんだん辛いメカオンチ

お似合いですの一言へつい買わされる

私の中に居た子が二児の母

名前より息子と叫ぶ親心

その利那利那楽しく生きている

東大阪市 中岡 妙

まだゆとりあると思てる老い仕度

好きなこととしてはるやろかあの世でも

好きキライ感情線が消えてきた

静かにと貼ってあるのに咳が出る

柔らかい土にしあわせ蒔いておく

枚方市 海老池 洋

耕して土と予約をする素足

多忙とは別に筆まめ筆不精

梅雨晴れ間待つ畳まれた車椅子

ゆっくりと待つことヤモリから学ぶ

光るもの見せたい人と隠す人

枚方市 寺川 弘一

かくれんぼはしなくなったら森へ行く

どじな奴 西瓜泥棒しかできぬ

レシビ通りに作りそのたび違う味

恋人にふられた夜は無人島

丸木橋戻りの怖さ考えぬ

枚方市 丹後屋 肇

必勝の方程式が狂う雨後

子つばめが巢立ってがらんどうの軒

芳香剤雨期の来客待ち侘びる

年頃になって双子が別行動

歳月が似たもの夫婦に丸め捏ね

枚方市 莊司 弘之

絶妙の甘さを作る塩加減

血が騒ぎ青春18買ってみる

親と子が素直になれるEメール

昼はセミ夜はカエルに励まされ

甕仕込み悠久誘う芋焼酎

枚方市 森本 節子

そのむかし枕草子に出てくる湯

右と言えば左といて暮してる

なれなれしい人には一歩距離をおく

レジタルの補聴器買ったがなじめない

長針のもたもた歩む夏の午後

枚方市 安達 忠央

ライバルの喜ぶ顔に奮い立ち

泣きたいが嬉しい振りも処世術

背番号六の野球が我が誇り

逆転を信じてファン帰らない

精一杯つましくふたり生きてきた

箕面市 出口 セツ子

輪の外で見てる淋しいとも言えず
わたくしの心覗きたがる鏡

カラフルな傘で心へ紅をさす

久方の旅へ大雨邪魔をする

深淵を覗かぬように生きている

守口市 井上 桂作

聞き馴れぬ町が生れる変な名で

少子化で長生きやがて苦の種に

反論を受けてたつ人頼もしい

正直に大口あけてあくびする

開拓者野茂の偉業を称えたい

八尾市 内海 幸生

テロリスト達にも身内あろうもの

買ったもの貰ったものにも深い味

売る人が美味しいと言う そやろかな

年老いて忘れた笑い寄席で買う

知らん顔したまま別れる好きだから

八尾市 宮崎 シマ子

猫に鈴夫にケイタイつけておく

毎日が新作ドラマ娘の世界

氷一片梅焼酎が喉通過

いつも来るヘルパーさんは家族並

遺言状に書いてあるのが我が本音

八尾市 宮西 弥生

晩学の知恵で残りを咲かせてる

奥深い茶ごころまるくまるくいる

千年杉千年ひとすじ燃えつつげ

榎山へ行く日もやはりおいお茶

生きている限りは歩く古寺めぐり

八尾市 高杉 千歩

扇風機ひとり占めして夏を越す

来年の約束もつかいな

年寄りに寒さ我慢の昼電車

生き上手すぐに路線を変えている

戒名に雅号冥土の句座予約

八尾市 吉村 一風

ほん少し邪心へのびた髭をそる

幸せは妻も息子もようしゃべる

よう食べてよう笑ってる老いの皺

恙無い日の午後の茶が口に合い

とじたまぶたにくいの山河の走りぬけ

八尾市 生嶋 ますみ

紫外線無視した過去をうらむ染み

腹が立ち観る気がしない巨人戦

曲者は癌ではないと知る安堵

好物をゆっくりと待つ回り寿司

くちなしの香りキッチン和ませる

八尾市 村上 ミツ子

年とつたからこそ見えるものがある

長嶋さん痛痛しくて見てられぬ

雨欲しいと言えばどひゃつと降ってくる

痛む足さする雨音ききながら

地震かみなりテロに洪水みんなイヤ

八尾市 山本 宏至

水なすの素朴な味が僕は好き

乗せられて相槌うってだまされる

病み上り人の言葉があたたかい

親切でまいた情けが実を結ぶ

溪流を上りイオンを浴びる旅

大阪府 桑田 ゆきの

通夜の座で寡黙を増した蛍の灯

病む窓へ蛍一夜を癒している

睡蓮に極楽行きの詩を読む

水盗む罪の意識を持ちながら

ガラス皿涼を招いて食進む

大阪府 野田 栄呼

雨続きわがもの顔で伸びる草

リハピリの効果を試す万歩計

トラ負けに千円入れる貯金箱

骨減って脂肪が増える喜寿祝く

ホームランだけでは勝てぬ巨人軍

大阪府 澤田 和重

意気込みを買うがと当てにされてない

主婦をする楽しさ家族から貰う

鯖読んだ歳に合わせる派手な服

医者はしごして生き延びる術を知る

家族みな無口にさせた手術室

大阪府 初山 隆盛

句文集そこはかとなく師のお声

遠き声風が耳打ちしてくれる

セプテンパーソングが背なを押しにくる

丸い風尖った風の舞うニュース

点景のレトロのビルが光る街

大阪府 前田 ゆい

檸檬の君のいわれ聞き師の在りし日に

梯子かけ木の実挽ぐ子も居なくなり

クールビズ何処か締らぬ議員殿

宝くじ当れば寄付とすまし顔

また同じ話を堪えて聞く修業

神戸市 山口 光久

寛容な心が事件にはさせぬ

買うまでが花です胸が躍ります

捨石のつもりが未練湧いてくる

親しさに溺れぬように距離をおく

お互いに魔法かけあい共白髪

神戸市 伊勢田 毅

古い二人孫の電話を奪い合う
赤提灯 今日も総理の首が飛び
増税の噂年金揺れ動く
男なら一度は花火揚げたがる
アルバイト揃えて御輿動き出す

神戸市 木村 貴代子

帰り待つこの日々いとし挙式前
待たぬのに何故か迫って来るその日
怪我をして左手の価値思ひ知る
世界への旅は机上で楽しもう
手助けをしたりされたり姉いもと

相生市 中塚 礎石

死ぬるまで守ってくれる影法師
本堂に座れば鬼も経をあげ
引き算を知らず足し算だけで生き
やじろべえ互いに顔を見合わせる
原点へ一歩一歩と考える

芦屋市 黒田 能子

開襟のあたたかい風ほしくなる
しぼんできた夢を時々膨らます
セーターの母と一緒にたたみ方
うっかりと破って捨てたメモ一枚
おめがねに適ったらしいウエディング

尼崎市 春城 武庫坊

生きて八月 六十年を回顧する
季の彩を素直に染めて河の土手
約束を果して花はお辞儀する
ごろ寝して疲れ見せてる足の裏
せい一杯努力を見せて花が散る

尼崎市 春城 年代

遅れぐせついた時計と老いふたり
螢火の記憶は乱れ勝ちになる
じっと動かぬ空気の中で立ち尽す
身のほとり淀む梅雨のまん中で
生涯を通す友だち一人居る

尼崎市 松下 比ろ志

漁村育ちで海が見たくて海を見にゆく
漣がさよならを言う夕間暮れ
幸せにもおふくろの棘抜けぬまま
アジサイが雨を歌って梅雨さなか
存念の影あり楠の深みどり

尼崎市 長浜 美籠

嬉しさを千切りにして持ち帰る
花雫それも愛ならこれも愛
ブランチと漂っている梅雨晴れ間
紙こよりちくり思わぬとこを突く
独り居もよし遠雷を聞いている

尼崎市 軸丸勝巳

義経を追うて須磨寺 一の谷
首塚に眠る敦盛十七歳

一弦琴 青葉の笛のものを悲し

初月給孫ありがとう鱧の鍋

天の如露毀れバケツの雨がくる

川西市 西内朋月

につぼんの病院四番台がない

番号にこだわる人に逆らわず

逆縁の友へまともに話せない

名も知らぬ先祖の墓に手を合わす

きつちりと年金くれるありがたさ

川西市 米原雪子

俄か雨忘れた傘が悔しがる

故里も漁港となつて様替り

たまに来る曾孫おしゃまに標準語

トラブルに信号感じ受診する

黄信号開き直れば楽になり

三田市 久保田千代

川柳の薫る部屋には師の写真

路地裏にまだ人情は生きている

そつくりでなくて良かった子の育ち

天職と続けてみればある実り

どの局も似たりよつたりワイドショー

三田市 北野哲男

散歩にはローンで買った犬を連れ

背中から親父も老けていくんだな

多い目に包んで祝辞たのまれる

ピアガーデン淑女の面が少しずれ

頭では勝てぬが口はまかしとき

西宮市 門谷たず子

シヨーウインドー亡母に似てきた背の曲り

湯気火傷 歳はとりたくないもんだ

遠い日の祭り囃子がまだ消えぬ

風向きが変りシナリオ書き替える

雑踏の流れの中で知るひとり

西宮市 山本義子

露草よ じたばたするの止めました

大声がリーダーの質とは言えぬ

老いてなお食い気盛んをもてあます

健康法あれこれ迷うのは如何

年金はほどほどの賞かも知れぬ

西宮市 坪井孝一

運命を変える出来事ふいに来る

人の道 味方も居れば敵も居り

うちの酒飲み過ぎ注意貼つてある

足し算しか知らぬ男の宝くじ

気まぐれに抱かれた猫がかわいそう

西宮市 秋元 てる

改札の先は古里りんご畠(福壽5句)

思い出せず佇む旧友の庭の松

約束を守れなかつた墓の前

思い出にひたれば故郷の風やさし

墓地の中新道を引く町おこし

西宮市 牧 潤 富喜子

ありがとうも一度言つて降りました

音なしの蚊がまるまると腕にあり

きのうより花のほほ笑み深くなる

この星はまだ戦争が絶えませぬ

大らかな人に目移りして困る

西宮市 緒方 美津子

ケイタイもカードも持たぬ粋な人

このバッグ使いにくいがルイヴィトン

どの部屋も私のものとなり淋し

絵手紙で季節をくれた友が居ぬ

お土産を買わせ上手な宅配便

西宮市 亀岡 哲子

病気では先輩であり子がやさし

五時前に並んで回らないお寿司

グリーンテラス喫煙席はありませぬ

饒舌な蜂が窓から出て行かぬ

患者の悩みあまた抱えて医師若し

西宮市 井上 松煙

悠然と浮世の風に逆らつて

趣味三昧 慎ましくしてマイペース

庭先のトマトのにおい ほんまもん

女子バレー ガッツの笑顔見とれてる

人間に番号ロボットに名前

西宮市 菊池 トミエ

戦争の遠い話が盛上る

気楽さも侘しさもあり夕茜

雨の日は雨と話して逆らわず

悲しみは同じ尺度で計れない

天竜寺今あじさいの花盛り

姫路市 古川 奮水

肥え過ぎは愚か心臓苦しめる

心筋梗塞 神は見捨てず術受ける

カテーテル導入 心の音が鳴る

不整脈静める望み点滴機

右足を礎にして二夜三日

兵庫県 大谷 幸次郎

金貯める音聞いている壁の耳

細い声束ね大きな声にする

難しい顔では出来ぬ仲直り

ネクタイを外して肩の力抜く

出来る子といわれて親が力みだす

和歌山市 福井桂香

シヨートステイ ストレス抱えて帰ります

斜め横向き洗濯機も私も

歩行訓練レッサーパンダに負けられぬ

カーブはていねいに乗物も歯ブラシも

鳥取市 近藤春恵

出漁へ向かう漁船に切火する

お粗末な我が人生に悔いはない

柔肌の曾孫宝のように抱く

派遣隊イラクへ向かう足重い

鳥取市 加藤茶人

本当に母が小さくなって逝く

よそにやる金があるなら税を負け

理屈どうあれ戦争は俺好かん

改憲にいつか来た道かも知れぬ

鳥取市 吉田弘子

見積書イロハ詳しい天下り

瓜ふたつ性格までは保証せぬ

対等へ大黒柱揺れている

諦めの形で暮らす凡夫婦

鳥取市 林露杖

梅雨明ける笑い袋を出して見よ

万緑の山から生まる猪の子連れて

てっぺんが光りだしたで夏帽子

惚け同士妻が若干リードした

鳥取市 宮脇道子

鉢植の西瓜近所の目を癒す

血糖値笑って下げる助け舟

薔薇の樹に朝顔ぐるり絡みつき

癒しです医師の一言光さす

鳥取市 夏目一粹

魂はオタマジャクシも持っている

しあわせを封印されて胃がいれん

真夜中の電話とつきに母案ず

石段を顎よりのほる息づかい

鳥取県 平尾菜美

度忘れの記念日あととする祭り

アンテナに巻かれ常識ゆれている

老木の背後で父が見え隠れ

八月十五日涸れた涙が蘇る

鳥取県 佐伯やえ

朝の散歩花と笑って握手して

夏の終わり大脳のネジ巻きなおす

老いの美学見えぬ聞えぬふりもする

ひからびた心を癒やす仏の灯

鳥取県 太田幸枝

白衣の白 血圧計を狂わせる

一言がすぎて夫婦に波が立つ

冗談を本気に取られ仲間われ

居酒屋に喜怒哀楽の吹きだまり

米子市 白根 ふみ

これ位でよかつた梅雨がほどほどで

願わくは今より悪くならぬよう

梅雨しとど挿木を今は祈りこめ

梅雨しとど足腰痛むことばかり

松江市 佐野木 みえ

永平寺天井の絵をしばし見る旅 3句

かわらけに願いを書いて遠く投げ

越前の竹人形に魂宿る

濁水が一夜明ければ洪水に

松江市 安食 友子

露天風呂月もメルヘン宣われ

ともかくも生まれたわたし七番目

あからさま吐けばいいのよナツツバキ

良い心地鉄線の茎揺らめいて

出雲市 富田 蘭水

色変える紫陽花私に力かす

夢でいい一度天女に逢つてみたい

不安だが飲まねば薬気がすまぬ

イベントが幅きかせてる大合併

出雲市 石倉 芙佐子

女対おんな きりきり舞をしています

ついうっかり女を忘れ男を忘れ

まだ女 夫と居る日はむらさきに

宮司さんも神に召された夏祭り

出雲市 伊藤 玲子

降りそそぐ緑万歳したくなる

枇杷の実を落として雀呼んでやる

溜ったか心の垢が音たてる

告白の白の部分にある迷い

岡山市 井上 柳五郎

食欲がどこに去つたか夏病みす

郵政法自民一枚板でなし

白内障術後視力が一・二

若夫婦クルマ頼りに医者通い

美作市 山本 玉恵

大正生まれと大声では今言えませぬ

ちよつとだけ握られた手の有頂天

スケジュールの多さ自己満足の趣味

嘘ひとつ赤い袋でねむらせる

真庭市 国米 きくゑ

待望の雨も度が過ぎ愚痴られる

捻子ゆるむお歳のせいと医師名言

悲喜交々歩き続けた凡夫婦

考えても何も浮かばぬ白い刻

唐津市 坂本 蜂朗

酒壺を枕に今日も悔いはない

酒壺の中で救命胸衣着け

時時は覗いています壺の外

シエルターのような壺あり停年後

お接待の渋茶合掌して遍路

唐津市 井上勝視

巡り終え至福のお茶の大窪寺

お茶の贅だけで静かな隠居部屋

聞きあきる話にお茶を入れ替える

唐津市 山口高明

若い日の自分見るよな無鉄砲

鳥葬にしると遺言書いてやる

外遊へ息子が持たすバイアグラ

やきもちを焼いて衣類を切り刻み

高知市 北川竹萌

紅ピンク アメリカ芙蓉色競う

何時までの命か朝の散歩道

福は内入った小店の茶がうまい

不快感させてならぬとする会釈

高知県 小澤幸泉

過ぎし日の景色に遅いペンをと

人生の流れにすねる石ひとつ

ぼろぼろの手帳と話す老いの部屋

退屈な顔がゆれてる遅いバス

松山市 高橋宏臣

美術館ピカソと対峙昼下が

一人劇 場面転換ままならず

炎天の無言聞こえるアスファルト

炎天の列に並んで観覧車

東かがわ市 神保坊太郎

徘徊じゃおまへんと花ほめて行き

ホトトギスあの世へ飛脚たのまれる

夢のカケラを拾い集めている夫婦

握手した白手袋は誰だっけ

弘前市 櫻庭順風

風薫る長谷寺の紫陽花の中

人力車薫りの中を縫ってゆく

雪風に負けてたまるか津軽風

神様に救い出されたアツツ島

静岡市 安本晃授

今日が来て明日へ渡る橋さがす

この橋を渡れば神の風に逢う

朝顔の芽が出て花を抱いている

車座の席は上下を決められず

滋賀県 中宗明

閃いた仕事の手順効奏す

銀行員ノルマ消化に汗競う

エラーして歳のせいだと許し乞い

損承知尻込みしているお人好し

大阪市 町田達子

頭かすめる名誉主幹の死が悲し

何ごともこれからの事大らかに

大変な世の中お静かに願う

わずらわしいこと知らぬげに噴水が

大阪市 本 間 満津子

誰かがなにか言うて来そうでいつも待ち

幾つ道曲つて来たかここに居る

沈黙は金と言うのによくしゃべり

名も知らぬ鳥縫うて来た瀬戸の海

大阪市 松 尾 柳右子

兎さんにむけば孫がリング食べ

別腹と西瓜出し来るふる里よ

寒天に包まれ果物謎めいて

安曇野の蕎麦に恋して旅に出る

大阪市 中 村 叡 子

郵政法案棄権欠席許せない

孟蘭盆会一年早し寺案内

過去帳に連綿存じあげぬ人

孫に嫁つなぐえにしがいと嬉しい

和泉市 西 岡 洛 醉

貧しくとも妻子達者で孫達者

人間の顔で文机思案する

葱刻む今朝も佳き日を願ひ妻

七十路を明日は骸と成ろうとも

泉佐野市 山 本 蛙 城

ジャンケンのバーで通して待つ笑い

葬儀保障まで言う保険ご親切

百均の開運グッズ買ってみる

詐欺続く世に金持の多いこと

河内長野市 井 上 喜 醉

冷奴これさえあれば夏が越せ

肩書を無くした男の朝寝坊

我が願ひ届かず無念見えぬ富士

虎ファン派手なファッション甲子園

河内長野市 植 村 喜 代

子を思う父は上等忘れない

目に青葉庭に驚かないでいる

来た限り何か買おうか特価物

下の子は姉のまねして大きなり

岸和田市 長 谷 川 呂 万

あこがれのゴビを駱駝で旅したい

持ち帰り外国硬貨ユニセフへ

いたわりの葉の効き目父卒寿

あこがれのシルクロードへいつの日か

堺市 河 内 月 子

瑞瑞しいわたし夢みて夏野菜

梅干しと粥一日の気を貰う

東北の雨をうらやむ日が続き

炎天下暑い暑いと言う柳

高石市 浅 野 房 子

病抜けひとり赤飯たいしている

食べ物を心痛めず捨てている

人は皆ひとり逝く道連れはない

父母のこと思うと心温まる

高槻市 執行 稲子

無駄すこし反省すこし日々陽気
更年期知らずに生きたああ至福
楊貴妃に今年も会えた通り抜け
てきばきと同年配の七不思議

高槻市 左右田 泰雄

稲光り慌ててテレビ消した午後
紫陽花も急に色づく雨催い
いざと言う時のパワーを蓄える
あとずさる犬と綱引きする散歩

高槻市 瀧本 きよし

金運ぶ役に定年来てしま
趣味ないが世話役ばかり頼まれる
飲みすぎと注意の言葉減った妻
乙姫が竜宮リフォーム着手する

高槻市 西谷 治三郎

体調の良し悪し酒の量で知る
伝統か息子も嫁の尻の下
たてかえ金どうやら忘れられている
長電話牛乳補給しまだしゃべる

高槻市 井上 照子

羨望の的が三児の親になり
信頼を果す外科医のメス光る
子は視線外らし第二の反抗期
梅雨晴れ間下着布団の花が咲く

豊中市 岸田 知香子

ナイターにドラマ取られて妻ぐちる
ポックリと旅立ち願い笹託す
お袋の味知らぬまま八十路坂
世話焼きが二代続いて幹事役

寝屋川市 平松 かすみ

ドクターが腕組みしてどうしよう(義兄入院)
やっぱり長女凜と病名受け止める
誕生日保険見直す子のために
三時間喋り疲れてお開きに

枚方市 宮川 珠笑

人妻の酔顔迫るエスコート
ダイエツトメニユー妻より先に痩せ
呆けてない脳内配線故障中
知ってるの皆に嫌われてる私

枚方市 二宮 山久

降る雨に人生そつとかみしめる
旅人よ六月の雨に何思う
長生きがしたくて減らすコップ酒
悪人になれる俺らの胸の内

八尾市 長谷川 春蘭

炎天下引きずっている重い影
この空の続き母と子の絆
同窓も二人となった夏見舞
人生を楽しく生きた笑いじわ

神戸市 山口 美穂

アメリカはどう思ってる原爆忌

蝉の声梅雨明け迫る凄まじさ

物忘れ続いて今夜は軽い鬱

少子化のつづきを老人から搾る

伊丹市 山崎 君子

偲ぶ会師の偉大さを今更に

天国に届け合唱星かげのワルツ

再会の言葉に込める旅仲間

医者通い木々のみどりに励まされ

篠山市 谷田 多美子

入道雲向こうに温い亡父の影

子が二人歯車ずれることがある

お遍路とザルソバする高野山

待ち侘びた雨も三日で疎まれる

第32回堺まつり協賛

川柳堺秋の誌上川柳大会

出句締切 10月5日

用紙 同じ作品を便箋4枚
に左右2句ずつ

投句料 1000円 各題秀句賞呈
題と選者

「力」 (板野 美子 共選
北野 哲男 共選)

「波」 (志田 千代 共選
中田 たつお 共選)

「神」 (西出 楓楽 共選
天根 夢草 共選)

「肚」 (前川 千津子 共選
河内 天笑 共選)

投句先 〒543-8305

堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

第3回現代川柳の集い

主催 日本現代詩歌文学館
共催 (株)全日本川柳協会
岩手県川柳連盟

開催日 平成17年11月13日(日)

受付 午前10時 開始
開会 午後1時〜午後5時

会場 日本現代詩歌文学館講堂

内容

◆記念講演「闘病とユーモア川柳」

講師 今川乱魚 (株)全日本川柳協会
会長・東葛川柳会最高顧問・幹事
傘川柳会会長・華傘川柳本社幹事

◆日本現代詩歌文学館長賞贈賞式

受賞者 今川乱魚

「癌と闘うユーモア川柳乱魚句集」
(平成15年・新葉館出版)

◆入選作発表・選評

◆表彰 第3回現代川柳の集い賞①
(株)全日本川柳協会賞①
岩手県川柳連盟賞①

選者特選賞(各1)

《当日題》

選者 天根夢草選(川柳展望社)
岡崎 守選(札幌川柳社)

題発表 午前10時

題締切 午前11時30分

投句料 宿題未応募の方のみ、千円

懇親会 午後5時30分〜7時30分

ホテルシティプラザ北上

会費 五千円(会費は当日受

付・出席希望の場合、事前にお

申し込み願います)

※主催館では「面白の輪読はしていません。

「川柳」をくたかたわす

作品募集

作品 各題2句・未発表作品を所定
の応募用紙を使用して、ご応募
ください(用紙のコピー可)

《宿題》

〔紙〕 大野風柳 選都都川柳社

〔道〕 佐藤岳俊 選川柳人社

〔破〕 栗石隆子 選川柳宮城野社

〔追〕 森中恵美子 選華傘川柳本社

投句料 千円(郵便小為替か現金書留
にて作品に同封願います)

締切 平成17年9月30日(金)

※必着

応募先 〒024-8503
岩手県北上市本石町2-15-60

「現代川柳の集い」行

日本現代詩歌文学館

発表 「第3回現代川柳の集い」にて

※応募用紙はホームページからダウン
ロードできます。応募用紙を郵送で
ご希望の場合は、返信用の封筒を同
封の上、当館宛にご請求ください。

日本現代詩歌文学館

TEL 0197(65)1728

FAX 0197(64)3621

URL <http://www.shikabun.jp>

E-mail shika@shikabun.jp

川柳塔の

川柳讃歌

⑨

木津川

計

保育器で明日を背負っている男

山岡 富美子

男の子は恐いのです。末は、明日を背負う総理大臣か、背負うどころかルンペンか。ですが、この頃は女の子も恐いですね。能力に差はありませんから。僕の大学が来春、小学校を開校します。「学んだ子どもたちが、世界をかえていく」と。富美子さん、保育器の「男」を見定めるために長生きしましょう。

切符買わぬ親に六つがふくれ面

川原 章久

見上げたお子です。仮に保育器の「男」やつたとしましょう。六つにして一人前の自覚を持つまでに成長したのです。けなげな男児です。「寺子屋」の松王丸が申します。「利口なやつ、立派なやつ、けなげな八つや九つで、親にかわって恩送り。章久さん、その六つの子は将来頼りになりますよ。

若いっていいなオンボロ着て似合う

倉益 一瑠

年寄りがボロボンのジーパンを穿いていた。哀れも窮まります。戦前の高校生は弊衣破帽でした。昨今は女子学生もオンボロを身につけます。「さよならと言ったら黙ってうつつむいてた、お下げ髪」の少女はどこへ姿を消したのでしょうか。一瑠さん、ボロをまとった青春もうらやましいが、「白い花の咲く頃」の少女も懐しいですね。

折り畳み傘持つ男なんて嫌い

小島 蘭幸

不意の雨にかかわらず、早くも傘を差す人に感心することがあります。用意周到な、「備えあれば憂いなし」の男が蘭幸さんには小者に思えて仕方ないのです。ロシアの大男のように、濡れて歩いてもいいではないか。すると年中、日和下駄に蝙蝠傘だった永井荷風を、蘭幸さん、どう思いますか。

愛妻家あつて愛夫家ない不思議

山本 希久子

なるほど、「愛夫家」の不在、卓見です。そこで希久子さんに伺います。「おふくろの味」は看板になりますが、「女房の味」を見ることがないのは为什么呢。それに最近「お」が抜けて「フクロの味」になりましてね。抜けた「お」は「羨」の上について

「おしつけ」で納まっています。

金借りる方は友情噛みしめる

寺川 弘一

弘一さんの人間を見る眼の的確です。「英雄伝」で知られるギリシャの哲学者・プラタークの言です。「窮乏の友に友たるは、友の最も大なるものなり」と。金の切れ目が縁の切れ目という人間関係は友情と無縁です。

貧乏に産まれ何食うてもうまい

加藤 茶人

僕も若い頃は貧乏で、飯に醤油をかけて食べる、その飯のうまかったこと。海辺の川で採った牡蠣のおかずの無上の味。茶人さんも貧乏に育ち、よかつたのです。涙とともに固いパンを齧ったことのない人間と人生を共に談ずることはできません。

友だちがみな貧乏でありがたい

岸本 宏章

栄耀栄華を極める男と貧乏暮しの人間とは友人であり難いのです。宏章さん、遺憾ながら「類は友を呼ぶ」のです。ですから僕も宏章さんの同志であります。「立て餓えたる者よ」はピンときませんが、「万国の貧乏人、団結せよ」は今日もなお有効な呼びかけです。

(立命館大学教授・「上方芸能」誌代表)

白選集

河内 天笑

小西 雄々

灼熱を抜けてデイスカバリ―還る
衆目の中野口さん大仕事
ご褒美に綺麗な地球まのあたり
耳底を離れぬ焼夷弾の雨
長崎の鐘被爆者よ安らかに

木村 あきら

小林 由多香

掃除機が俺に向かつて攻めてくる
(爺捨て山行)
バラの花刺には油断なりません
明日吹く風に全てを賭けてみる
陰口は枝葉を付けて風に乗る
予定表いっぱい詰めて無職です

並べると大きい方へ手が伸びる
雑草もひっそり雨を待っている
適齢期嫁にも行かず働かず
ぜいたくに連作嫌う花もある
ネクタイを結ぶ鏡に妻も居る

黒川 紫香

斉藤 姦

久しぶり戻った家は静かなり
退院の日のお別れは賑やかに
病院を振り向きもせず道曲る
これからは自由に歩く道暑し
梅雨の音軽がる聞いて傘をさす

ねぶたねぶたどんなドラマを生むだろう
豊穰太鼓どんどん祈り深くなる
鍬を振る姿も父に似てきたな
もう競いあつてる子等の豆の蔓
雨の日はのんびりしろという畑

田中正坊

土橋 螢

『群像』の一〇一人目 大八氏（東野大八氏を偲ぶ）
幻の句集が出たぞ「ああしんど」

零戦に大和魂 置いてきた
うしろにも右ひだりにも隙がない

命日にびたり出版記念会

地震 雷とつさに人を驚かす

お歴々つどい大八氏を偲ぶ

真実を打ち明けている白息
君が代は古典音楽かも知れぬ

人ぞ知る「大八文庫」ここにあり

玉置 重人

仁部 四郎

大切な余生と想うループタイ

ジョーカーを水平線で探し出す

マイペースもう慌てない万歩計

ジョーカーに憧れたまま職を退き

組みなおす予算めがねと補聴器と

ジョーカーのマスク毎日手入れする

原点に戻ればみそ汁とめざし

ジョーカーの席が真ん中舞台裏

視聴率ケンカは派手な方がよい

恒松 町紅

波多野 五楽庵

正面に置くと格好よく見える

秋時雨アルキメデスを考える

ど忘れがまたはじまった筆洗う

猫じゃらし猫の眩暈が止まらない

合図したのに気がつかぬ喋りすぎ

幻聴の中でストレス煮えたぎる

答案を上手に書いた左利き

島へ来る一週四日の聴診器

幸せは夢中になれるものがある

北風の身の上話聞いてやる

遠山 可住

(敬) 藤村 女

気にいらぬことはとほけて母達者

点々とポットが光る朝の海

買物籠先ずは本日奉仕品

辞書をくるホトホト老いを知らされる

腕時計用なく土に陽が暮れる

晩年の亡母に似て来てほろにがし

禅僧のよう鉢に咲く山野草

四代を生きて悔い無い座りだこ

娘がくれた水着箆筒へしもたまま

倅せは今朝もパッチリ目が覚める

芳地狸村

八十田洞庵

京劇におくる拍手が温い(北京)

京劇の華麗な舞台に酔っている

裏町のくらしに昔の顔がある

自転車が生き生き駆ける朝の街

少年の華の演技に鳴る拍手

宮口笛生

両川洋々

氏神を護り続けている行事

余生とは何か病院頼りです

余生とは何か動ける元氣持つ

好きな酒のんで余生を全うす

ナスキュウリ息吹き返す夕立に

森下愛論

阿萬萬的

丸い絵を描いて確かな掌の温み

思い切り翔べと手放す紙のつる

さらさらときれいな嘘が狂い咲く

てのひらに余生を乗せて愚痴ばかり

残り火を抱いて温めて自己嫌悪

八木千代

石川侃流洞

バックミラー過ぎし旅路も見せたがる

月の下 嫁と仏とわが影と

ふるさとは雨 見届けたかのように

月は沈む 薫るべきもの薫らせて

死後もなお薫らんとして木を遺す

剝落の石仏にも史実あり

騒音に流れてしまう正義感

お犬さまにもファッションがある散歩道

海を知る男は海をあなどらぬ

感情を気ままに見せる海が好き

憲法九条まだ生きている生きている

ベン先にサタンが潜むから恐れ

逝く日まで僕はお釈迦の弟子でよい

女帝なら日本女帝でいいじゃない

ヨン様へハートが家出してしま

言い訳へわかつてますわと妻笑う

すぐ妥協軽い男と見て取られ

黙ってる男を無視していた不覚

駄洒落一つ軽くかわしていた話題

程々にねと妻も主治医も口はさむ

狙の鯉が暴れて虚を衝かれ

アドバルーン地球を吊つてりきんでる

男だつて泣きたい時もある独り

アスファルトへ打水街の夕涼み

窓口は暇編棒のリズミカル

板尾 岳人

風の盆今年も亡母に逢えるかも
三秋の如し逢いたいひともなく
風の盆別れ話はせぬように
手を握るコツを覚えた風の盆
好きなきひと出来たら汽車で秋を往く

奥田 みつ子

朝顔を数えて今日が始まりぬ
花石榴 葉陰にありてなお紅し
星祭 遥かな空に消えたひと
蝉しぐれ過ぎ来し日々のあれやこれ
思いきり気ままに生きて終わらんか

河井 庸佑

万全の策に思わぬ勇み足
残念な結果知らせる辛い役
終着駅へ崩さぬ老いのマイペース
駆け引きのうまい男へ身構える
原点に戻り探った打開策

川島 諷云児

生かされて点す命の常夜燈
自分ではまだまだ自信ある歩幅
角のない石は流れに逆らわず
労り合うことこそ夫婦だと思ふ
うっかりで済まぬボタンの掛け違い



(つづき)

兵庫県 岩本 美緒子

年金の重み知る身へ黙然す
忌は十年わが古い愚痴も告げている
惚け防止活字に馴染み彩も溶き
交流の輪があるからハツパかけてます

第9回 川柳展望全国大会

日時 9月24日(土) 10時30分開場
場所 ホテルアウィーナ大阪
大阪市天王寺区石ケ辻町19-12
TEL 06-6772-1441

参加費 2000円

題と選者 (各題2句) 出句締切正午

席題 「 」 橋倉久美子選

宿題 「皆」仁賀 俊雄 選 「豆」日野 愿 選

「肉」村上佳津代 選 「背」池見 静男 選

「買う」籠島 恵子 選 「下」村田 絹子 選

「自由吟」なかはられいこ・鈴木 公弘・

笹田かなえ・新家 完司・

坂根 寛哉・天根 夢草 選

○自由吟は各選者に違う句を出して下さい

○大会後に懇親パーティーあり

事務局 〒567-0009 茨木市山手台4-6-3-101

TEL 072-649-5226

主催 川柳展望社

水煙抄

板尾岳人選

大阪市 三浦 千津子

お見舞に笑い袋を携えて
面取りをされて悪女になりきれぬ
根回しへ巻かれた振りの自尊心
生き様をみんな知ってる足の裏
武士という構えに本音語れない
これからを思う孤独を学ばねば

府中市 馬場 利子

人生に絡まる事件いろはにはほ
孤独さにピンクが似合う秋日和
罪一つ溶けて底つく紙コップ
誘われた風に聞かせる子守唄
霧はれてぼっかり浮かぶ父の船
燃え上がる心を洗う通り雨

和歌山市 山田 侃太

正直な人だ背骨が透けている
見ない振りすると鎖がなお重い
隠す物ばかりが増える独り酒

子が決めた道だ信じてやることだ
鬼の首取って涼しくしてやろう
汽車遅延 なにか謎めく旅日記

和歌山県 辻内 次根

うれしいとつい甘くなる両の脇
散歩道花の図鑑が欲しくなる
ぴったりの靴で散歩の延びる距離
凄いい力が出そう暗示をかけている
缶ビール横に阪神リードする
筆順を守って静かなる暮らし

奈良市 乾 春雄

浮き沈み耐えて仏の顔になり
伸びている寿命の先に地図がない
サングラス女がかくす過去の謎
ケータイも親子オモチャにして平和
カッとなり上げた拳が深呼吸
古寺巡るゆとり絵になる老い二人

生駒市 小西 稔

披露宴褒める言葉に苦勞する
言いすぎて後が続かぬ褒め言葉
こわい夢自分の声で目をさます
我が夢のかなわぬ所子に頼る
知識人まるい顔して四角ばり

和歌山市 土屋 起世子

泣くという手もあつたのに肩の凝り
無になつて見えてきました打開策
充電をたつぷりしてもする遅刻
パラソルが去年の夏を記憶する
百円の傘で父さんお迎えに

和歌山市 根田 よしこ

空梅雨に泣く人笑う人がいる
町に住み不便な田舎懐かしむ
さし木する梅雨の恵みに感謝して
何くそと思う時には深呼吸
建設中介護ホームは花盛り

和歌山市 柏原 夕 胡

しあわせを食べたふうせん風に乗る
カーテンものんびり揺れる午後の風
鏡よ鏡 今日のおまえは美人だぞ
嘘抱いて曇りガラスが好きになる
想い出を重ねて愛が煮こごりぬ

田辺市 大峠 可動

炎天下蟻にも負傷兵がいる
負け犬の暴走メディアに載りたがり
点線の点から崩す蟻の群れ
人間が萎える老後はみな奇人
人生も冒険だったまわり道

和歌山県 村中 悦男

嫁入りを考えて解くお中元
難聴で合わして笑う自己嫌悪
副作用なくて笑いが効くという
過去話すべて満点らしい妻
根付くまで時間ほしいと苗の声

鳥取市 中宇地 秀 四

自分史に罪と罰とをえぐり出す
棘のあるブラックジョーク輪をこわす
賽銭の箱に溢れる欲の皮
掌の幸せじつと握りしめ
当たるとは思っていないくじを買う

鳥取市 山口 千代子

親の敷くレールが子には重過ぎる
年金は命の綱で生きられる
言いたいが我慢がまん胸を撫で
大正昭和平成歩きさしむ足
折角の化粧が汗で流される

倉吉市 酒井 芙美子
にっこりと迎えてあげる妻でいる

曼珠沙華恋の炎を燃やしてる
恋文が入ってポスト赤くなり
燕来る去年の絆忘れずに
餌まいて小鳥呼んでるわび住い

倉吉市 前田 喜美子

集中豪雨 地球の怒りかも知れぬ
閃めきを忘れた脳が夏ばてる
波風を立ててこらえて夫婦みち
夏野菜裏の畑でバテている
快適の裏で氷山割れる音

境港市 遠藤 那珂子

みつ峰がバラの香りにまどわされ
ビタミンを一皿増やしガンバルぞ
ゆらゆらとなんの不安もない日暮れ
ばつさりと切り捨てないでいる未練
愛つげぬ人に何でもないハガキ

米子市 猪森 スミエ

子を育てやつと分った母の汗
効くのなら苦い薬も我慢する
限界の我慢吹きだすにらめっこ
大物の器になると四股を踏む
宝石がニッコリ笑うくすり指

米子市 小塩 智加恵

七人の敵にやんわり妻の口
厚化粧何か不気味なほほ笑みだ
パス銭に手間どる人が今日も居る
手の平にのせた夫も軽くなる
夫婦でも嫌いな花や好きな花

鳥取県 岩崎 和子

九条がいつ崩される日々不安
二人連れ三歩下がった妻が先
ネクタイが現役の労物語る
幼な子の護身が笑顔固くする
痩せるのが美人と思う命がけ

松江市 松浦 登志子

ややあって肉ジャガ食べる間柄
虹色の鉛筆ちびて子は遠く
靴の紐結び見あげる夏の空
収穫の前にカラスが察知する
どんぐりが多くて前に進めない

出雲市 川島 和歌子

故郷の自慢話を子に聞かす
肩書きをはずすと風も通りぬけ
もやもやとストレスうづく熱帯夜
行き詰まり思案に暮れて膝を抱く
寺巡り諸行無常の風に会う

出雲市 加藤 スズコ

ポケットの拳が決めた生きる道
爽やかなニュースがほしい初夏の風
もどれない今日を大事に捻子をまく
好きな道みどりの風が背を押す
好物を盛る贅沢の年金日

雲南市 菅 田 かつ子

お茶碗が欠けて言い訳また一つ
お若いと言うから背筋曲げられず
賑やかに木蔭で寄り合う雨蛙
髪型を変えているのに気がつかぬ
降れば止め降らねば降れと騒ぎたて

島根県 武 島 ちよえ

下り坂ブレーキ故障したらしい
うっかりと漏らした言葉戻らない
定位置を占領されて落付かぬ
据え膳に飽きて我が家が懐かしい
便利さは金が後から追いかける

岡山県 矢 谷 富士野

立ち止まるケーキ屋我慢の血糖値
下戸なのに今年も梅酒たんと漬け
販売機愛想ないけどつりが出る
チャンバラの遊びも知らぬ塾通い
恋人の膝の師の句は我が宝

府中市 岩 本 雅 代

平凡に生きる老いの手飾る幸
水が涸れ湖底の街がなつかしい
梅雨になり犬もストレス溜めている
不況風ぶつとぶような太鼓の音
夏の陣汗と草取る根競べ

今治市 野 村 清 美

来る来ない綺麗なバラの丸坊主
小包の宛名やさしい嫁の文字
派手を着て人差し指を背に受ける
万歩計コースを変えた靴の底
褒め言葉中に混じったバラの刺

高知県 桑 名 孝 雄

負うた子の指図尊重してやろ
口だけは生きる図太さ持っている
自己中になつて長生きするもよし
気取つても所詮は雑魚の群の中
水墨画ピンク少うし欲しくなる

札幌市 三 浦 強 一

入選句ラジオで聞いた師のお声(薫風先生)
うんうんと言うが何にも聞いてない
無理をせぬ老人力が付いてくる
七人の敵も味方もセピア色
ピアホール満杯にする温度計

シドニー 三谷 たん吉

梅雨どきは梅雨どきらしく降つてくれ
水を買えたまげていたら酸素だと
韓流がいいなと思う爽やかで

テロリストどうして欲しい言つてみる

テロリストもしやお前は愉快犯

シドニー 坂上 のり子

人間がどんどん未来食い荒らす

永らえばテロの怖さも見てしまう

石油より水で争う未来かも

ダム涸れて風呂贅沢になる予感

無事という字の有難さつとに知る

メルボルン 藤原 ポン吉

うなずいたものほどすぐに忘れちゃう

ストレスが泡と消えますシャンペンで

くじと妻どちらも文句いえません

鮮やかな色は危い蛇と妻

浅漬けを好んで漬ける古女房

日立市 加藤 権 悟

介助犬歩幅は神に近くなる

赤茶けた行李に大志まだ眠り

遠花火夫婦に遠い日のロマン

飽食の原点母のにぎりめし

八月の水をほしがる原爆忌

東京都 井上 つよし

錆付いた古釘今も家支え

美人でも絵になる女とならぬひと

社長席 羽根座布団に針むしろ

酒故の武勇談にはことかかず

うろうろと影もまごつく千鳥足

東京都 やまぐち 珠美

プティローズとうにかなわぬ夢の色

まばゆさへ挑んで風を呼ぶ少女

夏の日を諫める熱いレモネード

このひとと暮らしてみたい背の広さ

約束をたばね夕日へくべている

横浜市 中尾 哲 代

キッチンで運命を聴く梅雨最中

真夏日が続くブルーの花を活け

炎天下奥様達の立ち話

月を見て傘を加える旅仕度

冷凍庫満杯にしてどうしよう

横浜市 巖 田 かず枝

絵はがきでその気にさせる観光地

目的は観光よりも旨い酒

鶯の声の聞える不便な地

外人が増えて両国遠くなり

子等の夢ケーキ屋さんが人気者

横浜市 川島良子

記念日を女は決して忘れない
暑さにも歳にも負けていられない
背負い込む器が悲鳴上げている
ガンバレと言つてはならぬ時がある
恋してゐる貴女の顔に書いてある

佐渡市 高野不二

日本中市ばかり出来て過疎になり
新しい詐欺新聞に教えられ
破れてるのが流行と言うズボン
手の平で女房の意見丸めてる
歳聞いて失礼でない九十五

高岡市 青井はつえ

ポリシーの違う夫婦の同じ趣味
人間の金で神様祈られる
しきたりを壊してほしい嫁がくる
やけ酒が胸のしこりを固くする
弁解を重ねて築く嘘の城

岐阜市 平野あずま

淋しいが期待も混じる妻の留守
叩かれて西瓜元気に返事する
若い日の胸を飾ったモンブラン
同じ鐘昨日と違う音で鳴る
使い道 詐欺師の知恵が惜しまれる

静岡市 中西雅

灰皿に愚痴が山なす長電話
水たまり名月がゆれ蟻もゆれ
わだかまり溶けぬ心の棘だらけ
あの星のまばたく彼のあいずかな
一円貨 精一杯に生きている

犬山市 吉田幸子

あきらめが早いと叱る父に似て
ブーメラン家がやっぱりいいと言う
絶え間ない悩みジョークで目線変え
一言がじわりと浸みるレモン水
思い込みだけで走つた空模様

犬山市 関本かつ子

肌ざわりやはりと思う値の高さ
まだノルマあるのか窓の灯が点り
ここあそこあくびが移る昼のバス
ナースにもご指名がある注射針
ここからが難所ですよと道祖神

京都市 三宅満子

まな板の音よりチンで朝目覚め
鬱もみな丸洗いで梅雨晴れ間
食費より優先してる薬代
蛍来いこつちの水は値が高い
暑いけど風流だった遠い夏

京都市 清水英旺

いつの間に婦唱夫隨の不等式
水一杯飲んで血液サラにする
銀河鉄道の客になったや夢紀行
クールビズおしやれセンスを試される
サルスベリ夾竹桃は真夏色

大阪市 平嶋美智子

変わらない私根っから楽天家
ひそやかに白さを誇るカスミ草
突風とくるくる遊ぶ夏帽子
生家跡桐のひこばえ元氣くれ
古バジヤマ癒されたくて手を通す

大阪市 中井萌

スキあらば攻める敵あり女にも
嫁の役果たし安堵のお茶を飲む
濃厚な顔でやんわりいけず言う
学生の指にペンだこ見当らず
好物を持って行くのも孫見たさ

大阪市 升成好

涙腺も酒もめつきり弱くなり
富士山に弱点がないカメラアイ
弱点を庇って笑顔たやさない
家出ほど荷物かかえて妻の旅
紫陽花が身を乗りだして通せんぼ

大阪市 伏見雅明

弱兵を補う妻の社交術
ダイヤ入り時計も同じ時刻む
お茶入れて妻を相手の休肝日
ひかりもの好きな女の男運
口げんか派手に始めて仲が良い

大阪市 尾崎黄紅

帰還して六十年も功のなし
投稿のあとああったこうだった
ふたりいる自分が賢と愚の中に
仏壇に言えない秘密言うておく
逃げ道も塞がれている老いの道

大阪市 吉田富美

絞られたレモンの悲鳴聞き洩らす
刻印の歴史を語る城の石
虹消えて方向音痴あわてだし
ペランダの茄子一つ取り思案する
鏡と瞳合って昨日の傷忘れ

池田市 多田契子

三次会残る顔ぶれ類を呼び
取り扱い注意の体はにかなで
丁重に扱われたので花を買う
割り箸に幸福論を聞いている
一寸好き軽く叩いてうるたえる

池田市 北出 北朗

コスモスの中で少女になった妻

流された恋も遥かに天の川

光陰を追いつ追われつ走馬灯

多情仏心 別れに少し蜜をかけ

手火花がボタリと消えたラブチャンス

泉佐野市 稲葉 洋

六十年 赤紙がこぬ世に弛緩

七十路の鼓動時代にずれが出る

悠悠ではないが自適の月見酒

阿と伝でことの起りと結末と

夏バテを挽回しろと秋の風

河内長野市 木太久 正一

ピーマンの料理二品レシピ見て

時間待ち五木寛之図書室で

幸せに老いる話に耳が向き

不眠にはよく効くラジオ深夜便

家用に博多名物明太子

岸和田市 中岡 香代

封筒に祖母の癖字が踊りおり

姑誇る息子は嫁の言うがまま

ごめんねと素直に言えず空回り

一人っ子ママに兄弟申し込み

座布団は他人の温み裏返す

岸和田市 坂口 英雄

ケイタイに使われている地球人

降ろされて柔和になった金のシヤチ

上着脱ぎ袖まくっているクールビズ

孫つれて踊る阿呆になりに行く

赤ちようちん寄り道したくなる匂い

堺市 羽田野 洋介

指切りをしたことすらも忘れ果て

反省と期待を胸に午後のお茶

お茶だけなら天下泰平それもよし

少しでも隠しきれない昼の酒

コンビニの縁で気心通い合う

堺市 萩野 象山

独り占め済まん気がして降りるバス

贅沢に慣れて難し八分目

程合いを忘れられたか天の神

農薬を撒いて殺生しています

速いはずまあるく掃除する夫

堺市 大久保 伸子

真っ青な空にはじけて曼珠沙華

忘れてはならぬことまで忘れ出し

挨拶にきれいな嘘をお互いに

驚きは朝の鏡の中の顔

緑なす山わたりゆく風の音

堺市 奥 時雄

寝屋川市 北田 ただよし

土砂降りのあきらめさせるところがいい
下心透けて見えてる褒め言葉
憧れも夢も理屈で割り切る子
手料理が上手になつて父帰る
隅っこで聞くからは非がよくわかる

吹田市 二宮 栄子

団子虫足並みそろえひとり旅
団子虫哲学してる背を丸め
団子虫聞いてるはずだ原爆忌
団子虫九条そらで言えるだろ
団子虫気を許すなよ防衛論

寝屋川市 岡本 勲

重い腰ようやく上げて旅に出る
古里の川に蛍の歌がある
叩くより子供に効いた褒め言葉
青春の思い出拾う里の山
傾いた心の中にある葛藤

高槻市 安田 忠子

この小指あなたの愛の菌形です
七夕に願いをこめる拉致家族
麻雀に勝つて腰痛おまけ付き
買物にしぶしぶついて払わされ
毎日が妻の指図で動くロボ

羽曳野市 森下 一知

遊ぶのに忙しすぎて夏の風邪
梅雨の庭むらさき色に癒される
雨の日は雨に合わせて服選ぶ
慣れて来た閑僚たちのクールビズ
参寧坂 七味を買つて旅終る

高槻市 佐甲 昭二

片減りの靴が取り入る生き上手
我慢するたびに奥歯が欠けてゆく
あぶく銭掴むと狂う独楽の芯
ストレスが吃水線を這い上がる
シグナルの赤を突き抜く好奇心

羽曳野市 吉村 久仁雄

常連は店主の愚痴を聞かされる
左遷地の痛みを国訛り
盃に浮かぶ未練を飲み干せず
逆転がありそでテレビにつけておく
結論に迷つて橋を折り返す

押入れの隅に重なる家族悲話
夕立がお詫びの虹を置いていく
四季が来るほかに贅沢要りません
七転びしてから生が満ちてくる
人生の余白を赤い色で染め

羽曳野市 福田悦子

尾瀬沼へ夏の思いを置いて来る

彼岸花迎えてくれた秋の道

暑かった夏の日記の一行詩

困ったら助け求めて墓参り

シグナルが少し出ました認知症

東大阪市 米田水昇

屋上の四角を丸く歩いてる

水攻めの城あと百の蓮咲いて

星会いのががり火ゆれて恋灯す

さくらんぼ北の香を詰め自己主張

広いつば貴婦人めいて帽子着る

枚方市 二宮紫鳳

おみごとな笑顔でトラブル消火する

アレソレで話通じる夫婦仲

ストレスを流して友とグルメ旅

天の川青春の傷疼く旅

ご近所へ絆深めるおすそ分け

藤井寺市 吉田喜代子

年金で可もなく不可もない暮らし

ストレスも時には生きるバネとなる

お互いに気遣いながら長電話

初恋の人の死も知る古希の会

ふるさとへ母の温もりあるうちに

藤井寺市 俣野登志子

老眼鏡かけて素顔を見てしまい

関節痛娘と会う時は治りませ

ボクの秘密なんでも知っているおへそ

靴一足選って迷って買いません

領いだけで矛先向いてきた

藤井寺市 西村栄一

甘い夢追ってらうちに歳をと

鏡では自分の顔を知ってるが

見る人に合わせ表情変える富士

お見合の娘よりも父の緊張度

おしゃれにもうるさい朝のランドセル

藤井寺市 伊藤アヤ子

庭の木で孵化する蟬に目をこらす

とび立って仲間入りして蟬しぐれ

子供等に自慢一つを言って生き

梅雨明けをじっと待つてる敷布団

古希むかえ戦後も六十歳になり

八尾市 平川幸枝

目に力あつて素朴な国なまり

惜しみなくひとり一人の過ごしかた

梅雨さなか仕合わせ一つ見失う

老いるほど無理な若さに憧れる

冷奴顔じゅう幸の食べっぷり

八尾市 松葉君江

根性を叩き直した遠回り

節ぶしに今も生きてる父の杭

ひじ鉄をくって希望が腰くだけ

少子化が子がかすがいを死語にする

正直に話し心の棘を抜く

八尾市 脇 俊子

ひそひそと肩を寄せ合う小芋たち

通り雨生命の渴きひと滴

愚痴るのもすねるのもよそう遠花火

歯ざしりをして生きて来た米の飯

落しぶた煮つめすぎずに人生も

八尾市 田中トシエ

ハイボール本音建前うまく混ぜ

振り向かぬ背中で答見せている

古里へ帰れと蛩呼びに来る

肝心の蝶の出来ぬ親が増え

甲子園見ながら熱い茶をすすり

八尾市 西川義明

遠くても母の顔見に足が向く

少年A心の杭を抜くマリア

百七の命を惜しむ献花台

来世も夫婦で借りを返したい

地球上たった一人と縁結び

八尾市 田邊浩三

遠回りしたが見つけた百合の花

補聴器にひそひそ話くりかえす

ひそひそと鬼が女神に話しかけ

もう一度打たれてみよう老いの杭

終電になってしまった雨宿り

八尾市 寺川はじむ

子供らの素朴が描いた絵の温み

恋人に会う道程の遠いこと

平気だと言うた言葉が疼いてる

躓いた杭に老化と諭される

正直で褒めも貶しもせぬ鏡

大阪府 高木道子

年金の風は国会避けて吹く

テロ破壊地球が軋む音を出す

紫陽花にエールを送る雨蛙

納得の言葉を探す広辞苑

だまされる前に裏見て表見て

神戸市 田中章子

関わりを怖れけんかも見ないふり

一滴の水で生き抜くこともある

田舎道ぬかるみさえも愛おしい

鬱の日のハードル少し低くする

初めてのデートはやはり遊園地

神戸市 両川 無限

魂のかわきをいやす水中花
魂胆は見え見えだけど愛一途
使用前 使用後隙を突いてくる
おてんばを封印してるゆかた帯
ゆつくりと封印を解く墓参り

相生市 村木 信子

八月の空に懺悔の雲が湧く
逢える日へ流転の続くモノローグ
灰皿に男の自虐ねじ伏せる
砂時計 命ゆつくり裏返す
内緒ごと胸に重たく醜酔す

尼崎市 桑原 東園

腕を組むバントマイムの寡婦の夜
文珠さま聞いてくれます児の祈り
押し合いを楽しんでいるラッシュユアワー
腕利きの板前の味跳ねる箸
八起き目を目指して七つ転びます

尼崎市 古川 正子

銀行のカード使用に注意うけ
押す扉引いてる私苦笑する
戦後生れ娘育ちて今の幸
戦前と戦後を生きて来た大正
梅雨晴れ間はつ蟬の声きく昼下り

尼崎市 河津 正治

人の世の起伏に耐えて古稀の坂
前向きに生きて一歩を先んじる
耳元で何を囁くイヤリング
注意とも聞ける恩師のほめ言葉
任せてと母の財布は胸たたく

三田市 堀 正和

行列に並ぶと首が伸びてくる
奔放に生きてアジサイ七変化
風までが黄色くみえるピカソ展
絵手紙の西瓜は黒い種がある
幸せなおんなはいつもよく喋る

三田市 福田 好文

今一度燃やしてみたい恋心
年金が延命措置をさせたがり
肩書がとれて名刺が風邪をひく
鹿熊が荒らす故郷市に変わる
大文字見えて高値の京の宿

西宮市 片山 忠

分かりよい形で愛は教えとく
出迎える妻がまぶしい頃もあり
死なないでいるのも老いの一仕事
何もかも見せて夫婦はたそがれる
あと出しのジャンケンだろうが気にしない

奈良市 矢野 良一

安い割箸変な裂け方して困る
ライトアップ桃源郷の古都の夏
下駄鳴らし友と歩いた御堂筋
裕ちゃんに元氣もらった青春期

奈良市 田中賢治

寝める日を決めて夕餉の旨い酒
寝められて返事一つで風呂に入り
散る夢へあちらこちらと種播いて
次々と夢が背中を押してくれ

橿原市 藤永実千代

ダイエット考えられぬ飢餓の国
物忘れ思い掛けなく大受けし
信じたい努力は人を裏切らず
戦後派も早や還暦を迎えおり

和歌山市 たむら あきこ

まつしろな石になるまで川くだる
わたくしも青い炎を上げている
動かなくなつた時計にある愁い
二十四時銀河の父と語る窓

和歌山市 寒川 武

近所の子叱つて怒鳴り返される
嫁がせて天井ばかり眺めてる
未熟さを曝け出してるカンナ屑
当落のすれすれですと泣きつかれ

和歌山市 坂部 かずみ

宅配の紐がゆるんで弱音はく
矢印の通りに進む見舞客
イキイキと寿命が延びる畑仕事
一日の無駄な思案が多くなる

和歌山県 森下 順子

麦飯を食べてみたいと今の子は
雨二日植えたいものはみな植える
梅雨空へつばめの巣立ち宙がえり
はなやいだ気分貰いに外出日

和歌山県 木村 徑子

時は謎 私にベールかけに来る
ロマンスグレー過ぎた男が淋しがる
埋み火を煽られ昔話など
どしゃ降りを誉めちぎっているご挨拶

鳥取市 横田 春名

お人好しとつさの嘘がみつからぬ
息一つ感謝忘れて蝶よ花
タレントの好き嫌いにも口喧嘩
お人柄愚痴る時にもジョーク入れ

鳥取市 近藤 秋星

天然の暖房今が冬ならば
猛暑避けあの世に疎開でもするか
提灯は要らぬ私の初盆は
われ死なばわが魂よ何処へゆく

腕自慢 力自慢が譲らない

姑の息子自慢がまだ続く

難題に一休さんの知恵借りる

難産へ笑顔の嫁が輝いて

鳥取市 山岡 紀子

老い過ぎたなど愚痴る夫まだ八十路

失敗と知りつつ二兎を追いまくる

夢を追う余生も楽は無さそうだ

豪雨だね雨乞いすれど多すぎる

鳥取市 河田 のり代

リフォームで暮らしを変える夢の家

子育てにどっぷり浸り夢がない

同窓会ラストダンスを指名され

人情のあふれる手紙かみしめる

鳥取市 岡田 信恵

三日月にうつ憂さかけて星を見る

喜怒哀楽連れに生きてく老いの章

野仏の笑顔は癒す魔術師や

赤ちゃんは夢も希望もにぎってる

鳥取市 谷岡 清子

さあ泳げ波は静かに人誘う

浜立ちて聞けば波音夏の唄

政治劇台本どおりいかず荒れ

通勤の電車食堂化粧室

境港市 中井 虎尾

深い空盗めと初秋そそのかす

完璧な嫁と暮らして疲れ出る

ゆつくりと啄木の本読んでいる

人生に四季ありどれも平等だ

米子市 池尾 保子

お生まれは平成ですな昭和から

ふる里を片道切符持ったまま

水をやる知恵はあるけど枯らしてる

片道の知恵しなくて夕日落ち

鳥取県 松川 行男

孫もいて感謝袋は満ばいだ

沈着と冷静勝機失わず

翔んでゆく心は軽く身は重い

標的は小さい時からお姫様

鳥取県 毎田 信雄

香りある花がちります香をのこし

仲の良い夫婦で暮す願をかけ

趣味のない夫へ付いて行く勇氣

不器用でへそ練りなんて出来ぬ夫

鳥取県 橋谷 静江

七夕の願い届かぬ空になり

日照草あちこちで咲く雨上り

母の花咲いた自慢を持って行く

青田吹くみどりの風のさわやかさ

松江市 山根 邦代

雲南市 福岡 博利

唐津市 岩崎 實

つばめの巢青大将が下見する
シベリアを生きた生命がぐずり出し
世の中は困ったものよ みかんむく
にぎやかな列に並んだそばの味

出雲市 荒木 英子

余生まで夢追いながらマイペース
夏草に梅雨に見かける蛭いろ
物忘れ昨日のことが七十坂
寝そびれて亡母の面影包まれる

安来市 原 煩惱児

居酒屋で故郷肴に花が咲く
大名を偲ぶ城ですお菓子です
老いた母へ旅のみやげの品定め
からかつて愛の芽生えを確かめる

宇部市 高山 清子

愛しても添えぬ絆のカスミ草
隠す爪なくてのんびり老いていく
夾竹桃咲いて悲しい原爆忌
愚痴すり込むように夫の墓みがく

宮崎市 串間 安子

峯はるか座禅大師のおわします (大龍寺)
厄除けの願いの限り納め坂 (薬王寺)
厄除けの石段杖を頼りきる
甘茶かけ少女に戻る花まつり

振りむいた時をのがさず後を追い
過去はみなしまつて今日の顔でゆく
物事の順序を時に変えてみる
できる事一つ一つが有難く

今治市 塩路 よしみ

生かされて静かな風がありがたい
露草に思い出抱いている少女
ガラスの靴履く夢を見た疲労感
いつまでも女でいたい鏡拭く

今治市 渡邊 伊津志

昂りが去り遠雷を知る空虚
悟るにも少し山の気捨てられず
変屈な理性が僕の足を引き
日本の心細かい畳の目

大洲市 花岡 順子

ごまかしに乗ってはくれぬ血糖値
正直な鏡を見ない日が続く
在りし日の父と読経の中で会う
女だから合わせ鏡を持っている

高知県 百田 幸

目の彩で夫の心透けて見え
満足と言えるほどでもない夫婦
近すぎて息子の上辺しか見えず
心配もよるこびもあり生きています

秋田県 湊 修水

もしアレが日本だったらどないしよう

この夏はゆうれいネクタイ締めて出る

強い歯で鉄の橋桁齧り合う

モミガラ焼く煙のどかなり過疎の朝

草加市 飯土井 健翁

句誌読んで負けてなるかと血が滾る

二度とせぬ事故が再発する不思議

寄宿舎の粗食のおかげ九十五

底辺を舐めた男の太い眉

埼玉県 二宮 朋子

チビちゃんへぶきつちよママのよだれかけ

両親がじいじばあばの顔になる

命抱く重みよろけることもある

天晴な蹴りを習得した胎児

東京都 長谷川 康子

朝顔に元気をもらうランドセル

どうしても着たいドレスヘダイエツト

雀卓を囲む老人会の午後

大ジョッキいきいきしてる喉仏

昭島市 野口 忠

梅雨明けの陽はこれでもかこれでもか

芋の葉の水玉まるで小宇宙

生きてれば信号無視もたまにある

いつの間に妻の背を追う散歩道

国分寺市 野崎 勝

ちよつと媚び叔父の財布を開かせる

旧姓が郷愁を呼ぶクラス会

父までが猫の予報に傘を持つ

呑み屋では女性はみんなお姉さん

府中市 藤岡 ヒデコ

泣き寝入りした事があるカヤの外

スカートの裾を踏みたい人が居る

必要とされれば尻尾振る犬で

雨の日は通販カタログショッピング

横浜市 金森 徳三

階段を上がる用事を頼まれる

早や夏至かうかうかするとすぐ冬至

呆け防止始めた趣味に悩まされ

冗談とばかり思っていた迂闊

横浜市 布山 嘉信

罪にくみ人をにくまず他人事

まっさらな誠意こぼれるボランティア

地球より重い生命にテロ続く

くちなしの香りが救う梅雨の闇

横浜市 長島 亜希子

介護話 犬も長寿になつてます

うっかりもボケの始まりだと言われ

聞いただけなのに健保外を勧め

子午線を跨ぎ東西行き来する(グリニッジ)

浜松市 杉浦 えむ

給料日ちよつと枕を高くする
通いなれた道でわたしを見失う
終止符を打つと心の割れる音

お茶の間で一人はしゃいでいるテレビ

尾張旭市 三浦 きぬ

へソ出しルック行き着く先はどこですか

パソコンもメールも知らぬまま老いて

口惜しい青春の無い時代に生きて

あの世では思いつきり青春致します

犬山市 金子 美千代

クールビズ妻のセンスが試される

根こそぎの花盗人へ物申す

この辺でイエローカード出る話題

カンニングやったやつたとクラス会

京都市 榎本 宏子

祈つたらこころ洗つてくれますか

日記帳書くことのない今日も雨

どんな旅したか貝殻語らない

願わくば介護保険は払うだけ

大阪市 吉内 タカ子

信念の偉大さ知った偲ぶ会

肉親の縁薄きより脱皮する

兄の忌で平和を願う今日もテロ

下り坂うかうか出来ぬ一歩ずつ

大阪市 吉川 弘泰

ハローワークで暇持て余し職探し

ドリンクを飲んで頑張る長寿ゴルフ

目覚ましを止めて夜長を知らぬふり

今年こそ秋風暑い虎戦士

大阪市 中村 忠敬

釣師逝き三途の川で糸たれる

アウトドア趣味じゃないのよホームレス

日曜日ふとん干したら昼寝なし

厚化粧横でヤブ蚊が悶絶死

大阪市 平井 露芳

カビに負け何処へ行くのか文化財

秋までは我慢我慢のネクタイ屋

七十九まで我も生きたや肺半分

薬漬けの合間に食間メニューあり

大阪市 寺井 弘子

ポーナスが出るまで夫へ笑顔見せ

キャミソールへそ出しルックのクールビズ

ねぎらいの言葉忘れて冷えてゆき

ポリシーがなく右往左往する私

大阪市 池上 清治

逆探知 迷惑メール捕えたい

背番号覚えてないが虎のファン

便利さと不安が同居するカード

車には好きな番号つけて乗り

泉大津市 助川 和美

夫よりなくてはならぬ老眼鏡

市は赤字ポーナスなんておかしいね

消費税上げぬ約束恐い嘘

髪切つて褒めぬ亭主にふくれ顔

泉佐野市 備後 三代子

燃えつきそう今日のわたしをいとおしむ

立ち止まり余白探しの天の川

忘れたい事よみがえる蛍籠

行革にも申しなき喜寿傘寿

池田市 上嶋 幸雀

梅雨寒に忘れたはずの傷うすぐ

あじさいへ思わせぶりの戻り梅雨

紫陽花へいじわるしてる涙雨

我慢などしてもせんでも明ける梅雨

岸和田市 堤 植代

久しぶり長靴履いてうれしいな

梅雨あけをよろこんでいる蟬がなく

よくいうわ口説いた言葉わすれたの

着こなしもノーネクタイでむつかしい

岸和田市 森 元 ふみよ

色褪せた虹の向こうは虚脱感

ありがとう只の五文字が素晴しい

歳重ね此の世が好きで生かされて

デバ地下の味がいいので出かけ癖

岸和田市 林 力子

大地震ふと旅立ちの子を想う

報恩の鈴が流れる遍路笠

娘が嫁ぐ父の口元一文字

印一つ押して今日から別の顔

堺市 河盛 龍三

物言わぬ孫を預る天女様

梅雨あけを蟬に逆らう氣象台

物言わぬ孫が真似する親の癖

様々な虫が集まる芋畑

門真市 矢阪 英雄

停年で脳の歯車錆おとし

顔の染み生れ小島の地図になる

焼酎の酔いが訛の弾みつけ

一族は石碑一基でゆれている

柏原市 伴 洋子

お味噌汁いちばんホツとする料理

西明かり明日いいことありそうだ

師の声をたしかに聞いた風の中

時間の無駄省いて趣味のあれやこれ

河内長野市 内海 綾乃

財産なし仲よくしてね書いてます

何処へ行く議員年金宙に浮く

ホリエモンをばやいた人もノーネクタイ

元気で声かけられて名も聞けず

高槻市 大崎 侑子

隠してもトーンが上がる御栄転

番号を忘れて金庫開かぬまま

保釈金二十億円もなげ

逆効果狙った手とは気付くまい

豊中市 源 田 啓 生

鱈さん夏はやっぱり貴方です

ゴッホ見て何やらラムネ欲しくなる

七夕の惨事は星の知らぬこと

料理ショー地球の裏のひもじさよ

富田林市 古 田 千 華

朝顔が咲いたその朝よい知らせ

絵手紙の青いグラスが夏最中

竹音のリズムよろしく糸染める

稲苺られソフトの案山子夕陽染む

寝屋川市 森 田 れい子

母さんのおむすびそつと握る愛

忘れたという方便も見破られ

筑前煮母とひと味変えてみる

羽曳野市 仲 谷 真 一

亡夫の歳追い越してまた梅実る

から梅雨に農作物を心配す

甘い柿官僚だけが食べている

戦争の靴音高し爆破テロ
靴音であなたの帰宅すぐわかる

羽曳野市 永 田 章 司

カーナビに案内されて知らぬ土地

頑迷と信念どこで線を引く

母の墓愚痴の聞き手にされている

多汗症人より努力認められ

羽曳野市 松 本 静 子

マンモスの牙にひかれて地球博

蛭舞う清流なりや古里は

茄子一ツ煮ても焼いてもおいしいな

雨蛙田圃のほとり道ゆずる

枚方市 小 川 良 吉

老いたりてあの世が臆見え隠れ

あの世より今朝の味噌汁青い空

あの世では欲深はくは住めるかな

あの世まで持つてゆくほど財はない

藤井寺市 増 井 ヨシ枝

早朝の客に仮面が間に合わず

何もない言うて緑の庭を見せ

蓮の花咲いて亡母に逢いに行く

箕面市 寺 井 柳 童

柳壇で抜いてもらった句は宝

毎日が父の日妻に感謝する

留守電に構えてしまいい子に敬語

降りそうで降らず雷鳴稲光り
天の川泳いで渡る宇宙服

八尾市 赤木 妙子

大阪府 神野 千恵子

安心も買つて電車を待つホーム
川沿いを燕と競うローカル線
つぶやきを猫がくわえて捨てていく
髪を梳く妻にうっとりおぼる月

八尾市 笹倉 ひろし

靖国の隅で批判に悩む砂利
ぜいたくに慣れて不満が沸いてくる
指先に魔物が宿るマジシャン

確執の裏に女のバトルあり

八尾市 中島 春江

ひとり膳おいしかったと食べ残す
割り勘に下戸の僕にも容赦なく
天神祭うなぎのほりの鰻料理
ストレスにあちこちいじめられている

大阪府 畑中 節子

若者の早口脳が読み取れず
あこがれの自由手にして蝶になり
旅三昧 終着駅はあわわが家
大豆種蒔けば小鳥のグルメ食

大阪府 小栢 こずえ

飴一つ淋しい口を守りさせる
気持ちだけ一歩も二歩も先を行く
梅雨晴間レシビ片手に菜園へ
好かれては困る蚊だけが追うてくる

チャンネルが喜怒哀楽を切り変える

親友は袋小路で会った友

けじめない大人が躡るもろさ

忘れたい事はしっかり憶えてる

大阪府 西川 冷子

長旅の終れば我が家いと嬉し

口癖は落ちてても良いよ飛機の旅

若者の露出し過ぎに馴らされる

庭木の芽切つては伸ばし我が流儀

神戸市 山田 婦美子

信じきる無類の愛が美しい

常識の定規の位置がずれてくる

平凡な日の幸せに気付かない

再会を夢見た人も薄い髪

神戸市 木村 忠義

久々にシャワーを浴びたような外

散歩にも名札代わりに免許証

梅雨時はリズムの狂う洗濯機

梅雨晴れ間妻に気がねのウォーキング

尼崎市 小池 幸子

今日も無事明日も何とかなるだろう

距離おいて親子関係波たてず

中程の暮して今日も日が暮れる

譲れずに自我を通して孤独風

伊丹市 延寿庵 野鶴

宝塚市 丸山孔一

親密な話へ涙ポロリポロ

細い路地つなぐ会話が温かい

二百勝不屈で繋ぐ野茂の技

どん底で浮かんだヒントピンチ抜け

種蒔いて見事レタスの初出来に 篠山市 永井 かほる

お通夜の涙雨にも感無量

こちこちで夢の思い出夏祭り

夏野菜毎日採れて無農薬

ダイエツトエンゲル係数ちよつとしめ 三田市 辻 開子

ぐちる癖夫に感謝今日もぐち

道草も多かつたやつと珊瑚婚

うたせ湯で凝りも悩みも打ち流す

蛙にもコーラスのソロあるらしい 三田市 石原 歳子

近頃は時に電気も消し忘れ

万歩計疲れて今日は家の中

本を読む時に役立つ箸袋

大あくびああ一日が過ぎました

本物に本物ですと書きそえる 三田市 阪本 藤朗

ワクチンを嫁としゅうとに接種する

百均の傘も大事にしています

職人の作った箸で食う茶漬

お早うさん笑顔はじけるランドセル

還暦を過ぎてても怪し恋は恋

糸とんぼ風に逆らう術もなく

梅雨の川不きげんそうに流れゆく 西宮市 石野 照代

四季をもつ国に生れて花絶えず

夏本番肌出す娘増えました

さりげなくきき流すことのむずかしさ

なめくじは塩が弱いと言っている 西脇市 七反田 順子

メルヘンの世界で生きるシャボン玉

四十年似た者同士暮らしてる

日焼顔ゴルフしてるかつい聞かれ

花活けの表現これは綺麗だよ 兵庫県 黒崎 美紗子

つつがなく分相応にたてこもる

どの薬何に効くやら量が増え

病院へ行かねばの気が落ち着かせ

ヨッコラシヨ言うてゆつくり立上る 兵庫県 安達 厚

お葉はのんだかいなと妻に聞く

枕辺にうれし女将の野辺の花

頑張らず諦めもせず生きている

愛染帖

新家 完司 選

わが子だがその半分は時代の血
（評）らぬき言葉を平気で使うのも時代の血。
DNAの支配力にも限度があるようだ。

星まつり呆けないようにだけ願う
（評）笹の葉に吊す願い事。昔は夢があった
が、今はただ、呆けないように願うだけ。

缶ビールぶしゅん映画の幕が開く
（評）誰にも邪魔をされない自分だけの時間。
映画好きにとっては、まさに至福の瞬間。

女子校の前を通ると若かえる
（評）何をどうする、というものではないが、
若い人の嬌声を聞くだけでもこころが弾む。

クールビズみんなしまらぬ顔になり
（評）確かに、大臣とも思えぬ顔を見ている
と、ネクタイが果たしている役割が分かる。

四面楚歌 相手はみんな男まさえ
影ほどの重さで猫が死んでいる
梅雨あがる桃のうぶ毛を光らせて

私は時々ふぐになつている
隙間風きつと窒息しないため

はんやりと過ごすモノラル盤のジャズ
カメラから抜いた半端な乾電池

命日は忘れませんと百日紅
のうぜんかずら兄の御霊が揺れている

手で剥けば桃はうふふと身を振る
百済仏のような少女の夏姿

すみません人の分まで生きてます
わが寿命 申古制は如何です

松原市 玉置 重人

和歌山市 木本 朱夏

羽曳野市 徳山みつこ

和歌山県 辻内 次根

和歌山市 安土 理恵

和歌山市 古久保和子

大阪市 前 たもつ

西宮市 牧測富喜子

和歌山県 三宅 保州

和歌山県 黒石市 相馬 一花

和歌山県 相馬 一花

和歌山県 相馬 一花

和歌山県 相馬 一花

和歌山県 相馬 一花

藤井寺市 鴨谷瑠美子

豊中市 安藤寿美子

高知市 小川てるみ

和歌山市 桜井 千秀

堺市 近藤 豊子

八尾市 宮崎シマ子

島取市 岸本 宏章

唐津市 坂本 蜂朗

大和高田市 鍛原 千里

池田市 上嶋 幸雀

唐津市 井上 勝視

和歌山県 福本 英子

和歌山県 福本 英子

和歌山県 福本 英子

和歌山県 福本 英子

倉吉市 野口 節子
こっそりとビタミンEを飲んで

弘前市 福士 慕情

街へ出て胸いっぱい排気ガス

西宮市 片山 忠

悪口にびくともしない金がある

大阪市 伏見 雅明

自らの欠点ひとに伏せておく

富田林市 大橋 鐘造

シナリオの通りに来ない春のバス

大阪市 吉内タカ子

回り道ツバメの雛に声掛けて

藤井寺市 太田扶美代

母逝つた日から時々偏頭痛

羽曳野市 松本 静子

孫のため植えたトマトは赤くなる

堺市 奥 時雄

アリ塚はピラミッドより古くから

河内長野市 坂上 淳司

髻剃れば生やした意図のわかる顔

鳥取市 武田 帆雀

朝風呂に入つてシャンと酒を抜く

寝屋川市 籠島 恵子

近道をしてきた朝のウォーキング

大阪府 畑中 節子

寝ていても夢の中でも草むしり

四條畷市 吉岡 修

横文字の多いルールで守れない

枚方市 丹後屋 肇
好奇心電車の窓にへばりつく

寝屋川市 富山ルイ子

幼児期がまだ焼きついている貴方

富田林市 池 森子

走つても跳んでも笑顔には遠く

大阪市 小谷 集一

ブランドによく似た靴がお気に入り

兵庫県 中上千代子

四分六に分けて夫婦の酒のあて

大阪市 神夏磯典子

やわらかい風に毛虫が昼寝する

武蔵野市 亀井 円女

私阪神亡夫はカーブでよう揉めた

大阪市 本間満津子

捻子巻いたぶんだけ動く古時計

枚方市 海老池 洋

うたた寝へ喋り続けているラジオ

寝屋川市 森 茜

切り札が裸さっぱりしたものだ

羽曳野市 酒井 一壺

人間を信じていない改札機

鳥取県 岩崎 和子

暑さ越すきよねんと同じ服を着て

堺市 加島 由一

顔は悪いが男気でゆく日本海

東かがわ市 川崎ひかり

脇見などしてはならない競走馬

鳥取市 土橋はるお
先輩の話にや法螺も大分ある

尼崎市 春城 年代

魔女にもなれず中途半端なおばあさん

羽曳野市 吉村久仁雄

できちゃった婚で祝辞は子育て論

豊中市 水野 黒兎

胸奥に鳴る拍子木は紙芝居

寝屋川市 平松かすみ

ときどきは祖母が恋しい麦とろろ

鳥取市 夏目 一粋

火星儀を見て驚いた世の移り

吹田市 太田 昭

老夫婦それぞれに合う杖を持ち

和歌山県 森下 順子

火傷せぬ距離を時々踏み外す

堺市 羽田野洋介

凶星だな目線の乱れ隠せない

今治市 塩路よしみ

善人の心の揺れが顔に出る

海南市 谷口 義男

嬌声の輪から抜け出てマイペース

米子市 白根 ふみ

真つすぐに書いたはずだが曲つてる

奈良市 矢野 良一

酒場という駅に今夜も途中下車

三田市 堀 正和

ライバルとバッタリ出合うサウナ風呂

よく光る鍵は私の一部分
米子市 林 瑞枝

肩書のとれた名刺は気が弱い
吹田市 穴吹 尚士

悠然と咲く泰山木に恥じる
鳥取市 吉田孔美子

幸せといえば幸せみな旨い
西宮市 坪井 孝一

滝水の落ちるばかりを見て飽かず
池田市 北出 北朗

敬老日逃げも隠れも出来ぬ歳
泉佐野市 稲葉 洋

人生ゲーム孫がオマケをしてくれる
八王子市 播本 充子

五線譜を外れた歌で盛り上げる
東かがわ市 木村あきら

根性はもうなくなった父が病む
鳥取市 土橋 睦子

風倒木に腰掛け父の物想い
美作市 小林 妻子

畳替え先ずお姑の知恵で拭く
唐津市 仁部 四郎

欠けた歯の裏でハーモニカを吹こう
松江市 川本 畔

太陽の詰まったみかん皆が好き
大阪市 松尾柳右子

黒枠の夫にエールもらってる
八尾市 生嶋ますみ

生と死を見つめて耐えるナースの目
奈良市 乾 春雄

潤滑油がわり時折り缶ビール
高槻市 乙倉 武史

父元氣 直球すしり投げて来る
唐津市 市丸 晴翠

香煙ゆらくやがて私も向こう側
八尾市 高杉 千歩

孫たちにもつたないがつつたわらぬ
米子市 青戸 田鶴

洗濯物白く乾いていく平和
姫路市 古川 奮水

変哲がおってやり甲斐ある幹事
唐津市 宗 水笑

蚊よ蠅よ俺はただ今無我の境
松江市 三島 淞丘

市場籠に子がぶらさがりぶらさがり
弘前市 櫻庭 順風

子の進学父のクラブはカビだらけ
大阪市 川原 章久

がんばろう子が居てくれる愛がある
箕面市 出口セツ子

エンピツを尖らし辞書とにらめっこ
和歌山市 山口三千子

待つことが美德だったのは昔
西宮市 西口いわゑ

足目耳 夢を締めよ言うている
大阪市 渡部さと美

ミニトマトほどのしあわせだったいい
弘前市 斉藤 蒨

脚力が鈍り横風向かい風
和歌山市 喜田 准一

飾らない言葉で清貧に生きる
大和郡山田市 坊農 柳弘

越えられぬ山など無いと蝸牛
高槻市 富田 美義

次の世につなく緑が案じられ
鳥取県 石谷美恵子

カタカナ語時々思い違ひする
尼崎市 春城武庫坊

拝受した色紙の時計動いてる
横浜市 金森 徳三

遠い日のきみが時計を止めにくる
浜松市 杉浦 えむ

おなじ時一緒に生きる好きな人
香芝市 大内 朝子

頑張らない生き方知った夫という
奈良県 渡辺 富子

ふる里で歩く背中には隙だらけ
三田市 北野 哲男

ラブシーンになり観たこと思い出す
京都市 高島 啓子

さみしくて町の明かりに蛾が群れる
和歌山市 たむらあきこ

金でない或る日の恩が返せない
弘前市 高橋 岳水

大八文庫による川柳展

講演会に参加して

平成十七年七月十八日

七月十八日は東野大八さんがなくなられ、四年めの命日である。この日、川柳群像「大八文庫」による川柳展と、「川柳と東野大八」の講演会が、岐阜県立博物館で行われた。

大阪から天笑王幹はじめ十名出席した。

大八先生と私との出会いはたしか平成九年六月二十八日の麻生路郎三十三回忌川柳大会であった。コーヒーを飲みながら、初対面の私に親しく話していただいたことが印象に残っている。

四年前、葬儀に岳人理事長夫妻と車で向かったが、交通渋滞に遭い、葬儀に間に合わなかった私たちを、奥さんや娘さんたちがあたたかく迎えて下さった。

そして、先生の書斎を案内していただき、あの『川柳の群像』を無償で二十年近く書き



出版記念パーティー
田中正坊参与挨拶

続けられた、インクや墨の染みの残っている大きな、とても質素な机を目の前にして、先生の人柄の一端を知り感動をしたことを今も昨日のこのように覚えている。

名鉄新鷺沢駅へ迎えに来て下さった古藤邦夫さんの車で、森林に囲まれた百年公園内に建つ立派な博物館に着く。二階の大八文庫の資料が展示されているギャラリーに入ると、百数十点にもよる川柳関係の資料に圧倒されてしまう。

大八先生の形見の作務衣を着た本日の講師黒野こうきさんの案内はとてもさわやかであった。こうきさんは画家・詩人で、晩年の大八先生のおき理解者であったという。1952年生れの彼は、生前のエピソードを交し、八七年の生涯を愛情をこめて語ってくれる。

「東野大八は、どの結社にも属さず川柳を愛し研究し、日本川柳協会設立当初からのまとめ役の一人としての顧問も務めた。壇一雄、豊田穰ら数多くの文人らと交友があり、ジャーナリスト、野武士的な人間として生き、波乱万丈の人生を通過して『川柳は人間詩』が彼の川柳哲学となった」と。



講演会参加者一同

お金や名誉に無頓着で、常に庶民のがわに生きた「川柳人」東野大八さんをますます好きになる。

川柳展、講演会を開催していただいた、古藤邦夫さん愛子さん夫妻、英子・みどりさん姉妹、黒野こうきさんありがとう。

みぞれ降るその立ちん坊の縄の帯 大八妻だけが裸の夏にさせてくれ

本当に泣くときもあるおちろぎよ 遺句集「あしんど」を読み、よき妻、よき家族に包まれた大八先生がとても羨ましく思われたことであった。

いちばんの形見となった父親似 愛子 午後六時からシテイホテル美濃加茂で句集発刊パーティーが行われたが、田中正坊さん夫妻が出席、我々は心を残し会場をあとにした。

(前 たもつ)

■新刊紹介

『ああしんど』

東野大八句集

田中 正坊

昨年、田辺聖子監修・編「川柳の群像」明治・大正・昭和の川柳作家一〇〇人が集英社から出版された。今は亡き著者の東野大八（本名・古藤義男）には、『風流人間横丁』『没法子北京』『人間彩影記』などの著作があるが、句集はない。そのため本誌で先に追悼特集を編んだ時、『短歌・俳句・川柳の一〇一年』（新潮社刊）などから拾い出して、やっと「東野大八50句」をまとめた。

それが今回、古藤邦夫・愛子夫妻によって『ああしんど』というかわった題名の句集が大八文庫から発行された。あとがきによれば「子供達へはるかなる旅路」と題する自己史が残されており、一気に書き上げたものらしく、末尾に（ああしんど）と書かれていたのを、そのまま句集の題としたと言う。

収録された句は、戦争中に刊行された柳誌

『東亜川柳』『月刊満州』と戦後の『川柳しなの』『むつみ』『川柳祭』『川柳雑誌』『柳宴』『鶴かこ』などの掲載句から選んだ二三四句が、①フルーツボンチ②僕の昆虫記③大陸④隻手雑記の四章に分けられている。

①は、一句一句に人生のドラマを感じさせる人間味あふれた句、②は、兵士たちのアイドルであった蟻・トンボなどの小さな生命への優しい気持を表現した感性の句、③は、往時の回想から、大陸でジャーナリストとして活動した時代を中心に、戦争体験者から見た人間の哀歎を描いた句、そして④は、砲弾で左腕を失ったやるせなさ、妻子への複雑な心理を詠んでいる。

晩年の友人である詩人の黒野こうき氏が、巻末に「大八小伝」をまとめており、東洋樹賞受賞の感想として、「作句しない私などが」ともらしたことを紹介している。柳歴に比して発表句は少なく、生前、句碑とともに、句集を出すことも断ってきたと言うが、川柳界の長老であり、屈指の理論家でもある著者の句姿は、雄大かつ気品があるという定評があり、川柳人として生きた証である句集の発刊を心から喜びたい。四章の中から、私なりに数句ずつ抜粋して句集紹介を終りたい。

フルーツボンチ

幸せは母のいびきの横で知り
お酒でもあればと妻も嬉しい日
父ちゃんになった夜星はみな光り
狸からタヌキになればと教えられ
死にかけた話他人は笑うなり
美学とは極まるころ首一つ
むらさきの山少年は老い易し

僕の昆虫記

飛んでいることがうれし赤とんぼ
かたつむり格別急ぐ用もなし
蟻と蟻たしかめあつてすれちがい
鈴虫の生命青さへすき透り

大陸

狼と吹雪に馴れて酒も好き
としよりの流しと飲んでる吹雪
式辞さく三三九度が死出の旅
万歳と笑って死ぬるまでしごき
五機みんな還らず基地のあかね雲
日の丸でおくり帰りは空の箱
引揚げの眼に花だけが美しい

隻手雑記

うれしい日丹下左膳を真似て寝る
片腕の父とも知らず子が笑い
空っぱの袖よその子がまたのぞき

誹風柳多留 一篇研究 1

小栗清吾・伊吹和男
山田昭夫・増田忠彦

山口由昭

清 博 美

二 挨拶

八月号をもちまして、「誹風柳多留」二四編「輪講」が完了しました。長期間にわたるご愛読感謝いたします。編集部にご相談申し上げましたところ、引き続き頁をご提供下さることですので、「誹風柳多留」一篇「輪講」を掲載させていただくことに致しました。相変わらずのご愛読よろしくお願い申し上げます。次第です。

この誹風柳多留のうち、初編から一〇篇までは活字化されており、比較的人手しやすいのですが、一一篇以降は単行書の出版がなく、したがって、今回の一一篇全句解釈の試みは、その点でも非常に貴重な掲載になるものと考えております。

1 年に式度土をふませる呉服店 大柳

小栗 呉服屋では、年に二度（正月と盆の十六日）の藪入りにだけ、奉公人に外出を許すという意。あとは畳の上で、ひたすらご奉公の日々である。

老年に二日は日の目見せる也 玉24
日にやけぬはつ齋日に出るばかり

清白なはず年に式度日に当 傍・40
清 賛。これが当時の労働基準法。

2 喰つみか熨斗に替ると美しひ 如舟

小栗 食積は蓬菜飾りの異称。新年の祝に、三方の上に米を盛り、その上に熨斗、勝栗、昆布、海老、馬尾藻などの類を飾ったもので、時にこれに松を立てたのである。（辞彙）

正月の嫁の札の句だと思ふ。嫁の年頭の回札は時期が遅くなるというのが約束。そのことを、食積がすっかり食い尽くされて熨斗ばかり残っている状態になったところに、美しい者すなわち嫁がやってくるかと表現した句。

くいつみのたいはに及ぶよめのれい 一三三8

荒にぞあれし喰つみへ嫁ハじぎ 一八2
喰積の品切れを出ヌ嫁の札 一三四10
くいつミの名代を出ヌよめの札 安二札1

山田 美しい（嫁）の嫁が省略されたものだが、それは本句が嫁の札と解せば自ずと分かるというのがミソ。

清 賛。

3 俄雨乞食の相をはたすなり 四竜

小栗 「相を果たす」がよくわからないが、「果たす」は、成し遂げる、結果を得るという意だから、俄雨に遭って孤を被って行くのを、乞食の姿になったと表現したものである。

にわか雨おれだハはあとこもをぬき

安三桜2

にわか雨近所でこもをすてるなり

安九梅2

山口 「乞食」は仏教の行の一つであり、

『宝雨経』には「乞食は十法を成就す」とあるから、この句は、そんな事を連想しているのではないか。則ち、俄雨に遇つて乞食の相を成しとげたというのではないか。もちろん洒落で言っているのであるが。

清 贊。

4 四五人て夜道を帰る姫はなし 箔 印

小栗 四五人連れ立つて夜道を帰りながら、嫁の話をしているというのであるが、状況がよく分からない。思い付くのは二つ。

①「嫁話」となれば、まず連想されるのは姑。姑四五人がお互いにわが家の嫁の悪口を言いながら帰る図。夜談義のような場合か。

②婚礼に招かれた人が、その日の花嫁の噂をしながら帰る様子。婚礼は原則として夜であるから、「夜道」で婚礼を示唆する作句。

どちらもありうる情景で迷う。②は「夜道」が利くのに対し、①では夜である必然性に乏しい。しかし②なら「花嫁」という語の方が

ふさわしいし、「嫁話」はやはり①の姑の悪口の方が素直な気もする。諸兄のご教授を待ちたい。

伊吹 ①に賛。

姫の事しうと身ぶりをしてはなし 八3

山田 「嫁はなし」という語を含む句は大変珍しいようで、管見に入つたのは、

道すから・八瀬のこぢよろが嫁はなし

住吉躍36

一句のみである。この句からすれば礎②となるが、いずれにしても主題句の措辞だけでは決め手に欠ける。

増田 ①の類で、六阿弥陀の帰り道といった解もあろうか。

山口 テーマは「姫はなし」ではなく、四五人て夜道を帰る所ではないかと思う。従つて①説に賛。増田説も考えられるが、老婆ばかりの念仏講の帰りではどうだろうか。

清 決め手に欠けるが、小生は婚礼の帰り道としたい。

5 唐土に無い夢を見て神酒を上 石 斧

小栗 「唐土に無い夢」は、富士山の初夢のことだと思ふ。正月早々吉夢を見たので、「有り難や有り難や」と神棚にお神酒を上げ

るのである。

夢にだもろこし不二を見ぬところ

天五智2

不二の夢御神酒も三国山を上ケ 五八3

清 贊。諺に「富士鷹三子」とあり、目出度い夢の順番だとされる。何れも駿河国に縁のあるものばかり。

6 引はつればつれて堀の女房也 木 綿

小栗 ここで「堀の女房」は山谷堀の舟宿の女房のことであらう。

堀の死跡へかたづくうんのなさ 二〇26

堀の妻たしかに一度買た顔 八九23

の句から考えて、吉原の遊女が舟宿の女房に納まるのは、ままあることではあるが、遊女上がりの行く末として必ずしも上等な結末ではないというこのようであるので、「引きはづれはづれて」は柳雨「吉原志」頭註にある如く、「身受の相談何度も外づれた拳句」に、やむを得ずそうなつたということなのだらう。

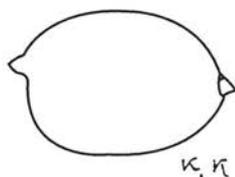
清 贊。「引ッばづればづれて」と訓むのだと思ふ。浄瑠璃にでもありそうな文句。

遊女としての年季終つて、落ち着いた先が山谷堀の舟宿の女房。吉原と縁が切れない。

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)



「賑やか」 仁部 四郎 選

賑やかに客が集まる閉店日
 賑やかに点を取り合う草野球
 デバ地下のつい買わされる賑やかさ
 炎天下獲物に蟻の賑やかさ
 乾杯乾杯汁が煮えてくる
 母が居て賑やかだった祭り寿司
 終章は花火を上げて知らせます
 賑やかな人を帰して肩をもむ
 賑やかが好きで道化の役もする
 哀愁を賑やかに撒くチンドン屋
 居酒屋で賑やかなのは影法師
 賑やかに踊る十指で聞く法話
 賑やかな街の哀史を知る地藏
 賑やかにハナハト集う宿浴衣
 賑やかに唯賑やかに夏祭り
 賑わった祭りに寄付の追加来る

生駒市 飛永ふりこ
 和歌山市 寒川 武
 大阪市 池上 清治
 大阪市 松尾柳右子
 八王子市 播本 充子
 和歌山市 桜井 千秀
 大阪市 前 たもつ
 唐津市 坂本 蜂朗
 出雲市 城 多喜
 鳥取市 鈴木 一弘
 寝屋川市 北田たよし
 和泉市 横山 捷也
 羽曳野市 吉村久仁雄
 出雲市 加藤スズコ
 大和郡山市 坊農 柳弘
 横浜市 金森 徳三

「賑やか」 藤田 泰子 選

賑やかな街で生れて人嫌い
 凡人で賑やかが好き縄のれん
 賑やかに一人芝居の幕あける
 賑やかに独りの皿へ今日を盛る
 傘寿です女盛りを舞い踊る
 死ぬ話女姉妹賑やかに
 炒り豆が弾けるようなバスタワー
 喋るだけ喋って帰る妻の客
 どやどやと来て寂しさを置いて去に
 賑やかに山が唄って嫁が来る
 賑やかを横目に今日もマイペース
 幸せは賑やか過ぎるカレンダー
 賑やかな記憶子がいて母が居た
 走る子の後追いかけるバスタオル
 榎山も賑やかですと道祖神
 宴会になってしまった七回忌

大和高田市 鍛原 千里
 河内長野市 井上 喜酔
 出雲市 城 多喜
 八尾市 生嶋ますみ
 鳥取市 塔 寛子
 大阪市 中村 叡子
 和歌山市 上地登美代
 堺市 村上 玄也
 島根県 伊藤 寿美
 米子市 澤田 千春
 堺市 羽田野洋介
 枚方市 海老池 洋
 吹田市 大谷 篤子
 三田市 久保田千代
 東大阪市 笠井 欣子
 吹田市 穴吹 尚士

久びさに噂賑わう過疎の嫁
町内の婦人部会を家でする
メガホンも歪になって外野席
賑やかに蛭を洗う朝の贅
賑やかなセールスマンに一步置く
リストラの賑やかにする送別会
でちやつた婚ほど拍手多くなる
中流が賑やかにする披露宴
賑やかにしてくださいな天寿です
宴会になってしまった七回忌
お葬式は賑やかでしたお母さん
町内の子等も繰りだすどぶさらい
三世代みんな主役の晩ごはん
同年は九人兄弟ザラでした
盛り上げたビエロを褒めてやる鏡
東の間を燥いでくれるプチトマト
鳥たちの自己主張から朝が跳ぶ
生き字引き居て賑やかな墓参り
栄町すずらん灯に見る名残り

軸 吟

真庭市 福嶋智恵子
茨木市 藤井 正雄
静岡県 蘭田 猿香
出雲市 園山多賀子
和歌山市 坂部かずみ
奈良市 米田 恭昌
弘前市 高瀬 霜石
川西市 西内 朋月
大洲市 中居 善信
吹田市 穴吹 尚士
東大阪市 谷口 義
寝屋川市 森 茜
府中市 藤岡ヒデコ
鳥取県 谷口 次男
大山市 金子美千代
富田林市 池 森子
青森県 小寺 花峯
大阪府 畑中 節子
尼崎市 山田 耕治
横浜市 小野句多留
堺市 加島 由一
米子市 林 瑞枝

負け戦太鼓叩いて笛吹いて
終章は花火を上げて知らせます
喧騒へ背中を向けたことがある
繁華街の裏筋にある職安所
女子高生夏の光を跳ね返す
午前二時親に見せたい戎橋
賑やかに発芽半分開引かれる
栄転を送る賑やかなジェラシー
賑やかに神も嬉しいギヤル御輿
カルテだけ賑やか五体不満足
空気や水を売る店が賑わってくる
お隣りはパーベキューかな夏休み
お隣へお託びしている今日の客
賑やかな家族だ今日も皿が割れ
東の間を燥いでくれるプチトマト
懐が一寸賑わう十五日
賑やかな家に大きな鍋がある
乾杯乾杯鬮汁が煮えてくる
鳥たちの自己主張から朝が跳ぶ

軸 吟

豊中市 田中 正坊
大阪市 前 たもつ
藤井寺市 太田扶美代
富田林市 片岡智恵子
羽曳野市 徳山みつこ
堺市 柿花 和夫
倉吉市 最上 和枝
松原市 玉置 重人
岸和田市 坂口 英雄
東京都 井上つよし
米子市 野坂 なみ
神戸市 田中 章子
寝屋川市 籠島 恵子
東京都 岸野あやめ
富田林市 池 森子
交野市 田岡 九好
弘前市 高橋 岳水
八王子市 播本 充子
青森市 小寺 花峯
東大阪市 谷口 義
和歌山市 古久保和子
鳥取市 鈴木 一弘

あの頃は一人になりたかったのに
自信過剰だらう賑やかな鍵の束
哀愁を賑やかに撒くチンドン屋

人間がしたことですとテレビショー

黄泉からの風賑やかに走馬灯

汗

矢倉 五月選



雑兵の汗がトツプに届かない
 楽々とカードでおろす父の汗
 阿波踊同じ汗なら踊らにゃ損
 パバの汗みなお受験に吸い込まれ
 エリートのに勝る亀の汗
 汗ほどは掛つてないパバの用
 陶工は火の色を読む玉の汗
 汗かいて覚えたことは忘れぬ
 テープカット汗に縁ない胸のバラ
 日めくり汗が足らぬと叱られる
 汗汗汗男の神輿とよめきて
 とうさんの汗に甘えて生きている
 飛びつけば汗の匂いのした父だ
 収穫の汗を知らない食べ残り
 汗じつと慣れぬ挨拶させられる
 ルーキの汗と涙のインタビュ
 最後尾頑張る汗が滴のよう
 汗だよと無理に笑った遠い母
 冷や汗は内緒なんでもどんと来い
 冷や汗をかきし閻魔の前にいる
 ボランティア爽やかな汗知るタオル
 陣痛の汗よ幸せ連れてくる

権 倅 子 美 義 北 朗 隆 盛 保 州 勝 視 四 郎 証 子 ミツ子 哲 男 盛 夫 ヒサ子 女 也 次 根 黒 兎 みつこ 庸 修 典 子

手に汗を握る廊下の結果待ち
 その先をよんで余計な汗をかく
 代々の汗が染み込む肥えた土
 談合に真面目な汗が怒ってる
 たつぷりの汗遅咲きの花さかせ
 汗かいて明日の元気を予約する
 コネもなく信用築く汗を積む
 よい汗を着にビール喉に積く
 呼び止めて冷汗かいた人違い
 天下り縁ない父の玉の汗
 子育ての汗は甘美な親の味
 我慢してじつと汗をかいている
 振込みの給与で汗が匂わない
 汗いっぱい吸った大地がよく喋る
 生真面目な汗が息せき切つて来る

朝 子 千 里 五 月 公 誠 久 仁 雄 泰 女 あすき 雅 明 倫 子 美 明 弘 風 螢 あすま 浜 丘 幸 雀 和 重 一 風 岳 水 婦 美 子 碧 充 子 ヒデコ 高瀬霜石

涼

多々納テル子選



眉を描き涼しい顔でウソをつく
 香焚いて涼を馳走する情け
 熱帯夜涼しく笑う女と居る
 難問も涼しい顔でやりすこす
 冷蔵庫開けて涼取る部活の子
 一病をあやし涼しい風の中
 竹の青露たつぷりに朝の涼
 雲つかむ話涼しい顔でする
 夕涼み素足に下駄を引っかける
 螢とび今日のほてりが消えて行く
 ビアガーデンビールが涼を分け歩く
 仏壇へ涼しい朝の風入れる
 エアコンで体調狂う旅の宿
 一服の清涼剤となるジョージク
 涼風になるか一曲ハワイアン
 熱の子に一匙ずつのシャイベット
 クーラーと妥協出来ない歳になり
 寝てる子に贈る優しいうちわ風
 ウォーキング同じ木陰で涼をとる
 染抜きの水の旗に誘われる
 涼風を宅急便で届けられ
 ラムネ玉シユワツと夏を吹きあげる

かおり 弥生 主一郎 シマ子 敏子 冷子 重人 花順子 注湖 雄々 壺 碧 深雪 典子 のり子 時雄 理恵 泰女 慕情

風の道知りつくしてゐる母の家 (志) 千代

かごだけを持ちスーパードで涼をとり

岩清水合掌をする遍路笠

心眼を澄ませば涼し蝉時雨

酷暑さけお化屋敷で涼をとる

さりげなくママが扇子で送る風

炎天の花は待つてる如露の水

涼風にひと息入れる峠茶屋

そよ風に釣りを揺れる夕涼み

冷房を逃げてうちわの老いの涼

ネクタイを取ると涼しい喉ほとけ

荒涼としたころにも種を播く

カーネーション母の涼しい顔に逢う

紹の着物祖母涼しげに正座する

納涼の花火見にゆき玉の汗

佳

手花火を囲む家族の笑い声

寝つくまで母がおおいでいるうちわ

竹林のどこかに居そうかくや姫

愛すこし足して涼しい風にする

滝のぞき竜の伝説語る祖父

人

一服の清涼剤のお人柄

地

修羅ひとつ越えて涼しいビール干す

天

天の川風は涼しと薫風師

軸

涼風に疲れを癒す母の海

アウトドア

久保田千代選



さあ外へおいでと五感誘う秋 (編) 洋

母さんがいちはんはしゃぐアウトドア

飯盒を逆さにめしが炊けました

アウトドア仲間たくさんいてくれる

戦前の遊びはみんなアウトドア (編) 正和

日焼けした肌生き生きとアウトドア

アウトドア医師の許可出来る風みどり

野外での清しさ知らぬ引つ籠もり

五坪ずつ畑を貸して行くゴルフ

四島をこの眼に焼いたアウトドア

おにぎりがとつても旨い山歩き

アウトドアアルック十歳若く着る

歳時記をめくればアウトドアの風

アウトドアいつか私の顔となる

アウトドアわたしひとりの風が好き

佳

サバイバルナイフが未知へ駆り立てる

清流のほとりに家族テント張る

くわがたもテントも赤札つけた店 (笑) 五月

リストラの首が落ちてたアウトドア

森わたる風で心を洗つてる

人

飯盒のおこげの味は忘れない

地

アウトドア心裸にしてくれる

天

アウトドア自然に還るひとになる

軸

サバイバルごっこジャングル懐かしい

千里

盛夫

かおり

正和

泰雄

正雄

玄也

四郎

弥生

尚士

充子

たず子

注湖

可住

一知

猿杓

五月

雄々

美津子

霜石

朝子

朝子

朝子

朝子

朝子

朝子

朝子

朝子

朝子

初歩教室

題一 台風

三宅保州

作句を生活の習慣に

「作句が苦しい」「良い句ができない」とよく聞かれます。この解決法はただ一つ、
（毎日どんな作句する）即ち多作することです。時々作句したり、締切が迫って急に考えてもなかなか作れず佳句も産まれ難いものです。川柳を生き甲斐として長続きさせよう成長するには、毎日の暮らしの中に川柳に取り組む時間を設けて習慣つけることです。
あたかも、毎日顔を洗い食事をし、仕事や家事をするように、どんなに忙しくても（川柳の時間を毎日の生活に習慣として取り入れることです。）それが習慣になって楽しみになり、川柳をしない日は気になって仕方がないようになればしめたものです。

楽しみは頭ひねって五七五

保州

【孫の台風を詠んだ句】

いわゆる孫台風を詠んだ句がたくさんあり

ましたが、発想が殆ど同じ傾向でした。

年に一回台風一家来訪す

綾乃

冬と夏孫台風で泣き笑い

タカ子

嫁の留守孫台風が泣き止まず

智加恵

叱られても叱っても孫台風だ

ミヨノ

孫台風一度に五人上陸し

好文

台風一過外孫共はみな帰る

北朗

台風のように散らかし孫帰る

（河）洋子

お転婆が足跡残し駆け抜ける

正和

孫が去り台風去って物静か

雅代

盆正月台風去ったようになり

こずえ

孫台風が去るのは盆正月過ぎてからです

ね。

孫台風去って霸気なし老夫婦

実千代

豆台風去って二月の休みとる

開子

次の六句は比較的佳句です。

孫台風去っていつものティータイム

紀子

初めての豆台風が背に温い

幸雀

子を叱る声で台風近くなり

賢治

豆台風去って我が家もロスタイム

道子

豆台風障子が泣いて目が空いた

俊子

豆台風爺婆倒し引き揚げる

益子

「爺婆倒し」が何とも衝撃的な揶揄ですね。

【添削・批評句】

次の七句は事実等の説明句に終わっています。

川柳はそこからの作者の思いや訴えを詠

んでいただきたいのです。

台風は深い爪あとを残し去る

静子

台風に期待している水不足

像山

ダムの水涸れて台風待ち遠し

貞子

台風を喜んでいる人はない

順子

台風が米もりんごもひきちぎる

那珂子

国会で台風荒れる民営化

みね代

台風の通ったあとの青い空

美紗子

原 台風がすり抜けて通り手を合わす

美恵子

中八、「針路が逸れて」等で中七に。

原 水位には梅雨に台風恵みなり

宇乃子

句がぎくしゃく。リズムも大切な要素。

添水不足には台風も役に立ち

秋星

原來なくても困る台風ほどほどに

秋星

添恵みの雨だけの台風ならよいが

英旺

原 台風が慈雨洪水の裏表

英旺

添 台風の雨を小出しにしてほしい

好

原 低気圧だけでは台風とは言えない。

好

添 低気圧台風並みになった妻

好

原 低気圧台風よりもおそろしい

稔

添 台風よりやっかい妻の低気圧

稔

原 人間に知らぬ力を見せつける

かずみ

台風という題とは分かりにくい。

添 台風に人の小ささ思い知る

かずみ

原 台風に庭の盆栽部屋避難

松風

部屋避難と熟語的な表現はリズムを損なう。

添 部屋中に盆栽避難さす野分

原 風の日があるに台風デジタル化 信 雄

添 デジタル化しても台風避けられず

原 気まぐれな迷走台風日の長さ (高洋 子

添 台風が迷走一日が長い

原 台風の目音消しになる内と外 弘 子

添 台風の目の静けさに不気味なり

原 ぼろ家にも来たぞ台風体当たり 清

句 想は尊重して、表現を変えてみて。

添 台風に負けじと五寸釘を打つ

【少し工夫すれば佳くなる句】

リモコンで台風進路変えてはし

台風のリモコン操作いつ出来る 秀 四

台風の操縦桿は神の筆

台風を消そうと言わぬ地球博 節 子

台風に築五十年チェックされ 武

台風も怖かったらし鬼瓦 章 司

中七は「睨みを利かす」的にも詠める。

台風へ一喝をする鬼瓦 兵 頭 水 月

台風接近タマはのんびり欠伸する 夕 胡

のんびりとあくびの重なりが惜しい。

台風に気付いた猫が落ちつかぬ 土 橋 登

台風の真っ只中に姉の葬 冷 子

「姉の葬」は作者には動かないのですが。

原 台風が怖くてテレビをつけたまま 千 華

「を」を取ると簡単に中七になります。

原 警報が出たを確かめ一度寝する 満 子

警報だけでは台風とは限らないので。

添 暴風雨警報と聞き二度寝する

原 銀座通りは台風も好き僕も好き 幸

添 台風銀座こんな銀座はご免です

原 予報聞きふとんかぶって挿んでる 信 子

添 台風襲来布団かぶって挿んでる

原 大型の台風それで気が抜ける 忠 子

添 大型の台風それで拍子抜け

原 万全を期せば台風逸れて行く イ セ

添 万全を期すと台風逸れて行き

【佳 句】

台風一過庭のコスモス地に染まる

台風一過顔に木の葉の道祖神 利 子

休校になると台風期待され

子の進路台風よりも不可解で 政 子

台風になれずもぞもぞ低気圧

台風の子報当たりませんように 孔 一

台風の目の中コマは静止する

台風の銀座で耐えるさとうきび 映 子

嵐去り蟬の亡骸だけ残る

台風に教えてやろう回れ右 雅 明

台風で椰子の実遠い旅に出る 映 子

台風よ誰に頼まれやってきた はじむ

天井の染みが気になるタイフーン のり子

(シドニー在住ののり子さんには、台風は

タイフーンなのですね。)

【今月の推せん句】

いくたびか台風越えて現在地 土屋起世子

この台風は作者の人生の大きな嵐を言っ

ているのであり、それら乗り越えて現在があ

るといふ発想が秀句に仕立てました。

台風は今も変わらず親日家 奥 時雄

「親日家」という着眼力に脱帽します。風

刺とかいぎゃくがたつぶり効いています。こ

んな親日家は願い下げたいものです。こ

迷走の台風さては酒気帯びか 岡本 昇

迷走の台風を「酒気帯び」という着眼に感

服しました。こんな酒気帯び運転は取り締ま

れないのです。ね。

台風一過顔に木の葉の道祖神 阪本 藤朗

その情景が彷彿されます。小さいお体で台

風に耐えられた態を、お顔の木の葉が物語っ

ています。着眼か実際の見付けにしろ、台風

と道祖神という二物衝撃的な取り合わせも優

れています。

【私の句】

ご葬儀も台風だった雨男

ヘクトパスカルで表せない野分

秀句鑑賞

同人吟 早川盛夫

— 8月号から

川柳のような俳句、俳句のような川柳、よく耳にする言葉である。確かにそのどちらとも見分けのつかないような句をよく見かける。

ある人はこれを柳俳と呼ぶ人もあるようだが、いったい川柳と俳句はどこが違うのか。言うまでもなく俳句は季語を中心とした花鳥風詠が基礎となっていることは、高浜虚子以来ホトトギスの伝統である。

「春夏秋冬四時の移り変わりに起こる自然界の現象、並びにそれに伴うところの人時界の現象を風詠する」というのである。

従つてこの旧態依然の体質から抜け出そうと試行錯誤する俳人達の作品を評して、川柳のような俳句と言わしめているのかも知れない。一方川柳のほうでは、俳句のような厳格な決まりがないだけに、至つて自由に広範囲に詠まれているのも事実である。

しかし川柳にも決まりがない訳ではない。十七音字であること、滑稽、機智、風刺の三要素があること、人間の喜怒哀楽と社会を詠むなどの決まりはあるのである。

「川柳は人間である」と言つたのは楳元祚太。

「川柳は人間陶冶の詩である」と言つたのは麻生路郎である。いずれも川柳は人間を詠む詩であると主張しているのは同じである。

あれこれと妻はやつぱり名コーチ

村上直樹

妻を名コーチとはよく言つたものだ。さしずめ私の妻などは迷コーチとでもいつておこるか。時にはうるさく煩わしい時もあるが適切な助言をしてくれた時など誠に有り難いものである。

ドリンク剤よりも家族の笑い声

徳山みつこ

家族団らんの少なくなつた社会で、居間から洩れてくる明るく笑い声に幸せを感じるのは誰しも同じである。どんなドリンク剤よりも効果のあることは皆んな知っている。

しかし残念なことに家庭崩壊につながる暗いニュースばかりが多い。

人間の愚かごろころと落ちていく

中塚礎石

町に出てモラルの低下に腹立たしいことは

かり。電車の中の化粧、ブランド品の氾濫、グルメの食べ残し。日本の将来はいつたいうなつていくのだろうか。

紫の似合う女にまだなれぬ

西出楓楽

東野大八さんに（むらさきの山少年は老い易し）という句があるのを思い出す。

紫は天子のいろ、君主、高貴な人、官位で言う五位以上の人のみに許された紫衣である。中国でも紫宮、紫禁城、紫宸殿、など天子の居所に冠せられ、他に物事の最高をも差している言葉とも思う。

紫の似合う女とは、紫式部なのか小野小町なのか、大八さんの求めたものと、楓楽さんの目指すものは一緒だと思つた。

ちよつとした段差の方が恐ろしい

黒田能子

大きな段差は気を付けて歩くから問題は無いのだが、わりと小さな段差になるとつかり蹴つまずいて思わぬ怪我をする事がある。やはり歳なのですね。

走つたら間に合つたのはもう昔

春城 武庫坊

楽しい句ですね。私も会社勤めの頃はよく階段を二段飛びしながら電車に走り込んだものです。今はとてもそんな元気はありません。「電車遅らせてでも座つていきたいと思うよ

うになりました。あの頃の元気が懐かしく思われまます。

物忘れ今日は茗荷を食べました

天 正 千 梢

茗荷を食べると物忘れする、と昔から教えられてきましたが根拠はないそうですね。物忘れを歳の所為にせず茗荷に転嫁するあたり老翁そのものではないでしょうか。

変身をした気にさせるペンネーム

牛 尾 緑 良

普段着から背広に着替えた時のように、身もこころもピシッと引き締まるような気持ち。ジーパンの優しいババから厳しい企業戦士になる瞬間。

三食をしっかりと食べて痩せてはる

玉 置 当 代

羨ましい限りですね。減食してもいつこう減らない体脂肪に悪戦苦闘しているあなたにとつて実に不思議な光景にしか見えないことでしょう。ジョギングしたり、水泳やジムに通つて痩せたいと願っている女性が多い中、旨い物をしっかりと食べて痩身を維持できるなんて憎らしくさえ思えてくるのではないのでしょうか。

邪魔者にされて電柱立っている

久 谷 ま こと

邪魔ではあるけれど不可欠なものつて世の

中には随分ありますよね。

さんすうに弱いがジューゲム丸暗記

上 地 登 美 代

どうしたものか人間には得意分野というものがあり、他人に出来ないことを簡単にやつてしまう才能の持ち主がいるものである。むしろ秀才よりも一芸に秀でた人の方が人間として将来成功する率が高いのではないかとさえ思われる。精進すればきつといい落語家になれるかも。

見えすぎる眼鏡はかけぬことにした

政 岡 日 枝 子

智に働けば角がたつ、情に竿差せば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくこの世は住み難い。住み難くさが昂じると絵が生まれ、詩ができる。夏目漱石の「草枕」を思い出し、てしまふ。

人間の機微を詠む川柳人にとつて、見える眼鏡を外すということは勇気の要ること。厭世感からか、現実逃避か。世界的テロ、近隣諸国との軋轢、国内では談合、少子化、詐欺、嫌なことはかり。現実から目を逸らしたくなるのは分らないでもないが。

妻よ手を離すな坂はまだ続く

津 川 紫 見

定年だからといって安心するのはまだ早い。二十年三十年の余生がまだ残っている。

三人目産まれてくれてありがとう

池 内 か お り

少子化に歯止めが掛からない。家族最低三人は生まないと日本の人口は減少をたどるばかり。戦中の貧しい暮らしの中で、生めよ増やせで七人も八人も生んで育てた時代を思うとき、子を生まないばかりか結婚すらしない若者に何を考えているんだといったくなる。

三人目の誕生は一家族の喜びだけではない。国民の慶びでもある。

君が代の二番歌ったことがない

左 右 田 泰 雄

実に面白い見つけ。君が代に二番があったつけ。そんな思いの人も多かろうと思う。

無器用なわたしの指の太いこと

城 多 喜

何とも愉快な句であることか。(はたらけどはたらけど尚わが生活楽にならざり ちつと手をみる) 貧窮と病弱の中から搾り出された啄木の句と違つて、笑いがあることで救われる。

あんなに買うて着る服がないと言う

山 本 半 銭

不思議ですね、クローゼットに溢れるほどの服がありながら、着ていく服がないなんて、女ごころは判らないですね。

—水煙抄

秀句鑑賞

—8月号から

寺川弘一

人生は人間の数だけ生まれ、人生は多彩で
今までも、これからも、同じ人生はひとつも
ありません。

そんな生きざまを、川柳はいろいろな角度
から、さまざまに詠っていきます。

マンシヨンの窓の数だけ空がある

杉浦 えむ

朝顔の蕾を一つ見つけた日

平嶋 美智子

少子国自動ピアノが鳴っている

三浦 強 一

人生をクールに見つめる時、見上げる窓の
数だけある大空の表情、はじめて見つけた蕾
一つに小さな幸せを感じる心、しかし遠雷の
ように聞こえる自動ピアノの音は、象徴的に
不吉な予感を感じさせます。

故障したバイクへ容赦ない雷雨

渡邊 伊津志

転んでも土を掴んで立つパワー

猪森 スミエ

清貧のドラマ知ってるチビた靴

塩路 よしみ

この愛する人生を、強く生きねばならぬと
人々は、自らを鼓舞します。

亡父の背が海いつばいに見えた夏

桑名 孝雄

そして強く生きた父を偲ぶ時、新たな意欲
を自らに課していきます。

この次の言葉待ってるレモンティー

金子 美千代

娘より夫から欲しい赤いバラ

助川 和美

つないだ手握り返したのが返事

升成 好

人生には寂しい時もあり、不安な時もあり
ます。そんな時、誰かにちよっぴり甘えてみ
たくくなります。

愛する人に、共に生きる連帯感を求めている
のかも知れません。

名画展静かに空気揺れている

土屋 起世子

美しいものに憧れ、本能的に美を求めるの
は、人間にだけ許された特権でしょうか。静
謐な空気にひたり、生きる活力が身内に湧い
てくるのを感じる時、現実はバラ色です。

しかしながら人生は有限、そろそろ平均寿
命に近付いてくると、少々愚痴っぽくなつて
きます。

よく使うめがねをいつも探してる

奥 時雄

神経痛も写ってほしいレントゲン

中島 春江

パソコンについてゆけない喜寿翁寿

松葉 君江

願い事神へ補聴器上げようか

野村 清美

でもどの人生も、有意義な人生で、生きて
いて良かったし、愛する思い出もいっぱい。
もう一度生まれかわれるのなら、やっぱり人
間に生まれ、そして川柳をやろう、人生を詠
おうじゃないですか。

阿呆言うてちよっぴり飲んで長らえて

稲葉 洋

■句集紹介

『軌跡』

中後清史句集

木本 朱夏

平成十七年一月二十五日、中後清史さんは喜寿を迎えました。「句集などおこがましい」と躊躇していた清史さんを説き伏せて、三人のお子さんがお祝いに上梓したのがこのたびの川柳句集『軌跡』です。

「自分に合う趣味は何だろうか」と摸索していた清史さんは川柳と出会い、昭和六十年十月、NHK学園の川柳講座に入門。

「川柳研究」「川柳大学」「まいにち川柳友の会」などと交流があり、現在「川柳塔」「川柳塔わかやま」「はまゆう川柳会」「三幸川柳教室」など、幅広く活躍されています。

野草からもう幼い日の香り
飾らないなまりが温い里の風

亡母の影追えば聞こえるわらべ歌

ある日突然母が倒れ、助けを求めて集落の坂道を親戚の家まで走ったという少年の日の

記憶が作品の背景にあります。草の匂い、風の匂いにつながる思い出が切なく、つーんと胸に迫ります。

清史さんは、南紀・那智勝浦に住まわれています。風光明媚、温暖な土地柄は、そのまま清史さんの人となりや作品に反映しているように思われます。

家族や孫川柳は、ともしれば一段低く見られる傾向がありますが、清史さんは家族の絆を大切に詠まれています。家長として家族に注ぐ優しいまなざしの中から、ほっと心に届く佳句がたくさん生れました。

玉手箱でも開けるよう娘の便り
愚痴言わぬから気にかかる子の所帯
妻の手を一度ゆつくり見てみよう
まだ妻に指輪を買ったことがない
初孫を目で抱き締めるベビー室
おもちゃ屋に入れば孫は王子さま

「子供たちから」と題して長男・浩一郎さんは「父に教えてもらったのは人にたいする思いやり……人間としての生き方……そんな父を誇らしく思います」と記しています。

長女・美智子さんは「父からは働くことの意味、平和について、人とのつながりの大切さ」を教えられたといっています。

また次女で誌友の柏原夕胡さんは「くよくよ思い悩むのは愚の骨頂。後悔には前進がない。喜怒哀楽がはつきりして、常に前向きである」と父・清史を語っています。

子は父親の背中から暗黙のうちに人生を学びとります。清史さんの生きざまを作品から味わってみましょう。

水中花水から出たい日もあろう
もう鳴らぬ鈴ぶら下げて黄昏れる
冬の樹は淋しそです無口です
長旅の苦を語らないさざれ石
車座が好き人間が好きだから

誠実で生真面目な清史さんですが、ほのぼのとしたユーモアある作品も作られています。
わが身より痛い新車のかすり傷
かあちゃんの怒ってる訳孫に聞き
鬼の子が人間を見て泣き出した
無理もないことやな妻のストライキ

温かい家族の絆や清史さんの人生の軌跡が飾らないお人柄そのままに詠まれ、しみじみと心に響く句集です。

清史さんは現在、病を得て闘病生活を余儀なくされていますが、毎月『川柳塔』に作品を発表されています。一日も早いご快復を心からお祈りします。

■句集紹介

『老春譜』

松下 比ろ志

長 浜 美 籠

五月のある時、松下比ろ志さんがスーツと寄つて来られて「私も川柳始めて十年になるので一区切りとして、これまでを纏めてみようかと思つていますが、その時はまたよろしく」と、人懐っこい笑顔をされた日から完成を楽しみにしていました。

一九九五年、サラリーマン生活を卒業した四月に、初めていくしま川柳会の句会に飄々と入つて来られました。それから阪神・淡路大震災と同じで今年で十年、その間NHK学園の川柳講座で五年間受講され、二〇〇一年に川柳塔同人となり「以来ひたすら近隣の句会に出かけて川柳を続けました」と、はじめに書き記しておられます。

一・二七 一瞬転生命打つ

(以下「老春譜」より)

菜の花も活断層を知らず咲く

ブルーシートようやくとれて屋根光る

あの地震なかつたらばと友徳が
地震の句は「私の家が半壊の認定を受けたので思い入れが一人です」とさり気なく話しておられました。

蜜柑剥けば少年の日の蜜柑風呂
運動会僕にも少年の日があった
生年月日書くとふる里思ひ出す
友はよしおんなじ海の匂いする
手を挙げて答えた頃の古写真

空気のやわらかい潮の香する和歌山が比ろ志さんの生れ故郷です。吟行で近辺へ行つた時、ここがこの辺かと、説明をしながら瞳が活きいきして少年そのものでした。

受講の傍ら、ラジオ講座を聞いたり、森田栄一塾にも通い「いくしま句会」など、情熱を川柳に向けて取り組んだ様子が、当時の作風に、そして今もその片鱗が窺えます。仲ばした背骨に枯れ葉追うて独り

雨の日は信号おぼろ命おぼろに
庭の木にほつり薄暮のセンチメンタル
夜の空気が重い冬の胃袋

ネクタイを結ぶと父は父の群像に
彼は大変な読書家で、いつも本を離さず、努力を惜しまぬ方とお見受けしています。

人と土いつか一つの風になる(鬼遊選)
炎昼や河童も河馬も顔出さぬ(薫風選)

両先生に入選を弾みとして

人生をまとめてみれば墓一つ

神様が僕の切符を持っている

歳月は想い出ばかり置いてゆく

欠席をマルで囲んでから自由

花の香と通じあえるか老春譜

故郷を出て五十数年、今も九十歳の姉上が

ご健在ですし、小・中学の友人もいて、やはりふる里は良いものですと、人間的な一面も覗かせておられます。

菜の花や娘も一つ歳をとる
楽しみは子と酌み交わす酒の味

子等は子の予定表持つ梅日和

秋の空故郷の今映らんか

終の駅迎えに来る鬼もいる

彼は薫風先生の添削指導でもらった言葉を大切にしていると、紹介して下さいました。

「人生観とか世界観、あるいは鋭い社会批判など、川柳の視野は広いので身辺句と併せて作句して下さい。」

「十人のうち二・三人しか詠めないような視点を発見することです。形式から奥行きへと、深く洞察する目を養う習慣です。」

洒落た生き方とポリシーを持つ比ろ志さんの、今後益々の「健吟」期待して止みません。過去という枯れ葉を焚いて温まる

小判の値打ち

穴 吹 尚 士

これ小判たった一晚居てくれろ

という川柳は、国語の授業で聞いた覚えがある。よく判らぬままに、諧謔、穿ちを感じたものである。だが小判の値打ちをもっと詳しく知れば、作者や当時の庶民のこの川柳への思い入れが、より一層判るのではなからうかと思つて、江戸時代の貨幣制度を調べてみた。

この句は誹風柳多留（一七六五年）に掲載されているが、作句は宝暦十一年（一七六二年）で、今から約二百五十年前である。この頃から川柳が狂句に変わっていく文化文政時代（一八〇四〜一八三〇年）までの約百年間が、江戸時代の文化が最も爛熟していた頃と言われている。將軍家斉の時代である。

さて、小判の値打ちだが、金貨であることは先刻ご承知の通りである。

小判は幕府財政の逼迫から何度も改鑄され、將軍家斉の頃はその金の純度は大きく下がっていたらしい。従い貨幣価値の下落とイ

ンフレは開幕当時から見ると甚だしい。

それでも文化文政頃の米価を基準に現代の貨幣価値に置き換えると、一両で米一石が買え、八万円、十万円と推測されるそうだ。

即ち、この川柳に見られるように、一両（十万円）は一般庶民（裏長屋の住人）にとつては稀に見る珍しい高額貨幣であつた。では江戸の貨幣にはどのような種類があつたのだろうか。

金／銀／銅貨が混在して使われていて、それぞれの間では相場変動があつたようであるが、ややこしいのでおおよその所で固定して並べてみる。（尚、金銀貨は四進法なので、判りやすいように、一両を八万円で計算する。）

江戸時代

一両＝四分

一分＝四朱

一朱＝四百文

二万円

五千元

一文は十二、五円という計算だが、感覚的には十円玉である。尚、四文銭という銅貨があつて、これは五十円玉の感覚だろう。蕎麦の十六文に代表されるように四の倍数の値付けが多いのは、四文銭が存在したからである。

百文は千円、千二百円だが、日常生活ではこれを持ち歩いて支払うには重すぎる。必然的

現代の価値

八万円

二万円

五千元

に掛け売りが発生し、月末一括支払い、或いは節季払いとなり、年末は掛け取りから逃げるという落語の話が腑に落ちる事となる。次に一両がそれほど珍しいのは何故か、収入の方を見てみよう。

裏長屋の住人の中で最も羽振りの良かったのは大工だそうである。火事と暗峠は江戸の華で、大工の需要は多く、賃金も高かつた。

それでも熟練した大工の日当が五百〜六百文、即ち六、七千円で日給が十日払いだから、小判など見た事もないというのも頷ける。

現代では日給七千円はパートでも稼げるし、それほどの高給ではないが、この時代の裏長屋の生活は月二両なら御の字で、家族四人が寝酒つきで暮らせたそうである。裏長屋の一汁一菜というのは味噌汁と沢庵を意味していたし、日常の食材は近所の米屋、八百屋、味噌塩屋、たまに買う魚は棒手振り（ほてふり、天秤棒の担い売り）一心太助のような人で、年に一度か二度の鰻は大変な贅沢だった。仕事帰りの居酒屋の一杯は、軽いつまみと酒一合で二十文前後くらい、酒はもちろんだ酒（下らない酒）で灘や伏見（下り酒）とは味が違った。

一両小判とは一生に一度出会うか出会わないかの暮らしてあつたようだ。



蛙さんありがとう

谷口 義

七月二十七日午後、蛙さんが亡くなられた

との連絡が入り、一瞬耳を疑いました。

いつもお元気で翠洋会もほとんどお休みもなかったのに、今月二十日の句会はお休みて、心配をしていた矢先のことでした。急性心不全とのことでした。

高杉鬼遊先生（故）に師事され、翠洋会に入会されたと聞いておりました。

平成八年に私が入会したその日から今までずっと、お隣の席でいろいろなとお世話になりました。こまめにくるくるとよく動かれ、寒い時は熱いお茶を、暑い時は早く来てお茶を冷まして待っていて下さいました。その心配りには全員感謝しておりました。

二人並んでいつも一緒に互選の集計をしましたり、よき相棒よき友人として助け合っていました。

とても可愛い方で、小柄な身体に帽子がよく似合い、「蛙」と小さな声で呼名なさって

いたのを思い出します。

ご主人様が亡くなられた後しばらく沈んでおられましたが、立ち直られ良い句を次々と作られ、豊中もくせい川柳会、などにも足とのばされ、活発に出席されておられるご様子に、お元氣になられたと喜んでおりました。

毎年春には翠洋会の仲間達と、大阪城の桜見物に出掛け、帰りはヒルトンホテルでコーヒーを飲みながらお喋りをするのが、春の行事の一つになっていました。

いつも楽しそうに、にこにここと人の話を聞いておられました。

亡きご主人様とは「二人でよくコーヒーを飲みに行ったのよ」と言われ、とても素敵なお人だったと聞いておりました。

今頃は天国で楽しくお話しなさっておられることでしょう。

蛙さんの句

幸せな夢を手に乗せ酔っている

にこにこと嫁が息子を使つてる

菜の花の海で泳いでいる癒やし

つまずいた石に勇気を試される

独り居に馴れて笑いも疎くなり

なるようになるすましてる横座り

無駄足もいつか役立つ回り道

語らねどやさしくされる羅漢さん

いい話聞いて全身毬になる

夫婦駒いずれ一人になる運命

いたわりが欲しくて赤い花生ける

最後の句は

疲れなど笑顔ひとつで吹き飛ばす

甲 吟

小柄でも心は広い人惚ぶ

天国へ蛙飛びして行っちゃった 楓 楽

ご主人がむかえに来たか蓮の花 千 梢

瞳の中に消えぬ笑顔とベレー帽 美 籠

忘れない愛と良心くれた人 蕉 子

翠洋会のマドンナだった蛙さん 義

寂しさを笑顔でつむ君だった 正 坊

今はもう呼べど帰って来ぬ筈 恭 昌

人を愛し愛され君は永久の旅 昭

本名 児玉 馨子

戒名 芳華院釋尼妙馨

七十歳

蛙さん 安らかにお休み下さい 合 掌

第55回 富田林市民文化祭

池 森子句集『森』発刊 記念川柳大会

いつ 10月15日(土) 12時開場

どこで 富田林市公会堂(富田林西口下車・東へ3分)

祝辞 富田林市議会議員 林 光子 氏
富田林くすのき整理理事長 加藤 一敏 氏
川柳塔社理事長 板尾 岳人 氏

お話し 森子を語る 土田 欣之 氏

宿題 (各題2句・13時締切り)

「戸」	池 森子	謝選
「里」	中田たつお	選
「面」	平山 繁夫	選
「火」	前川千津子	選
「気」	墨 作二郎	選
「衣」	河内 天笑	選

会費 2000円(句集・発表誌・お茶・各題特選賞呈)

懇親会 4000円

問合せ 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10

TEL & FAX 0721-25-0603 池 森子

主催 富田林川柳協会・富田林市・富田林教育委員会

謝富田林市文化振興事業団・富田林文化協議会

第19回堺市民芸術祭川柳大会

とき 17年9月11日(日) 13時開場

ところ 堺市立梅文化会館

(Tel 072-296-0015)

(泉北高速鉄道・とが美木多)

お話し 「川柳あの手この手」河内 天笑

宿題 「なんぼ」 大内 朝子 選
「包む」 片岡 湖風 選
「雑踏」 久保田元紀 選
「小銭」 墨 作二郎 選
「予備」 長江 時子 選
「散る」 中田たつお 選
「ゼロ」 村上 玄也 選

席題 なし 各題2句 締切14時

出句料 1,000円(作品集、参加賞呈)

賞 各題秀句に呈賞

主催 堺市文化団体連絡協議会

後援 堺市・堺市文化振興財団

連絡先 堺川柳協会

〒593-8305 堺市堀上緑町2丁16-3

河内天笑 方 TEL・FAX 072-278-4706

第39回東大阪市文化祭参加 第33回 市民川柳大会

日時 10月16日(日曜日)

正午開場 出句締切1時

会場 東大阪市社会教育センター3階

(近鉄奈良線布施駅下車北へ5分)

ビデオ放映 「まちかど探訪」

題と選者 (各題2句・出席者のみ)

「挑む」	吉川 卓	選
「夜明け」	谷垣 郁郎	選
「他人」	内藤 光枝	選
「ナイフ」	松本初太郎	選
「生む」	小山 紀乃	選
「実(み)」	中川 一	選
「傘」	板尾 岳人	選

各題秀句に市長賞その他佳吟賞・参加賞・発表誌呈

会費 1000円

懇親会 4000円(当日申し込み)

お問合わせ 片岡湖風 ☎0729-65-1341

主催 東大阪市文化連盟・東大阪市川柳愛好会
わかば川柳会

後援 東大阪市・東大阪市教育委員会

全国の河童達よ遠野に集合せよ! 第2回「河童」川柳誌上全国大会

応募期間 受付開始 5月1日

締切 9月30日(消印有効)

課題 「河童」2句(新作・新鮮な河童を)

選者(敬称略)

札幌川柳社(北海道) 斎藤 大雄
おかじょうき川柳社(青森) 北野 岸柳
川柳人社(岩手) 佐藤 岳俊
明日香川柳社(埼玉) てじま晩秋
川柳研究社(東京) 西来 みわ
NHK学園(神奈川) 大木 俊秀
川柳えんぴつ社(富山) 脇坂 正夢
川柳塔社(大阪) 西出 楓楽
光川柳会(山口) 早川 又鳥
戸畑あやめ川柳会(福岡) 藤井 北灯

投句料 1000円(小為替) 便箋たて書き

発表 11月3日

賞 総合25位まで(盾その他・発表誌呈)

投句先 〒028-0516 遠野市穀町6-17

鈴木南水 TEL 0198-62-4843

本社 八月旬会

八月五日(金) 午後五時半
アウイーナ大 阪

うだるような暑さの中、八月旬会は92名の参加があり刻から開催された。

はじめに七月逝去の同人見玉蛙さん、参手の藤村メ女さんの冥福を祈り黙祷を捧げる。

お話は参手の田中正坊氏、終戦六十年に当たる今夏、戦争体験者として、自身の苛酷な軍隊生活を生々しく語る。

徴兵検査第二乙種の氏は、昭和19年22歳で召集され陸軍二等兵として大阪の部隊に入隊、訓練に明け夕に暮れる日を送る。その後本土に迫り来る敵を迎える防衛部隊設置に伴い関東鹿島灘に配属される。足りぬ武器、手薄な防備の中、至近弾を浴びる危険にさらされたが、終戦を迎えて命拾いをし、帰ることができた。男六人兄弟皆兵役を体験し、一人は戦死、二度と戦争をしてはならぬと訴える。

初出席に和歌山市の喜田准一氏を迎える。月間賞は吹田市の山本希久子さんに輝く。

(司会)女也 (記名)月子・義
(受付)義子・扶美代 (清記)直樹

席題「サイン」

藤村 亜成選

まずクシヤミ今日一日のゴサイン
別々に歩きましようというサイン
サインコサインそしてチンブンカンになり
おいとまをしようというサイン
サインだらう寝起きが悪くなっている
サインただで値段の上でいく壺
愛しているサインで溝をうめたいく
離婚書にサインする手が震えてる
神さまのサイン見逃し子を持たず
シゲナルはいいつもこっそり灯される
少年AのSOSが聞きとれず
うどん屋に読めぬサインが貼ってある
あれこれとアゴでサインをする夫
うまい話にサインひとつの落し穴
気になるが手術承諾書にサイン
蝉しぐれ秋が来るよというサイン
おねむりのサインやや児の手が温い
玄関でツノのサインが出迎える
あの時のサイン見落し恋終る
百均の皿にもちゃんとサインある
五時から男目と目で立ち上がる
判子からのサインが幅利かし
ガン告知きつとサインがあつたはず
温暖化のサインにエアコンを上げる
老いひとり今日も元気の旗を出す
同じ字で借りるサインと貸すサイン
悪筆が行列を呼ぶサイン会

千恵子 義
保州 萬的
恵子 壽子
富美子 更紗
義子 修
恭昌 美籠
賢子 ひさ乃
見清 泰子
潤子 耕治
弘風 千里
一風 文
正坊 恵子
一步 集彦
則彦

ハンコよりサインを大事がる日々よ
星のサイン欲しくて今日もみつめてる
元気よいサインをくれるお腹の子
窓開ける花がサインをしてくれる
何かあるおしやべりな妻黙り込む
住
神様のサインでやってくる老後
胎動のサインへどつと母性愛
危機に立つ地球のサイン見えますか
少年のサインが親にとどかない
氷山がとける哀しいシゲナルか
人
そつとサインして下さいな逝く時は
地
赤ちゃんが笑つたアサガオが咲いた
天
虹彩の翼で翔んだのがサイン
軸
ゴーサインだすまで遠いワンチャンス
兼題「軋む」 吉岡 修選
一人だけ正論を吐き輪が軋む
ブレキを軋ませながら老いてゆく
主流から外れた椅子が軋みだす
自転車の軋み元気に子が帰る
九条が軋む日本の曲り角
ローン済まぬうちから軋み出した家
新婚の二階夜中に軋む怪
太陽の搭がほかーんとして軋む

月子 いわゑ 正雄 いわゑ 幸雀
扶美代 朝子 公誠 保州 修
ルイ子 扶美代 森子

また妥協して良心が軋み出す
 軸足が軋む動けば動くほど
 損得の絡む会議でよく軋む
 あちこちで軋み出してる社のモラル
 あの方と軋まないよう車間距離
 頂点を極めて軋みだす社運
 争いの止まぬ地球が軋み出す
 軋んだら紙風船を膨らます
 三人も寄れば微妙に軋み出す
 心ない一言友情まで軋む
 君が代に起て起てないで軋みだす
 定期券軋むレールが耳につく
 人間のエゴで地球が軋み出す
 温泉で軋む心をおつためる
 昇進のずれに同期が軋みかけ
 談合を軋ませている天下り
 睨み合う遺産に仏間軋みだす
 歳やなあちよつと動くと背が軋む
 軋んではだんだん太くなる絆
 ライバルも背軋ませて駅へくる
 お茶にして軋む会議を和らげる
 金貸してそれから軋み出した仲
 自分史のところどころにある軋み
 私が歩くとギシギシ鳴る廊下

幸雀 扶美代 准一 亜成 欣子 敬子 恭昌 義 保州 萬的 正坊 哲男 俣子 欣子 朋月 遠野 潤子 ひさ乃 耕治 准一 玄也 みつ子 泰子 利昭 利昭 愛論 (五)月

郵政で軋む総理の屋台骨
 合併が不調で軋むトップの座
 脳軋む音また増えて誕生日
 親の引くレール軋んで子はぐれる

老骨の軋まぬように酒を呑む
 郵便配達単車が軋みだす
 おとなりに美人わが家が軋みだす
 軸 軸
 神様と僕の問合いが軋んでる
 湯上りの香りほのかに流れ星
 足もとをほのかに照らす母の愛
 借景の庭にほのかな月の冴え
 風の彩読んでほのかに燃えてくる
 螢火の幻想ほのかに月掬う
 ほのかな温み同じ痛みを持つ同士
 哲学者のほのかなくほ見えてしま
 散る花のほのかな悲鳴聞く詩人
 乳の香のほのかに匂う児が眠る
 香水はほのかによろしほどほどに
 白桃がほのかに香るエレベーター
 梅干のほのかな香り梅雨明けて
 安らぎの中でほのかな愛を知る
 母の背でほのかに聞いた子守歌
 残り香がまだある部屋にいる孤独
 線香の香りもほのか一周忌
 ほの暗い方が座禪は組みやすい
 母の夢ほのかに母が匂います

希久子 天笑 直樹 重人 美義 雅明 柳弘 希久子 義子 倫子 潤子 奮水 美智子 千恵子 尚士 いさお 三喜夫 天笑 兼題「ほのか」 黒田 能子選

エアコンが効いてほのかな寝息聞く
 くじ引きでほのかな思慕の人の横
 ほのかだが悪の匂いのする男
 あの視線ほのかな愛のシグナルだ
 トンネルを抜けて駒子の風ほのか
 残り香の手紙を刻むシュレッダー
 虹を追いながらほのかになつてゆく
 秒読みへほのかに感じて来る不安
 紅ほのかずつと女でいたいから
 柿の木にほのかに残る少年期
 お客様ほのかな香りでお出迎え
 笑顔で介護ほのかに心通じ合う
 香を焚く大事な人が訪れる
 ほのかな光求めて迷路の中にいる
 八十をほのかに花の香りさせ
 闇の中ほのかに過去と擦れ違
 ほのかなる希望を託して子を育て
 輪郭がほのかに見えて来た安堵
 人生はほのかほのかに過ぎていく
 人 人
 プライドの香りほのかにかすみ草
 光ほのかに見えた気がする医師の笑み
 煩惱を捨てると見えたほのあかり
 軸 軸

玄也 耕治 千里 高栄 アキ 哲男 恵子 萬的 理恵 洋 寿海 希久子 理恵 光久 扶美代 朋月 舞夢 森子 義 潤子 (五)月 楓 楽

明日へのほのかな明かりたやさない

町工場魂こめて生き残り 公誠

魂もお金があると元気です 義

魂に喝を浴びせる蟬しぐれ 朱夏

魂の叫びと想う一行詩 扶美代

魂を揺すりつつける本がある

課題「怒る」 河内 天笑選

支持率が民の怒りのバロメーター 雅明

弱腰の政府に怒る拉致家族 萬的

血と骨の叫びヒロシマ怒りの日 公誠

時効でも消えない被害者の怒り 保州

怒らない日本人に腹が立つ 修

怒り心頭の省庁の無駄づかい 美智子

新盆へ怒りが溶けぬ献花台 富美子

怒ってもちっとも恐くないジャパン 恭昌

怒りたいのに我慢している親父 朋月

怒ってる人の隣で笑ってる 義

怒ったらあかんと血圧が叫ぶ 重人

風を怒らせ一流から落ちる 扶美代

怒られに行くのに酒を下げていく 鐘造

朝帰りは黙ってヌツと出る 愛論

怒る声キタよりミナミこわそうな 哲男

怒る声大きすぎると子は怒る 欣子

怒られてしつかり飛んだ竹トンボ 森子

悪いことしても怒らぬ妻でした 岳人

怒りん坊案外清い人 寿海

シネマ出て健さんになる怒り肩 美龍

ドラマ見て泣き新聞を見て怒り 希久子

阿呆やなあとまた嫁はん怒られた 保州

怒ったら一番こわいお母ちゃん 希久子

怒らねば明日の風が掴めない 保州

怒ったらだんだんブスになりますよ 希久子

怒らしてやりたい人が怒らない 高栄

唇が震え出したら距離を置く 准一

怒る事沢山あつて忙しい アキ

第八回 いたみ市民柳大会

とき 11月3日(祝) 10時30分開場

ところ ラスタホール(伊丹市立生涯学習センター)

お話し 阪急伊丹線稲野駅から西へ600メートル

漢字おもしろ学 佐藤一男氏

お話し 漢字おもしろ学 佐藤一男氏

と選者 各題2句、締切12時・開会12時30分

「かわく」久保田半蔵門選・「無」小山

紀乃選・「生きる」泉比呂史選・「ざり

ざり」西出楓楽選・「真つすく」住田英

比古選

事前投句「心」延寿庵野鶴選 はがきに2句

10月15日土)締切、当日消印有効

参加費 1500円(発表表誌営業出席者に限る)

懇親会 音羽茶屋新伊丹店にて、当日受付

会費5000円(先着30名まで)

川柳塔のぞみ10月句会

日時 10月25日(火) 13時から

場所 人形町区民館(地下鉄人形町A1)

宿題 「ハンドル」「働く」「あみだくし」

以上2句「自由吟」1句

欠席投句 10月22日必着 播本充子宛

お世辞

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

サークル檸檬（先月分） 吉田あずき報

勢いがあるから虫が寄るらしい
好きと言いやいやと言つて続く仲
仏壇を断食させて気儘旅
天地無用わたくし古希のコワレ物
コツコツ判つてからの塩加減
好きだとも言えず遠くで見えています
人間が好きまあるく回る洗濯機
百歳もやはり一日ずつ生きる
鬼瓦一軒ずつにある長屋
好きな色で母さん描くクレオン画
一足して二にするのがままならず
ウニイクラだけ食べてばかりいる
人間が好きで怒つてばかりいる
何げない言葉に左右される若い
ひき出しの中に焦燥感がある
好きな色毎日違う髪ですか

ローズ川柳会

山崎

君子報

忠犬ハチ公今は昔の物語

てる

美籠
みつ子
光久
義子

あずき
いわゑ
希久子
正坊

棲世
たもつ
千代
遠野

楓楽
房子
扶美代
昌紀

君子報

てる

川柳塔打吹（前月分） 大森 孝惠報

心地よいお世辞待つてる老いの耳
お帰りとドアのむこうで猫が待つ
もろもろのボタンを押して生きゆく手
兄弟は相撲を取つて仲良けれ
出来る事教えてゆくど力湧く
諦めてた彼女が意外来てくれた
幸せな手応え枇杷の実が熟れる
待つことが美德だったのは昔
同窓会互いに老いを口にせず
窓あけて眠気を払う夏至の午後
手の届くところの幸で良しとする
戦中戦後この手いとしい八十路ゆく

孝惠報

みつ子
藍
哲子
トミエ
貴代子
孝一
美籠
いわゑ
武庫坊
年代
義子
君子

久芽代
紀美恵
和子
龍枝
克枝
公恵
節子

清
石花菜
博文
三津子
よしえ
重忠
螢
芳光

久芽代
紀美恵
和子
龍枝
克枝
公恵
節子

清
石花菜
博文
三津子
よしえ
重忠
螢
芳光

久芽代
紀美恵
和子
龍枝
克枝
公恵
節子

清
石花菜
博文
三津子
よしえ
重忠
螢
芳光

資産家と聞いて嫁したが嘘の皮
このバッグ条約違反してないか
洪皮のしぜんにむけるお年頃
梨の皮剥いてやらねば食わぬ子等
木の皮が神社の屋根を守つてる
すり切れた亡父の形見の皮財布
東大を出た子へ母の皮算用
満二十歳母の膝から脱皮する
奉仕する吞んでボイ捨て缶ひろい
奉仕品プランド捨てて抱え込む
奉仕した重手の穴に春の土
白い羽根赤く染まって社会に奉仕
奉仕品捨てる分まで持ち帰る
豊岡の鞆にポランテアを入れ
欲の皮つっぱる主婦の詰め放題

川柳クラブわたの花（前月分） 井尻

民報

心地よいお世辞に酔つた振りをする
安心という名の保険買うてくる
乱舞するホテルに川は磨かれる
夕焼けの川面をなでる風に酔う
籠る子に出口見つかり光射す
ズームインアップを嫌うシミやしわ
胃プロクがあたふたしたるバイキング
安心の皿には父母の愛がある
うっとり美酒を舐めつつ夢を嗅ぐ
レッサーバンダ絶好調の立姿

はじむ
ミツ子
君江
宏
欣子
幸枝
晴美
俊子
浩三

はじむ
ミツ子
君江
宏
欣子
幸枝
晴美
俊子
浩三

はじむ
ミツ子
君江
宏
欣子
幸枝
晴美
俊子
浩三

はじむ
ミツ子
君江
宏
欣子
幸枝
晴美
俊子
浩三

民報

はじむ
ミツ子
君江
宏
欣子
幸枝
晴美
俊子
浩三

はじむ
ミツ子
君江
宏
欣子
幸枝
晴美
俊子
浩三

はじむ
ミツ子
君江
宏
欣子
幸枝
晴美
俊子
浩三

はじむ
ミツ子
君江
宏
欣子
幸枝
晴美
俊子
浩三

はじむ
ミツ子
君江
宏
欣子
幸枝
晴美
俊子
浩三

うっとりとしヨバンに溶ける無我の刻
 安心は内緒で生保掛けてある
 安心を保険証書に買うてある
 童謡の春の小川はどこいった
 ほろ酔いでうっとり見てる甘い夢
 検査着はブルー不調を訴える
 白バラを手向ける母に笑みこぼれ
 弁解の口が味方を遠のける
 酒が入り時がうっとり流れ出す
 この想い届かぬ川の広すぎて

川柳塔おっぱこ吟社 木村あきら報

味付けも嫉も変わる匙加減
 生きている証の杭がまだ打てぬ
 家計簿のやりくり上手も芸の内
 好きな花咲かせ老後に血がさわぐ
 真心と笑顔でピンチ切抜ける
 過疎の村子供おりますす鯉のぼり
 一の矢は躲し二の矢に射止められ
 芸術家夢はデツカク粘土ねる
 プライドを捨てると靴も軽くなる
 再発の病ドミノに触れた鬼気
 ありがとうその一言が和ませる
 はいはいと弾みを付けて動く母
 義理チヨコがトロリと溶けて夏に入る
 窓枠に流れる絵画見て飽きず

川柳塔のぞみ 播本 充子報

半分の不真面目が好きだーい好き
 良子

敏男
 いっふみ
 義明
 知佐子
 美代子
 民
 ふりこ
 八寿子
 宏至
 一風

ひらひらと男が雲に乗ってくる
 プライドを捨てると箸が軽くなる
 レシビ見たはずの肉じゃが辛すぎる
 ふところは軽いが今日も日本晴れ
 悔しさを捨てれば軽い靴になる
 食って寝て半分牛になってきた
 逆転をハーフタイムに賭けるもの
 じゃがいものような夫婦で円満だ
 半分にしたがだーれも受け取らぬ
 わたくしの化身かじゃがいもが太る
 あんパンを半分に割る癖がある
 相合傘もいいが半分ずつ濡れる
 半分を残して妻は逝きました
 肉じゃがにチャレンジしてる恋最中
 アングルは右半分と決めている
 半分の半分でいいジャンボくじ
 ユニークなロケットと会う愛知博
 仏様と半分こして桃食べる
 じゃがいもがはしゃいで稼ぐ視聴率
 ユニークと言えばユニークかなニート
 半分は本気でシャボン玉を吹く
 落ちついて話すじゃが芋にも個性
 人生は楽しい半分が女性
 じゃがいもとバター北海道食べる

初出勤新車も光り胸躍る
 ガソリンの価値に車悲鳴あげ
 波まくらしぶきの音で眠れない

川柳塔みぞくち 小西 雄々報

信雄

良子

紀伊子
 良修
 清
 桃葉
 幸一
 権悟
 いわゑ
 文子
 扶美代
 あやめ
 美代子
 やすお
 哲代
 美龍
 康子
 和香
 勝

大小の波をかぶってやる気出る
 親も子も孫も一台もつ車
 哲学の道は車で走れない
 おだやかな波を見つめて気も軽い
 波風を立たせぬように舵をとる
 バスツアー後部座席は宴会場
 言い勝ってまた大波に身構える

川柳塔おとり 鈴木 一弘報

しなやかに上手に生きる細い腕
 春過ぎて細くなるのは親の脛
 鬼の目も孫の仕草に細くなる
 鬼瓦屋根で四方を見張ってる
 地球の屋根争い消して丸い空
 元気です屋根から雀とぶ目覚め

佳句地十選 (8月号から)
 小泉 ひさ乃

切り札を握って沈めない夕日
 秘訣などおまへん汗の量だろ
 酸素補給尻尾も活き活きと振れる
 ワンテンポはずし喜劇をくり返す
 これ以上地球を泣かせてはならぬ
 来た道を帰ろう他に策はない
 夢抱いて走りつづけてきた背広
 癒しの空間六畳の小宇田
 あとすこし人生という綱渡り
 点字追う少女の指に明日がある

公美枝
 和代
 信雄

久子
 鈴枝
 智恵子
 弘子
 静江
 正光
 雄々

由多香
 幸次郎
 以和方津
 清子
 道子
 道子

奏子
 ダン吉
 日枝子
 恵美子
 巳代一
 義
 扶美代
 三男
 直樹
 仁緑

屋根瓦鬼はなくとも中にいる
 逆境へ怯まぬ屋根に守られる
 三世代揃って温い屋根の下
 老夫婦細い網でも離れない
 雨降ると調子を上げるトタン屋根
 入口で中だるみして中を見ず
 選ぶこと何でも中がさわりなし
 胃の中へしこり残した列車事故
 中立の場所で争い避けている
 中流の暮らして慣れて米の飯

高槻川柳サークル卯の花 瀧本きよし報

真一 登美 一弘 小生 黙光 ヒロ子 知恵 風花 艶子
 義一 昭 武史 佳一郎 求芽 昌乃 八斗 活恵 佐代子 重人 美義 照雄 泰雄 ろつば 典子 祐作

内緒ごとルーズリーフに綴じておく
 ねじ一本外れたような物忘れ
 ベランダのルーズキユウリが曲がりだす
 病む人の気持ちは病んでよく分かり
 左手を添えた握手に嘘はない
 ここだけの話世界を駆けめぐる
 仮面捨てのんびりゆこう老いの坂
 たくさんの引き出し持っている策士
 我が子にはいつか甘くなる親の視野
 あわてるな残り時間はたんとある
 耳もとで迷う心をくすぐられ
 引き算の出来る暮しで飯にする
 耳学問ははの言葉は生きている

東大阪市川柳同好会 森下 愛論報

孝一 尚士 照美 庸佑 宏章 萬弘 萬虎 醉龍 美龍 砂輝守 秀夫 郁郎 節子 太一 萬的 弥生 柳弘 良子 定男 克己 三重子 秀夫 雅文 美弥子 和代 あや子 シマ子

石仏の肌の光が美しい
 美意識が似てるあなたと見る名画
 美食したつけを支払う万歩計
 美しい女は美しい悪魔
 竹原川柳会 時広 一路報
 田が消える笑顔がひとつまた消える
 人間の汗が鏡になる棚田
 棚田まだ守る人あり夢があり
 霧晴れて鴉は嫁にゆきました
 妻のナビ濃霧の中を走らせる
 散歩する二人に霧が味方する
 霧晴れるように算数好きになる
 水墨の世界を霧が深くする
 空想は霧の中から見るが良い
 河霧と父の作った旨い米
 霧の夜は霧の仲間になっている
 朝霧にふわり天使も降りてきた
 霧晴れて愛が始まる愛終わる
 新緑に誘われ古都の旅にでる
 森林浴全身全霊みどり色
 従つてゆずつて心地よい風よ
 夏が来る前に急ごうダイエツト
 自家菜園畑を見るのが嬉しくて
 山裾に虹を残した通り雨
 亡き母は虹のむこうで笑つてる
 虹の橋明日を信じて眺ねてみる
 虹の橋一色たりぬから画けぬ
 虹のむこう信じているから坂登る

章久 敏子 美子 愛論 蘭幸 半覚 栄恵 幸子 慶子 輝恵 静風 節生 淑子 笑子 厚子 万年 正宏 比呂子 寿枝 千枝 史子 房子 孝枝 敬子 節夫 千代美

原爆忌下ドームに立つ虹あらば立て
滑らない靴で渡ろう虹の橋
噴水にかかる小さな虹の糸

長柳会 村上 直樹報

懸命に生き抜くノルマ一万歩
共稼ぎノルマ果して夢掛けて
皆勤のノルマ果した定年日
五月蝓いぞ蟬の鳴き声かましい
床凡だし線香花火亡母亡母と
ノルマなし主婦は毎日ストレッツ
人の世はがんじがらめの契りごと
遠き日の約束いまだ未達成
人生はノルマとローン駆けくらべ
婚約を金婚式で締めくくり
平凡な心に花火打ち上げる
永遠の愛の約束砕け散る
あつけない別れ花火のようですな
延命の確約願う百度石
ふるさとの線香花火父母ありし
一万歩ノルマ果せぬスニーカー
ようやくにノルマ達成縄のれん
線香花火好きなあの娘の白い指
天国へ白寿に行くと予約する
傾いた企業戦士にあるノルマ
ほどほどのノルマがあつて惚けられず
少子化で三人産めと言ふノルマ
吊り革に今日のノルマがぶら下り
人生を花火の如く散るもよし

不朽 一路 規代 直樹 佐久治 孝彦 康博 もこ マサ 輝子 ひろし 武男 史 武男 よしお 三和子 正一 芳野 正子 けい子 敬二 和子 幸雄 和代 美代子

ため息と一緒に消えた遠花火
産むことが女のノルマとは言えず
はじめから線香花火のような恋
PLの花火故郷を華にする
尺玉が炸裂カッと梅雨明け

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

糊付の浴衣さらさら心地よい
さらさらとアドリブ見事女です
山や川越えてゆとりのある笑顔
ゆとりない年金またも減らされる
さらさらと夢では書けた胸のうち
粗食して血液さらさら元気です
太陽と並ぶゆとりの昼の風呂
庭畑狸と共生するゆとり

川柳ささやま 遠山 可住報

一石を投じて波紋たしかめる
投げ掛けて元にもどらぬブーメラン
当分と預かった猫生き甲斐に
いとしい島へ防毒マスクと児は帰る
空想がはらむと割れるシャボン玉
農業にハンコ下さい強い毒
水着着て思いは弾む遠い海
へそ出しの水着受け入れ波笑う
連載のおしんドラマがなつかしい
毒の花咲いても蝶は寄ってくる
凸凹の人生ドラマのようにしています
凸凹の人生ドラマまだ続く

一慧 正美 英美 富美子 淳司 伸子 はるみ かつ子 聖子 惠美子 好栄 博利 清泉 惠美 純子 美緒子 文子 美紗子 多美子 開子 かほる つや子 八重子 哲男

気の毒な風向き頭下げ続け
京都塔の会 都倉 求芽報
可住

スピードを追う来世のつげが来る
毎晩のように蛍に足が向き
さまざまな節目をこえて今日がある
眼が覚めて膝のご機嫌今日かが
残り火の裏を覗いて火傷する
夜の波君のほほえみ連れてくる
まぎれ込んだ切符洗濯物の中
じゃこの中に得した気分タコがいる
花影にまぎれて憩う揚羽蝶
昨日の疲れ乗せたくはない朝のバス
寝すこした朝の戦は秒単位
朝刊のやたらに重い売り出し日
朝日浴び人も車も動き出す
セリの声元気に朝の魚市場
朝ぐらいしゃんとしなさい濃いお茶で
よい朝が三面鏡で笑つてる
朝刊はテレビ欄だけ斜め読み
決着はクールな父の意見聞く
シレッターなんとクールな処理をする
夫婦喧嘩続いているよな洗濯機
雑収入洗濯に出す上着から
ときどきは気持を変える洗濯機
洗濯をしても取れない変な皺
どうしても洗濯したい言葉キズ
失禁をいとしく思う洗濯機
生きてきた苦勞洗濯フルムーン
高栄 篤子 久留美 あやめ 鹿太 益子 満子 百合子 宏子 欣之 ますお 正坊 萬防 求芽 和友 葉子 庸佑 やとみ 比ろ志 牛延 英子 則彦 輝美 典子 きよし

濡れ衣も入れて乾燥洗濯機

川柳塔鹿野みか月

土橋

螢報

琴線にふんわり止まる星の精
人の世に星になるまで汗流す

川柳ふうもん吟社

夏目

一粒報

初夏の風河鹿の声も乗せて来る
ちっほけな嘘が大きな風になり
ちっほけな暮らしも夫婦円満た
保育器のちっほけな子にエールする
零点をちっほけなどと済ませられぬ

談合が癒着している水面下
水面を元にもどした恵み雨
重い口酒の力で軽くなる
清らかにお椀の舟が浮く水面
ふる里の祭の笛に血が騒ぐ
白無垢を敷居またいで染めちゃった
共白髪元氣よすぎて銭も食う
よい噂聞く座布団の白さ敷き
考える頭の中は白いけど
水濁れる日増しに河原白くなる
白旗をあげて心へ雨がふる
老いてまだ白馬の王子みつからず
少しづつよこれ白には戻れない
白無垢に三度包んでるいのち
星きらりあれば恩師の合図だね
その昔朝星夜星若かった
名も知らぬ星にもせめて願いごと
生かされて星の数ほどある苦勞
うまい瓜食べて忘れる歯の痛味
瓜ひとつ半分にして仲直り
星になりたや鈍い光になろうとも
億光年かたや光と僕の生
喜怒哀楽星散りばめて万華鏡
星明りほどの幸せ噛みしめる
生かされて星の数ほど善を積む
星屑の一つ嫌われても俺だ

啓子

みどり

久枝
幸枝
小鹿
陸子
かおる
菊乃
八重
保子
実満
くに子
富久江
和子
永子
みさ子
弘子
武子
かつ乃
はるお
きみ子
汲香
照彦
彩子
茶子
節子
諷人

孔美子

洋々
雅女
静生
昌鼓
重忠
金祥
無限
一京
宗明
孝男
圭一郎
春名
悦子
秀夫
志緒
一瑠
美恵子
節子
益子
裕子
穀

房江
茂登子
はつ江
美雪
一粒

西宮北口川柳会

黒田

能子報

露一滴水子のなみだかも知れぬ
人間のエラー地球をすたすたに
二十日鼠応拳の軸で巣を作る
五十年やつとこんねの顔になる
閃きがやがてノーベル賞となる
ちっほけな手で一心に願かける
常識のエラーこの項目に余る
笑い声絶えぬこんねに人が寄り
頭がえ閃く勤も無尺蔵
閃きはノーモアでよいヒロシマ忌
あるがまま生きてすてきな歳を取る
ばあちゃんはこのねの守り神さまだ
ちっほけな芽実になるまでの浮き沈み
原爆をエラーと言わぬ国の友
男にはエラー覚悟の虫が棲む
どんぐりの閃き山が動きたす
こんねからでた一億の宝くじ
遺伝子のエラーがとが緩みなる
ちっほけな秘密の口が緩み出す
百歳の祖母がこんねの舵を取る
殿様のエラーで家老首が飛ぶ
わしだけをこんねの犬が吠えてくる
エラーして泣いた涙をかくす汗
閃いた句を抱いて出る風呂あがり
こんねの娘ミス鳥取は本当だか

美穂子
節子
益子
裕子
穀

ハイハイに期待の星という重荷
名も知らぬ星形の花野辺に咲く
ひとりでも二人でもよい星月夜
何時までも希望の星で生きている
流れ星願いは一つほけぬよう
ほろ酔いの親子を包む星月夜
苦難の日越えて大きな今がある
横好きでベン折ることを知らぬ今
明日からと言いまい今から立ち上がる
自爆テロ今に日本へやってくる
折り込め風船放す時や今
ひとことを今告げない過去になる
老い一人こんなに自由今が花
良妻に遠く雑巾乾きさきり
遠い日の平和を祈る原爆忌
引き出しの中で生きてる遠い人
雑音の遠いラジオが消えぬ耳
人生はブレイド好きに生きている
ブレイボール先頭打者がホームラン
爆笑を茶の間に運ぶ珍ブレイ
チョコ髭にブレイボーイの跡がある
ブレイバックすればだんだん若くなる

美穂子
節子
益子
重忠
金祥
無限
一京
宗明
孝男
圭一郎
春名
悦子
秀夫
志緒
一瑠
美恵子
節子
益子
裕子
穀

それなりの覚悟でことば光らせる
 久し振りの素足が若さくれました
 翔べそうな風待つ鳥になつて
 刺り残し髪を終日なでている
 知らん顔してしてくれる愛もある
 吊り橋の途中で愛の告白を
 乗り過ぎたスローライフの自分に喝
 速回りすればヒントが落ちて
 光久

尼崎いくしま川柳会 春城武庫坊報

七夕の笹も百均中国製
 七夕をパソコンで会う至近距離
 曾孫のほっぺ笑うと押してみたくなる
 挑発を受けてやる気の腕相撲
 腕力は父さん口はお母さん
 痩せ腕に負けぬ男の意地がある
 年の功刺もまあるくなりました
 ご生前御葬儀予約受けますよ
 あじさいは母の眠りか百済観音
 雨乞いを踊った町にまだ降らぬ
 食べて寝て寝ては目ざめて独り居で
 絶筆の跡がいまでもあたたかい
 踏まれてもタンポポ素知らぬ顔で咲く
 鯉職オベの三つ子は歩き初め
 雑草と語るアイディアの宝庫
 風は囁きに似て夏蝶を急かす

川柳塔唐津 仁部 四郎報

犬の名は呼べて飼主の名は知らず
 晴翠

年齢をニコニコとは恐れ入る
 父の日に甚平部屋着夏ズボン
 横綱を二人育てて報われず
 口止めの酒を注がれて焼ける胸
 頑張れば好転すると言ふ助言
 割り勘につりは要らぬが一人欲し
 急に妻優しくなった病気かな
 国会もクールビズだと率先す
 若い時一度田植えに行つただけ

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

大空へ終章燃やす蝉しぐれ
 地球儀をまわせば明日の色になる
 青いバラ美の探求に限りなし
 空しいが三日のめしはしつかりと
 逢いたい日空から私語が降ってくる
 憂さ晴らす空へ洗濯思ひきり
 曇り空西方浄土のあたり
 梅雨空へテロのニュースは重すぎる
 トライするものを捜しに風の旅
 ハードルは少し高目にトライする
 町内へとけ込む事のむすかしさ
 この町を亡夫を残して出られない
 町へ出ると随分軽くなる財布
 この町の半分ほどは親戚だ
 万華鏡くるくる夢を追いかける
 梅雨晴れや羽を伸ばしに町に出る
 城下町の面影偲ぶうろこ堀
 回転木馬追い越したくてたまらない

日傘くるくる少女は橋にきてしまふ
 輪廻転生ボクも回っているのです
 回転の軸になりきる妻でいる
 価値観の違いで回る運不運
 回転の遅さ逆手に笑わせる
 回転の早い女の男運
 身の丈の回転僕の道標
 貧しいなフル回転にエゴが出る
 目から鼻抜けて賢母は明日を読む
 ぐるぐるときめる思いはせつなくて
 釈迦の手のひらで回っている命
 栄枯盛衰地球は自転繰り返す

川柳大阪 高木 信幹報

ぬりたてのペンキと妻は触れない
 負けて勝つことも母から教えられ
 吉本は滅茶苦茶はたえ銭を取る
 ほたえるな口癖でたえ母でした
 おもいつきりほたえる恋の有頂天
 あの人の手に触れてから出る元氣
 設備ある姥捨山がない長寿
 手入れせぬ庭にあざやかあやめ咲く
 つり橋のまん中辺で出る迷い
 勤労はせず大金のライブドア
 鯉のぼりさぞ暑かろうこの暑さ
 我先に触つてみたい孫の顔
 下手な人いるから上手い人がいる
 無意識に触ると怖いバラの棘
 教え子の笑顔に安堵クラス会

裕美 裕美 裕美
 あきこ さち子 緑良 東吉 克子 和香 富美子 佐一 順子 精子
 五月 一月 孝一 丹吉 朝子 利昭 章久 東吉 民 ひろゑ タカ子 いつわ いわお 洛醉 珠生

触るなど言うたら触る人の性

袖触れてひよんなご縁で無二の友

下手いいのんびり行こう明日がある

寝たきりの枕にもカーネーション

喜びを教えてくれた風と汗

上司よりバソコンの腕ボクが上

ニューフェイス入って職場活気つく

下手ですが四人の子供出来ました

ボイ捨てを捨う子供に教えられ

本物に触ると熱くなる心

セクハラの指一本が命とり

美しいうちは触つてくれる花

追伸の母の元気に触れて初夏

宗教がからむと話ややこしい

温もりを教えてますか子から子へ

尼崎尾浜川柳会

山田

耕治報

他所さまの暮らしを朝顔から貰う
叱ることできず父さんよく怒る
あり合わせうちの子当自然体
騒ぐ子を叱りたいけど親が居る
寝るより叱つて欲しい生さぬ仲
よく育ち弁当箱はいつも空
弁当を聞くとき見える母の顔
ああしんど自分ほめたり叱つたり
他所者のひがみ溶けゆく角砂糖
他所者と決めた自分を恥じている
叱つてもよい先生は慕われる
叱らない父の視線の威圧感

善 柳 芳 美 彦 美 かよこ すがお 鉄心 重人 川童 笑風 柳弘 まつお 信醉 晴美 五月 よし子 勝巳 まさ 昭三 きよし 耕治 里江 イサミ 亀与子 正治

駅前馴染染になった弁当屋

よく効いた重く短い父の叱声

叱る目の奥にうるんだ母を見た

夏の扉をあける四条の辻回し

叱られた話が弾む同窓会

たこ焼を弁当にしてよく喋る

一本気な男と妙に馬が合い

雨の音やたら逢いたくなくて

お互いの握りこぶしで誓い合う

信頼は紆余曲折を越えてから

川柳塔なら

坊農

柳弘報

姿より心の糧をみとめられ

少し毒効かすあなたにシビれてる

姿見に今日の機嫌を読まれてる

三面鏡虚像がくずれてくるこわざ

向こう意気も粘りも消えて好々爺

粘るけどきめた休肝譲れない

美しい罫へたつぶり塗るルージユ

九条を守る粘りがまだ足りぬ

売れ残る空家に粘るつたかずら

押し売りの毒気を抜いた妻の口

越後屋の粘りも切れて閉めた店

姿よりお金とみんな申します

毒少しませて話が盛りあがる

どたん場で代打が粘りホームラン

粘り強さ教えてくれた千枚田

毒舌は友のやさしさかも知れぬ

産み終えて神に近づく鮭の顔

朋月 比ろ志 孝一 義芳 桃花 江美 全彦 求芽 鹿太 美籠 カズ子 博一 ふりこ 冬葉 あやめ 絹子 春蘭 千梢 とし子 まつお 章久 弘風 理恵 春雄 富子 芳香 良一

毒消しに花屋に寄って花を買う

泣いている父の姿を見てしまふ

フランスに神の領域犯すもの

毒舌の友のことは目に覚める

気まぐれの試作ひとつが因に当たる

日給の後ろ姿に筆を合わす

裏の裏見過ぎ気丈な立ち姿

試作に試作やつと開いた蒼いバラ

人間も神も粘つてお祭り

矢面に立つても姿勢崩さない

捨て石にされても粘る生きる道

神の掟犯すクローンに手を染める

毒吐いてはいてにんげんらしくなる

岸和田川柳会

原 さよ子報

約束を守った友のいい笑顔

嫁ぐとき母と約束辛抱や

マニフェスト口に出さない永田町

約束を果せぬままに父の墓碑

三月月の崩れてかなし水鏡

名女形三月月眉に光る芸

三月月を弓に見立ててキュービッド

三月月と月下美人の忍び逢い

アイドルの三月月眉を真似てみる

三月月のメロンを囲む四世代

無駄話波長が合つて弾みだす

シルバライフ無駄をゆとりと悟りきる

無駄な雀け叫ぶ課長が無駄な人

無駄でないあしたに活を入れる酒

真理子 一風 醉虎 和夫 道子 國治 弥生 寿美 秋雄 茂雄 孝盛 隆盛 朝子 狸村 浅子 清 仁緑 力子 みよ子 房枝 弘子 幸子 みね代 珠子 蛙城 穰一 ゆい

迷惑と言いつつ親は子をかばい
彼女とは前世からのくされ縁
病棟に私語が続いて熱帯夜
優雅なる垣根を越えて来るピアノ
厳寒の朝も道路に水を撒く
迷惑をかけてかけられ二人連れ
適当に迷惑かけて生き上手
中日が迷惑のセバ交流
劣る子も若しやと思う親心
外出に若しかの事のある予感
三億に若しやの願ひ宝くじ
あと一句若しや秀句とまだ未練
被爆証人若しやと思う記事に会う
あぶく銭無駄に消えゆく風来坊

三幸川柳教室

古久保和子報

洋 笑司 野添 守 寿海 基 東吉 香代 西子 一脩 ダン吉 呂万 かずみ かず子 当代 和代 義男 一步 信子 みね 智三 靖子 公子 朱夏 清史

ラジオ体操済んで緑の深呼吸
水ぬるむ深い思いの中にいる
ネット追う少女の闇が深くなる
身の丈の深さを忘れて溺れ出す
深いわけ聞いて欲しくて来たらしい
敵深く付けていのちの種を蒔く
菜梅梅雨深みにはまりそうになる
向き合えば鏡に深いふかい海
もったいないで通し金運ついてきた
おはよりの声が弾ける今日の運
虹の橋渡ろう運の逃げぬ内
金運がないから今日も頑張れる
清貧へ小さな運も味方する
生かされて生きて幸運抱きしめる
引き寄せた幸運汗の匂いする
頭上から星も狂気も降ってくる
運を天に任せ路傍の石でいる

川柳塔まつえ吟社

三島 崧丘報

孝義 桂香 徑子 登美代 武 和子 保州 次根 昇 起世子 准一 町子 イセ 幸 章子 千秀 茂美 小生 知恵子 邦代 スズコ 芳山 螢 多喜 和歌子

従軍記思い出尽きぬ北斗星
知恵の輪をつなぎ合わせている星座
自分史を語れぬ個所が赤く腫れ
目が語る言葉に出せぬ胸の内
来年を語ると風が背を押す
戦中派語る男の太い指
鉛筆が折れて明日が語れない
八月を人間らしく語り継ぐ
湯あたりし水欲しそうな地蔵さん
いい笑顔皆んな囲んで足湯する
お月さん目をつぶってね露天風呂
五票差し長湯ゆつくり出来ないな
湯にけむる窓に一行詩がうまれ
湯の街の情緒にひたる宿ゆかた
六道湖を宿の窓から自慢する
しずかな宿に来て殊更に思い出す
人間不信鄙びた宿へ来てしまふ
宿割りにこだわる人の大軒
幸せな色で染った宿の朝
湯加減と景色をほめて地酒注ぐ

倉吉川柳会

竹信 照彦報

静 紫見 野 多恵子 喜美子 房子 多賀子 治代 政子 英子 幸子 日出子 蘭 しみえ 注湖 桂枝 昌枝 崧丘 ちえこ 叮紅 悠子 季芳 重忠 よしえ 和枝 勝誉 龍枝

川柳クラブわたの花 井尻 民報

遠回しに言うて輕輕あしらわれ

みちのくのこけし素朴さ語り継ぐ

認知症過去巻きもどす童眼

天平美うっとり魅入る技芸天

ナツメロをうっとり聴くひとり酒

お手上げも平気で笑う歳となり

謎ひとつふたつは欲しい老夫婦

もの忘れ故人にもある誕生日

嫁姑しばし平和の午後のお茶

下駄の音遠くに去った童どき

高齢化まだまだなれる防護杭

目が天に草と間違ひ引き抜かれ

夏木陰で読書茶もよしコーヒーも

十本の指訴える手話の風

杭無くて両家親しく畑仕事

朝市の新鮮を売る国訛り

神の手が命を救う手術台

ほんのりと微笑が戻るデスマスク

絵手紙が素朴な夏を連れてくる

嫁もらい息子とどんでん遠くなり

うっとり裏窓私だけの月

匂すぎて私美人に程遠い

おばんざい母の素朴な隠し味

ひそひそと話す言葉がよく聞こえ

少女期のラフが太陽浴びている

八尾市民川柳会 宮崎シマ子報

弥生

民報

ノータイも馴れて余生をラフに生き

栄光の過去は語らぬラフなシャツ

捨て猫におチビの傘がかけてある

癖の日の傘はジャンプで張り切ろう

今日もまたあめ男来てる傘用意

貸したのが恋に広がるジャンプ傘

ためらうて暫し向き合う花鉢

リストラの鉄の音が物寂し

裁ち鉄エゴを宿して底光る

頑固親父の拳の中にある情け

歳ですと葉もらえぬ情け無さ

手のひらにとくとくとくとと生きる猫

風鈴へ風が死んでる汗の量

災を知らず今日まで来た無口

留守番ものんびり猫と小宇宙

ほけたのは神のお情けかもしれぬ

ラフな奴何故か女にもっている

臍の緒を切りたし一人歩きの鉄

純行のラフなブランの一人旅

雨傘が光るほど家に並んでる

友情の温もり抱いて生きる張り

少年のラフが発酵した非行

忘れじの鉄路に今日も手向け花

貸してから情け容赦のない高利

雨にも負けず風にも負けず妻は外出

能子

川柳若葉の会 宮崎シマ子報

加津子

晴耕雨読ガデーニングと漫画本

断水でなげき篠突く雨に泣く

妻と二人どうしようもない雨三日

雨の中マチャリ軽業のごと走る

まひの手に4Bの芯まだ堅い

芯のあるリीडだから付いてゆく

眠ってる脳へ鉛筆尖らせる

あずき

喜美子

香住

弘直

シマ子

ますみ

慶子

あずき

大森 孝惠報

忘れずに暑中見舞を有り難う

禿頭に真つ直ぐにくる陽の暑さ

汗しとどきヤミソール着て足伸ばし

暑いなあ挨拶がわり口に出る

恋のみち暑さ寒さも視野の外

被爆者の声が聞える暑い夏

談話が異常に高い橋架ける

貧すれば金を異常に恋しがる

竹の花咲く今年はね異常だよ

民営化意地の張り合い異常です

政界に異常が走る五票の差

太鼓腹異常だろうに医者ざらい

雨乞いに応えて天の底が抜け

病かな異常なまでに物忘れ

湯気たてて永久凍土崩れ出し

照彦

財を成す人だけあつて太っ腹

旅先の財布も浮かれゆるむ紐

手をつくし財産かくす夢を見た

財産が無くてベイオフなんのその

健康を財産として申告中

芙蓉子

玲坊

博文

石花菜

京子

和枝

富恵

紀美恵

和枝

富恵

和枝

使つても減らない財産徳を積む
 争う財もなく賢い親だった
 悔しいが財産残し逝く私
 ああ痛い入歯の調子狂い出す
 五カラットのダイヤ支える痛い耳
 痛いとも言わずガラスの靴を履く
 指切りの小指が痛い帰り道
 毎日の余暇が頭痛の種になる
 分晩の痛み忘れて六人目
 べちゃんこの財布が減税待っている

たけ代 克枝 清 禎元 玲子 芳光 よしえ 善江 節子 孝恵
 ほたる川柳同好会 水野 黒兎報

荷揚げされ本音を吐いた深海魚
 就職は役所一番喜ばれ
 恋をするレモンの芯の一寸なり
 強靱な芯を隠している笑顔
 身ももって女の芯が強くなる
 背信のペーじに揺れる脆い芯
 小説を終えて心ふつつ満ちてくる
 読みより奇な事と事件に目のうるこ
 周平を一冊入れて一人旅
 メシフロネルねぎらい挟む余地がない
 ねぎらいの言葉に明日もまた元氣
 ありがとうおおきに米寿になりました
 雨の夜は雨のリズムのセレナーデ
 一杯のお茶で心も癒やされる
 こせこせを出入りさせてる小銭入れ
 こせこせと動きなれてる戦中派
 こせこせも衰えみえる老いの坂
 羅漢さんこせこせすなと笑ろてはる
 こせこせを捨てて三線海の色
 こせこせと机ひくつが僕の城
 重箱の四隅こせつく鬼がいる
 こせこせとすまい宇宙はでつかいぞ
 こせこせと自分を責める夜の底
 窓際に座らされても芯を持つ
 芯の無い男に訳があるらしい
 しょやかに大和撫子芯強し
 こせこせと決してしない床柱

憲治 度 朝子 集一 寿美 柳伸 柳さ乃 憲太郎 たもつ 弘子 利昭 アキラ 柳弘 千里 遠野 タカ子 なぎさ 萬的 直子 更紗 志華子 楓楽 昌紀 叔子 重人

紫陽花をねぎらうように濡らす雨
 本棚の整理進まぬ聖子さん
 御苦勞さんその一言で心満つ
 過労死にならんようにとねぎらわれ
 手をつなぐ人を間違わないように
 山彦に答待つて風の中
 よそ行きの言葉で妻の低気圧
 霊峰の富士に戦車は似合わない
 山ほどの恩を我が子に受けている
 姥捨山何時でも呼びに来ておくれ
 山道でやつとあなたの手を握る
 やま越えた寝息にはつとする安堵
 山勘で当てた女房と半世紀
 午前二時妻の手紙が置いてある
 見られては困る深夜の僕のくせ
 ぼろくそに言うてつないでいる絆
 親と子の絆をつなぐシャボン玉
 不夜城の樹々に安まる時がない
 温かい言葉をつなぐ遠い耳
 人前で見せつけるよう手をつなぐ
 つなぐのは止そう発火する気配
 増税にブレーキかながてくれなにか
 ブレーキを確かめながら子を育て
 若貴はブレーキかける人がない
 九条に火花を散らす老人会
 生きるって楽しいなあと独り言
 明日の夢あるから食後くすり呑む

弘泰 欣子 三男 千梢 修報 志華子 とし子 一枝 一步 ルイ子 利昭 順三 萬的 和夫 集一 朝子 千里 あやめ 求芽 弘風 正 ひさ乃 倫子 千歩 桂作 高栄

言うまいと決めていたのに口謀叛
お供えも自分の好きな物を買ひ
認知症側にいるのが恩返し
うちの嫁はちほち山の神らしく
うとうとと艶抱えて乗り過し
いさかしの後の空しい人生譜
ふりむけば流した汗の花が咲く

川柳ねやがわ

森

雀友に電話しまくる雨の午後
師の麻雀支えた人の多いこと
K先生麻雀友達でままして
パイの音入れてわが家にする電話
麻雀のお陰巨匠とライバルに
予約した席におじさんねむつて
砂風呂に笑顔で並ぶ首と首
男下駄からころさせて露天風呂
朝風呂に夕べのうつを洗い捨て
かけ湯にも個性それぞれ姉妹
仕舞風呂あれは女を磨く音
ひとり風呂わたし丸ごと解き放つ
保証印浮き世の義理にからまれる
洪々が退院の時にここにこと
お見合いは洪々でした共白髪
荷物持ち洪々ついてくる夫
栄転もしぶしぶ赴任する僻地
洪しぶと逢うた見合いに花の咲き
レモンの丸ごとでも素直になつてくる
大変な妻がレモンを丸かじり

幸生 達子 昭子 淑子 柳一 春蘭 重人 頂留子 一炊 一笑 たもつ 勇太郎 博泉 弘風 かつみ 高栄 とし子 修 朝子 あやめ 日出子 鈍甲 さち子 洋 典風 仁清

茜報

早朝に一人ゆつくりレモンティー
レモンティー妻二人じゃもの足りぬ
レモンティーと貴方来るまで待つてます
我が家ではたたきにレモンうんとかけ
ひと切れのレモンを友に夜半の酒
レモンティー一つで塾女よくはしゃぐ
静物画ちよつとおしゃれなレモンの黄
レモンおとせば私の罪が消えますか
未だ青々残してレモンしほられる
青春とレモン一氣にしほるべし

はびきの市川柳會

徳山みつこ報

靴音であなたの掃毛すぐわかる
盲導犬に靴はかせたいアスファルト
用心棒に残しておいた亡父の靴
七人の敵へきりと靴の紐
行先は靴にまかせている余生
律義にも実をつけました八年目
名陶を呻吟させた柿の色
柿熟れて臉に浮かぶ亡母の影
苦かった過去にはふれぬつるし柿
柿の種お伽話の幕があく
柿を剥く卒寿の母の背が丸い
まだ青いあの柿の実もわたくしも
お互いに尽くし尽くされ今がある
出し尽くした汗敗戦に悔いはない
陰ながら尽くす心に嘘はない
尽くされて背中に重み感じてる
恋の行方揺れるボートに托します

ルイ子 ただよし れい子 度 利昭 勲 九好 亜成 弘一 真一 六点 悦子 志洋 扶美代 ヨシ枝 かつみ 吐来 りつえ 庸佑 いさお みつこ フジ ダン吉 一壺 光男 喜久子

豊中もくせい川柳會

江見 見清報

馴れ初めはボート遊びの語り合い
よくもめる夫婦でオールがちくはく
ボートには一緒に乗せるキュービッド
ボートでゴロ寝ひとりほっちもいいもんだ
優しさこつ今日も二人で漕ぐボート
ゆつたりと手漕ぎボートは恋に合い
プロボーズがくと揺れた貸ボート
少子化に母校の歴史閉ざされる
廃校の歴史寂しい石畳
九条の歴史に点る赤ランブ
私にも小さな歴史たんとある
人間の歴史を地球見えています

昭平 耕策 章司 惠勇 美代子 猿沓 重人 泰子 一知 静子 敏 英子 庸佑 正坊 啓生 重人 幸雀 祿骨 隆 萬的 求芽 石舟 玲子 知香子 美義 郁子

友は好し横で寝めたり叱つたり
三代がカメラの前ですまし顔
SOS年金前は財布から

スキヤンダル沈黙通し立消えに
捕まった手帳にすべて喋られる
惚れていて妻に財布を握られる

原油高趣味はドライブとは言えず
薫風師あまたの挽歌も送る
里帰り耳にやさしい国を言り

色恋も財布の中身が物を言う
人生の余熱がつくる笑い皺
子に勝てるアイテムひとつ持っておく

川柳塔きやらぼく

福代 天雀報

生涯にほんの少しの赤の刻
野にあつて踏まれる雑草と知りながら
偲ぶ人あり六月の花の陰
二人だけの城もそろそろ限界に
乱気流に乗った私は身をまかせ
金婚を祝うお酌は孫の手で
来た道に残して置こう花の種
この風に放せばきつと楽になる
食卓を明るくして春キャベツ
亡母の縫った布団を今も着ています
生きたって大変なこと茄子漬ける
実印を握り四方に我慢する
淡い灯に水をたずねて恋虫
戦後六十年アメリカ追従やめてくれ
ドライブの窓全開に初夏の風

比ろ志 宇乃子 タミ 巴子 満寿巳 尚士 寅次郎 寿美子 早人 都代子 則彦 見清

濡れ衣まといしゃつきり立つ菖蒲
亡き父母がわらつて見てる川柳を
里帰り亡母と交々仏間の灯
セザンヌを語る仲間と茶の点前
大庭園今が見頃かかきつばた
正論を煙にまいて自己主張
春雨に心洗われリフレッシュ
同期会持病の数を比べあう
天気続きでカッパの皿も干し上がる
あじさいの彩が染まらぬ雨不足

むらくも川柳会

毛利 幸報

美人だと姉妹縁談ふりむかず
何着ても美人はやつぱり美人です
ひと時を美人にかえる美容院
歩く人みんな美人にお化粧し
声美人電話の向うお楽しみ
勧誘の美人の声に騙される
妖艶な美人上目で媚びている
どきどきと孫の発表汗をふく
どきどきと初めて受けたカテゴリー
どきどきとスタート線に立たされる
白魚の指どきどきと絡ませる
水不足今日も田んぼの雨を待つ
捨てるもの捨てて身軽になりすぎた
少しずつ畑仕事に老いていく
メロドラマ昼寝もせずに見入つて
言葉一つ一つ控えて無事な日々
昇る陽に今日の幸せ見て貰う

恵子 那珂子 紫泉 瑞枝 雪江 春枝 初枝 天雀 寿々子 田鶴 幸報 明朗 信夫 定子 安男 美保 彰 幸 寿 恵美子 昭子 秀夫 ます美 ふうさ かずこ 英男 秀子 喜美

のんびりと暮らして今日も暮れていく
岬川柳会 八十田洞庵報
古シヤツに汗たつぷりの生きた染み
帯締めて夕餉汗した母の夏
大家族母が裁いた両成敗
汗流し運も味方で建てた家
梅雨明けへ地獄の汗をかき
定年に損得のない汗をかき
手に汗をにぎつて見てた昔日夢
父の背に家族を担う汗滲む
思い出がたつぷりあつて捨て切れぬ
じつくりと育んだ愛共白髪
屋根裏の男の背なに汗の塩
適当は実現しない良き意見
税金を払いたくない汗の玉
たつぷりと愛情かけた子が果立つ
あとひと息みやげを配る旅疲れ
汗かいた肌が一番好きな風
大袈裟な汗お茶漬のコマーシャル
爛々まだまだまだ愚痴を言うつもり

サークル檸檬

吉田あずき報

羨まれ気ままな独り振り返る
柵を抜けて気ままな飛行船
雑兵です気ままな柵は五分と五分
許された気ままがどうも腑に落ちぬ
恋人のうちは気ままも魅力なり
わたくしに背いて手も足も気まま

克子 みやこ 悦子 里子 幸 芳子 貞夫 桜琴 富美子 和香 茂平 令子 鉄男 洋子 孝子 とみ 俣子 蛙城 洞庵 光久 義子 あずき いわゑ 希久子

ささやかなブライドがある私にも
 天災人災もう諦観と運だけか
 目をつむり勿体無いを処分する
 気ままというウイルス地球を犯す
 人間の愚かさだけを知るカラス
 脇役が輝いているいいドラマ
 恋文はこないが果し状はくる
 刑務所を出ても気ままは治らない
 病院が住み良くなれば退院だ
 欲望を満たす気ままなブチセレブ

川柳塔みちのく

小寺 花峯報

向日葵の笑顔のような夏がいい
 いくたびの挫折か痛みだす肋
 ポーフラを笑った奴の血を狙う
 痛み知る拳は他人を殴らない
 ぜいたくは蚊帳越しに見るお月さま
 蕎麦の花ご先祖さまも降りてくる
 思いきり耳元の蚊を平手打ち
 正論に勝つと奥歯がやんでくる
 姉妹で遊んだ思い出蚊やの中
 痛恨の一行だけが走り出す
 戦場の修羅は語らぬ生き残り
 通いますあなた心つかむまで
 栄光を涙でつかむ金メダル
 蚊一匹打つ掌がにぶる児の寝顔
 痛い目にあつて人間出来て行く
 蚊に刺され踊つた恋も今は過去
 介護する掌に大輪のありがとつ

正坊 棲世 たもつ 哲夫 遠野 楓楽 房子 扶美代 昌紀 美籠 成柳 八千代 けん一 きよし 和香子 霜石 洋子 紅雨 てる ヒサ子 愁女 ふさゑ 雅城 花匠 井蛙 銀波 黙人

鍵っ子染める夕陽が目にも痛い
 青い鳥つかむに長い滑走路
 虹つかむまでは軍手を離さない
 一本のワラに一家がぶら下がり
 プランターに小さな夢を子と咲かせ
 パソコンのマウスがつかむ虹の過去

岳水 花峯 慕情 一花 五楽庵 岩美川柳会 石谷美恵子報

手作りの指輪に愛が込めてある
 指輪などはめたことない欲しくない
 六十年喜怒哀楽を見た指輪
 エンゲージリング埋めきた砂丘
 欲のない指に指輪がよく似合う
 イニシャルを刻んだ指輪半世紀
 北山杉は女の指輪嫌い抜く
 夜なべする母の指貫光つてた
 イミテーション指輪で玄布によく来たね
 おためしの指輪はめたらもう取れぬ
 仲直りはずした指輪はめている
 くい込んだ指輪石鹸水で抜く
 五回目の見合いでやつと指輪買う
 農を継ぐ女で指輪など持たぬ
 エンゲージリング無いけど続いている
 駐車場競馬お寺は儲けとる
 春は春秋には秋の寺もみじ
 寺の寄付勢み極楽行きを買う
 錆ついた頭脳を洗う寺の経
 男にもかけ込み寺のいる世相
 ぼつぼつに暑中お見舞ご中元

圭一郎 完司 重忠 石花菜 一粋 よしえ 忠良 節子 稔 たぬ アキ 幸枝 かつみ 静生 和子 蟹郎 公子 茶子 裕子 雅女 登

急いでもぼつぼつしても明日はくる
 ぼつぼつと両親逝つた歳になる
 人影のないお社に蝉しぐれ
 靖国の神は不眠に悩まされ
 参道で椎の実拾う昔の絵

川柳さんだ

北野 哲男報

ちっぼけな星の中での六ヶ国
 熱帯夜星眠んでる鬼瓦
 千鳥足まばらな星が背なを押す
 忙しい朝も見ている星占い
 星影のワルツを踊る粋な女
 自由の星自慢の星で生きている
 この頃は時に電気も消し忘れ
 分れ道捨てた未練の残る道
 痴話喧嘩本音がひとつこぼれ落ち
 瘦せている裸婦などおらぬ絵画展
 旬野菜汗も一緒におすそ分け
 ゆつたりとナイター見てるトラファン
 割り切れぬ尻尾がいつも絡みつき
 何もかも自由みたいで妻が居る
 冗談の中の本音を聞き分ける

川柳藤井寺

高田美代子報

一瑤 萬子 和枝 公乃 美恵子 藤朗 雅司 開子 正行 一之 順子 歳子 房江 好文 朋月 章子 正和 千代 忠 哲男 史郎 進

突然の電話一日君が棲む
 突然に息子が連れてきた天女
 突然に好きだと言われ困る老い
 突然の訃音に悟る世の無常
 ボクの恋出会い頭の事故のよう

突然ですがお暇ください夢だった
人生の終りを飾る恋病

野良犬の恋を育てている空き地
あかりつく窓の数だけ恋がある
半熟の卵が溶ける片思い

宇野千代の桜はきつときつと恋
うっかりと妻の帽子に恋をした
いまいちの味に足りないさしすせそ

いまいちの努力求めた二重丸
通知票今年は見せに來ない孫
いまいちで終る雨なき花しようぶ

いまいちのお経カラオケうまい僧
いまいちと思つた人の広い胸
妻の留守嫁の優しさなじめない

ハンサムと聞いてお見合いしたけれど
いまいちの暮らし目刺しがほろ苦い
いまいちの子をいとおしむ親ごころ

いまいちの話に欲しい句読点
いまいちの頭に辞書を食べさせる
いまいちの知恵と残り火を生かせる

いまいちの釣書にお茶がほろ苦い
お袋の書いたレシビで梅漬ける
梅の実を漬けてみようか焼酎で

いまいちな売上げ妻が出て伸びる
弾み過ぎ明日は孤独になるてまり

翠洋会 谷口

土笛に古代の風を聞いている
誠実に暮らして土にかえらねば
正直な土に言い訳してしまふ

登志子

武義

志洋

瑠美子

一知

みつこ

アキ

悦子

かつみ

六点

絹子

ヨシ枝

雅枝

喜代子

いさお

栄一

網歌

龍一

鐘造

扶美代

重人

淳司

静子

庸佑

春蘭

義報

みつ子

千梢

土地柄で美人もやはり河内弁
待ちわびて初めて知つた恋の味
知つたかぶりすると足元掬われる

澄まし汁香りが違う妻と母
身ほどを知るから背伸びなどしない
訃報聞くどこまで知らずか悩む

中皮腫と言う癌を知る定年後
この味を知つてしまふと舌も肥え
野次馬が居るから喧嘩止められず

ハイハイからもう始まつているパトル
ライバルと火花を散らす棒グラフ
初々しくしおらしいのも表向き

青とオレンジ希望の色によく似合う
ビール一本で本音は語れない
子に譲る地図に裏道それとなく

運を天に自然淘汰と老い見つめ
どうでも言いながら待つ子の便り
毎日を真面目に生きて笑い皺

われながらしゃべりすぎたな枷とれて
ポケットの十円玉に救われる
前進するパワーをもらう愛知博

川柳エスポ

山本 三郎報

私にも何方ですかと母が聞く
青い空水面に映り風清か
原爆のもの言わぬ声聞くさずな

誉め言葉聞きたいうれしやありがとう
神の声聴きたいところがありすぎる
春の宵桜にかこまれ香り聞く
お茶一杯誘われて聞く嫁の愚痴

尚士

舞夢

満作

桃花

石舟

蕉子

韻子

日の出

美籠

志華子

恭昌

孝一

捷也

理恵

絹子

正坊

すみ子

さと美

照子

富子

三郎

文好

団地

田花

たよし

よねぞう

一幸

補聴器でいやな時にはオフにする
聞く耳を持たない人に泣かされる
自立する魂の声聴こえ来る

耳にタコ聞く耳持たぬ自画自賛
すまし顔かぬふりして聞いている
天の声心で聞けと諭される

みな meaning じっくり聞いて拳手で決め
弾む声聞こえて妻は旅支度
聴いたこと忘れて悔む七十坂

艶めきの梵鐘を聴く明け六時
夫の愚痴かき消すように法話きく
春一番また戦争の音を聞く

見ることば聞くこと以上物を言う
達人は心の声が開きとれる
幸せな窓からさいた悩み事

わがままで聞く耳持たぬがんこ者
呂律回らぬ妻へ耳寄せ愛を聞く
友情で長々愚痴を聞く私

一歩

炊

はつよ

三枝

昭一朗

高栄

ルイ子

ゆき子

晚翔

とよ子

鈍甲

任宥

みさと

さし子

さち子

さとし

恵美子

第90回 大阪川柳の会

日時 十月十七日(月) 17時開場

会場 北区梅田駅前第一ビル5階

生涯学習センター第一研修室

宿題 各題2句・18時出句締切・席題なし

▽怪物・久保田元紀選▽文・平山繁

夫選▽貫う・加島由一選▽ふんわ

り・磯野いさむ選 会費 千円

欠席投句(会員のみのみ) 10月15日迄

〒532-002大阪府淀川区新北野1-3-4 706

本田 智彦 宛

柳界展望



☆鳥取県川柳文芸大会は7月10日、新日本海新聞社大ホールで14名の参加で開催された。当日の本社同人の天位は次のとおり。

臭い 鈴木 公弘
ナンマイダブとつさに言
つた震度七 倉益 一瑤
なお、本社同人鳥取県川柳文芸大賞は次のとおり。
へ鳥取県川柳文芸大賞準賞へ
人間の色にだんだんなる
地球 蔵本 悦子
今日の日がうまく畳めず
眠れない 細田 裕花
へ鳥取県川柳文芸大賞文芸賞へ
ふる里を少年の顔して語
る 山下 節子
雑草と今日もいくさをし

てひとり 澤 裕子
神様の呉れた道なら迷わ
ない 近藤 春恵
へ鳥取県川柳文芸大賞敢闘賞へ
皿小鉢わが家の風に住み
馴れる 村上 信子

☆第36回奈良新聞川柳大会は、7月31日奈良県文化会館で開催された。当日の本社同人秀句は次のとおり。
読点のあの日あの日に続
く今 居谷真理子
おかえりと迎えてくれる
めがね越し 安土 理恵
ふり出しに戻る四角い殻
脱いで 宮西 弥生

☆第23回夜市川柳大会は7月31日堺総合福祉会館にて101名で開催。同人の天位。
残りの夏楽しく埋めるこ
とにする 西口いわゑ
星空と話してわたし透明
に 山本 半銭
青空と相談して決めま
した 木本 朱夏
恋人の頃と比べないでは

しい 太田扶美代
幕引きはとても静かにあ
つさりと 池 森子
コオロギがこそとと近く
ように散ろう 河内天笑
▽出 版△

□松下比呂志氏（尼崎市）は、このほど句集「老春譜―私の川柳」（B6判・80頁）を刊行した。（紹介記事96頁）
□東野大八氏遺族の古藤邦夫・愛子夫妻は、6月1日付で「ああしんど 大八句集」（B6判・152頁・頒価二千円）を大八文庫から刊行、命日の7月18日、シテイホテル美濃加茂で出版記念会を開いた。（紹介記事83頁）

□合同句集「そうりゅう会」その三。そうりゅう会会員29名の句を1人10句ずつ掲載。B6判66頁。
□中後清史氏（和歌山県）は「軌跡」を刊行（B6判160頁）紹介記事95頁

□故児玉蛙句集「しおらしく」を太田昭氏が刊行。B6判32頁。
▽「芳志御礼△」
○波多野五楽庵相談役（弘前市）から金一封拝受。
○乾喜与志氏（同人・鳥取市）から、百寿内祝として金一封拝受。

▽同人動向△
○7月18日、故東野大八氏蒐集による川柳資料展見学と、講演会出席のため、岐阜県立博物館行。天笑主幹・岳人理事長・みつ子副主幹・たもつ、楓楽副理事長ほか5名参加。

▽社 報△
□児玉蛙さん（同人・大東市）は、7月26日心不全のため逝去70歳。駕泉大東会館で27日通夜、葬儀は28日に行われた。（追悼記事は98頁）
□藤村メ女さん（参予・川崎市）は、7月30日逝去。93歳。8月1日通夜、2日に葬儀が行われた。（追悼記事は次号）

ため逝去70歳。駕泉大東会館で27日通夜、葬儀は28日に行われた。（追悼記事は98頁）
□藤村メ女さん（参予・川崎市）は、7月30日逝去。93歳。8月1日通夜、2日に葬儀が行われた。（追悼記事は次号）

▽訂正と削除お詫び△
7月号P39下段10行目の句を本人申し出により削除
P58上段24行目、手捻り↓
手捻り P79上段ワク内1
行目、七〇〇字→一四〇〇字

常任理事会 8月5日、出席者21名 ①小冊子「川柳しませんか」検討 ②偲ぶ会追悼句会会計報告及び反省 ③川柳塔まつり記念品・作業日決定 ④規約改正検討 ⑤17年度役員選出について ⑥その他
次回常任理事会 9月6日（火）9月27日（火）共に13時30分から アイーナ大坂

句会名	日時と題	会場と投句先
高槻川柳 サークル 卯の花	15日(木) 正午から 勘違い・出無精・おっとり ジンスクス・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし
岸和田 川柳会	17日(土)午後1時半から 惨め・群がる・免許・持主	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅徒歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川昌万
川柳 藤井寺	18日(日)午後1時から 白・あくび	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公園1-105 高田美代子
川柳 ねやがわ	18日(日)午後1時半締切り スピーチ・逆転・恨む・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	18日(日)午後1時半から 無茶・逃げる・口	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十洞洞庵
もくせい 川柳会	19日(月)午後1時から 覚悟・昭和・離れる・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳クラブ わたの花	23日(金)午前9時半から 熱・灯台・泳ぐ・こだわる	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	24日(土)午後6時から 去る・未来・マーク・本	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市民会 川柳	25日(日)午後1時から 傑作・泣く・虫・「イメージ」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん社 吟	25日(日)午後1時から おおお・リリーフ・余罪	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都 塔の会	26日(月)午後1時から 露・パワー・鉛筆	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔 みぞくち	26日(月)午後7時半から 失敗・笑う・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	27日(火)午後6時から 料金・シンボル・消す そのまま	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳塔 わかやま	今月は、休会します。	〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

9 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	2日(金)午後1時から 近い・黄昏・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳 塔な ら	2日(金)午後1時から 唸る・琴・悠々	奈良市立中央公民館4F (近鉄奈良④出口徒歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
城北 川柳 会	3日(土)午後1時締切り 離れる・心臓・ブランド 自由吟	旭区 老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
富柳会	3日(土)午後1時から 追う・センス・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳 会	3日(土)午後1時から 連れ・雀・来る	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳 塔 まつ え	3日(土)午後1時から 冴える・変身・秘密・背	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崧丘
川柳 塔 唐 津	5日(月)午後1時半から 霜・収穫・お金	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
堺川柳会	9日(金)午後1時から 偉い(共選)・減る き・の・こ(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳 塔 打 吹	10日(土)午後1時から 理屈・雲・投げる	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博丈
川柳 塔 みちのく	10日(土)午後4時から 猿・前向き・急ぐ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-0161 青森県南津軽郡平賀町杉館字宮元53-1 小寺花峯
八尾市民 川柳 会	11日(日)午後1時から ロボット・虫・越す・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川柳 会	12日(月)午後1時から 決まる・以外・ネット・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわえ
尼崎 尾浜 川柳 会	13日(火)午後1時から 苦手・ふらり・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
ほたる 川柳 同好会	13日(火)午後1時から 地図・戻る・弾む	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎

編集後記

☆路郎賞・川柳塔賞のご応募、有り難うございました。10月号の発表に備え、鋭意準備中です。ご期待下さい。

☆10月10日の川柳塔まつりの事前投句、懇親宴、宿泊の申し込み締め切りは8月31日。この号が届いてからでも間に合いますので、よろしく願います。

☆本号からスタートの「樺様抄」は大反響で、多数のご応募をいただいた。厳選の中から選ばれた38句は、どれもビカビカ輝いている。これからも他の欄と同様に「樺様抄」をご鼠盾下さい。

☆某日、久々にフェスティバルホールのコンサートに行った。スロヴァキア・フイルハーモニー管弦楽団、指揮は齊藤一郎。ピアノはエリック・ハイドシエツ

ク。パンフレットの解説によると、80年の初来日以来

高い評価を得ていて、多数のファンを獲得しているというすごい演奏会らしい。

☆十年振りかのナマのフルオーケストラで、ベートーヴェンの「皇帝」、ブラームスの交響曲4番等を聴いた。その迫力にすっかり酔い、いい気分会場をあとにする時、会社員風の青年の会話を小耳に挟んだ。

☆「あんなスリリングな皇帝は、めつたに聴けん。スリリングとは危つかしい演奏、ということや」。「それに、弦楽器が全然歌ってなかったなあ」。

☆それを聴いて、物事に精通することは、どんな分野においてでも尊敬に値するけれど、無条件に楽しめなくなることもあり、幸せなのか不幸なのか——と考えつつ帰った。(ふ)

ひとこと

きり絵の表紙

表紙のご担当が創刊以来揮毫下さった直原玉青先生からきり絵作家の前田尋さんに替わられた。

前田さんは近年国際的にも活躍されている我が国きり絵界の大御所であり、川柳塔誌の更なる充実発展を約するにふさわしい方だと思ふ。

きり絵は、紙を素材にメスを使うという造形美術の新しいジャンルとして脚光を浴び始めて四半世

紀になる。筆先に技巧を求める書

や絵画とは異質の空間の中で、対象を丹念に切り取るその感性にしみじみとした情趣を覚え、はたまたその素朴さに温もりと歎びを感じるのも、川柳と一脈相通じるからであろう。

先ずは八月号の表紙に川柳塔社所在の大阪のシンボル「通天閣」を取り上げられたところに、作者の並々ならぬ意気込みが伝わってくる。句作りに一層励みたい気持ちに駆られた。(藤井則彦)

○今日は私の休甘日と言え

第。

ば、休肝日の間違いではな

○数値は病氣と名がつくほどでなく、ぎりぎり境界線あたりである。ところが血糖値ちよつと高めに、血圧

覚せねばならない。その上加齢という因子が加わると益々リスクは高くなる。

○お酒は吞めず大の甘党で

あたりである。ところが血糖値ちよつと高めに、血圧

○これらの生活習慣病を克服するには強い意志が必要、食生活に注意を払ひ、

近年検査毎に予備軍だから

コレステロール値の高めが加わると、動脈硬化、心筋

要、食生活に注意を払ひ、ウォーキング等の運動をすることである。簡単なよう

日が近づいている。

梗塞になる率はうんと高くなるそうである。一つ一つ

で続けるのは難しい。「老母がいる、夫がいる。まだ

○果物はビタミン摂取上必要だし、せめてお菓子を食

は大したことないが、三拍子揃うと大事に至る。安全

倒れるわけにいかぬ」と意志薄弱な自分に鞭打ちながらの毎日である。(希)

べない日を週に二日くらい

は設けなければという次領域に入っていることを自

志薄弱な自分に鞭打ちながらの毎日である。(希)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(11月号)

地名

市 県

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202



檸檬抄投句用紙

「洗 う」 (9月15日締切)

11月号発表

藤田 泰子 選 — 共選 — 仁部 四郎 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

県市
姓・雅号

地名

県市
姓・雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名		住所	電話	紹介者
		〒 —	—	—
<input type="radio"/> 年 <input type="radio"/> 年 月から 月から半年 月から一年				
9800円 5000円				
<p>該当の方に○をつけて下さい</p>				

〒545-0005

大阪市阿倍野区三明町2-10-16
 川柳塔社 (電話) 06-6629-6914
 ウエムラ第2ビル202

振替 00980-5-33368

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

11月号発表表（9月15日締切）

初歩教室 「親戚」(3句)	一路集 「お金」(3句)	檸檬抄 「洗う」(2句)	愛染帖 「3句」	水煙抄 「8句」	川柳塔 「8句」
三宅保州担当	出久重選	澤田和重選	藤田泰子共選	板尾岳人選	河内天笑選

12月号

檸檬抄「名簿」
一路集「鐘」「反省」
初歩教室「終わり」「早い」

本社9月句会

とき 9月6日(火) 午後5時半開場・6時半締切り
開催時間にご注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし
兼題 「動く」
「芯」
「絹」
「浅い」
「焼く」
井上桂作選
太田昭選
山本義子選
海老池洋選
宮西弥生選
河内天笑選
席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

本社10月句会は11回川柳塔まつりとして(10月10日)開催します。
(表紙裏を参照して下さい)

第24年度 夜市川柳募集

第4回「ド ア」西口いわ彘選
ハガキに3句 9月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇〇五年(平成十七年)九月一日発行

編集兼 発行人 河内 権治

印刷所 美研アクト

〒545-0005 大阪市阿倍野区三町二丁目一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(〇六)六六二九一六九一四番
振替〇〇九八〇一五三三三八八番

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

鳥取県総合芸術文化祭

第29回鳥取県川柳大会

とき 10月30日(日) 10時開場 13時20分開会
ところ 米子コンベンションセンター

「ビッグシップ」JR米子駅下車 歩3分
兼題と選者(各題2句・席題なし・出句締切12時)

- | | |
|-----|----------|
| 「指」 | 福原 たくし 選 |
| 「家」 | 牧野 芳光 選 |
| 「器」 | 徳田 ひろこ 選 |
| 「車」 | 小林 由多香 選 |
| 「釘」 | 恒松 町紅 選 |
| 「波」 | 濱野 奇童 選 |
| 「息」 | 泉 比呂史 選 |
| 「笑」 | 河内 天笑 選 |
- 表彰 鳥取県知事賞ほか
会費 2,000円(作品集・昼食呈)
欠席投句 1,000円 9月30日締切、用紙自由、作品集呈
事務局(投句先・お問合わせ先)
〒689-4201 西伯郡伯耆町溝口757-13
小西雄々方

主催 鳥取県川柳作家協会・文化団体連合会・鳥取県
後援 米子市・新日本海新聞社
鳥取県川柳大会実行委員会 宛
TEL 0859-62-1520

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) **6771-4861**(代)